



72nd

JAPAN-AMERICA

Student Conference

第72回日米学生会議 報告書

Endeavors for Peace:

Take from the Past, Give to the Future

過去から未来へ、日米平和の灯火を
~己と社会の価値観に挑め~

第 72 回日米学生会議

日本側報告書

謝辞

支えてくださった全ての方々に
心より感謝を込めて

第 7 2 回日米学生会議
日本側実行委員一同

第 72 回日米学生会議実行委員長よりご挨拶

戦後、75 年間にわたって伴走して来た日米両国の日米関係に、学生としてどのように向き合うべきか。我々学生の視点から見た際、日米関係はどのようにあるべきなのか。日米学生会議はこうした議論を行うための場である。

本年度の会議はその日米学生会議にとって、例年にも増して大きな意義を持つ回となった。COVID-19 感染拡大の影響を受け、働き方や暮らし方、社会そのものの価値観の見直しがされる中、日米学生会議もまた、その価値を根本から見つめ直す必要性に迫られたためだ。

会議を形成していた基本要項の遂行が困難となり、実行委員会では、連日オンラインでの議論が繰り返された。会議をやりたい、という想いは全員同じ。中止という選択肢は日米 16 名の実行委員にはなかった。問題はオンラインでも価値を残せるか、そのためにはどんな会議を行えば良いか、という命題に答えることであった。「変革の中、自分達に残せる価値は何か」を考え続けた。同じ目標を持っていながらも、日米間、さらには日本側実行委員会内でも意見の衝突が生じた。衝突の果てに 11 日間のオンライン会議が出来上がった。夏季会議をオンラインにて行う判断をした後も防衛大学校研修や合宿、ハワイでの冬季会議、沖縄自主研修をオフラインで行う試みをし続けたものの、あえなく阻まれ続けた。対面にて膝を突き合わせ、会議を行うことが日米学生会議の本懐であると言われる中、第 72 回日米学生会議は全面オンラインにてプログラムが終始した。しかしながら、参加者発表後の離脱者は 1 人も出なかった。

こうした背景もあり、本年度会議においては、実行委員会含む参加者全員が、「オンラインとなったこの会議で何を残したいのか、何が残せるのか」といった難題に、実行委員のみならず、参加者各々が挑み続け、形成されたものが本年度の第 72 回日米学生会議である。ここに記すはその軌跡である。

日米両国の先人達が紡ぎあげてきた過去を見つめ直す節目の年、また人類史におけるこの大きな転機において開催された年において、日米学生会議の灯火を引き継いだことを誇りに思う。

この灯火が今後も継続して価値を残し、更新し続けることを願う。

第 72 回日米学生会議日本側実行委員長
木村勇人

コロナ禍のあゆみ

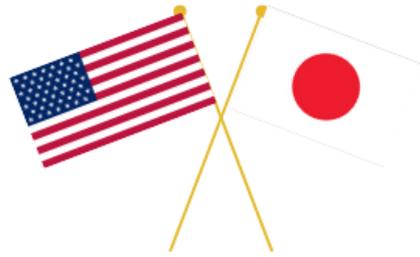
新型コロナウイルス感染症の発生及びその蔓延防止のため、2020年には対面での他者との接触が最小限に抑えられることが原則となった。元来、日米両国の学生で共同生活を送りながら会議を行う日米学生会議もその例外ではない。人と人との間の接触や、移動及び外出に伴うリスクを踏まえ、本年度会議では参加者の決定を行う選考プロセスから、会議、報告会にいたるまでのその全てをオンライン開催にて行った。以下にてその変遷を辿る。



2019.08.23	実行委員会発足
2019.09.12	訪問サイト（ロサンゼルス、ツーソン、インディアナ）決定
2019.10	学校説明会開始
2019.11.02	日米学生会議 85 周年記念式典
2019.12.07	第 71 回日米学生会議報告会/第 72 回日米学生会議説明会
2020.01.05	日米韓トライラテラル会議
2020.01.28	国際教育振興会賛助団体感謝の会
2020.02.21	二次選考のオンライン化へ舵きり 実行委員ミーティングの全面オンライン化
2020.03.07~27	二次選考オンライン開催
2020.03.29~31	参加者決定のための会議（オンライン）
2020.03.28	会議要綱の再検討
2020.04.25	事前研修の全面オンライン化と夏季会議のオンライン化に舵きり
2020.05.23~24	オンライン春合宿開催
2020.06.07	勉強会始動
2020.06.20	防衛大学校研修（オンラインハイブリッド型）開催
2020.07.04~05	オンライン事前研修
2020.07.11	会議の全面オンライン開催/冬季会議開催の正式決定 防衛大学校研修および秋合宿の開催検討
2020.08.11~18	夏季オンライン会議
2020.08.18	第 73 回日米学生会議実行委員会発足
2020.09.28	冬季ハワイ会議開催中止 オンラインファイナルフォーラム/冬季沖縄研修開催決定
2020.11.10	防衛大学校研修/秋合宿開催中止決定
2020.11.14~15	ファイナルフォーラム開催
2020.12.17	冬季沖縄会議開催中止決定

目次

実行委員長挨拶	夏会議 Day 7
コロナ禍のあゆみ	夏会議 Day 8
目次	夏会議 Day 9
	夏会議 Day 10
	夏会議 Day 11
第1章 日米学生会議	自主勉強会：中国
日米学生会議とは	自主勉強会：ジェンダー
略語リスト	自主勉強会：共学男子校女子校
	24時間 ZOOM Room について
第2章 第72回日米学生会議概要	夏会議総括
第72回日米学生会議テーマ	
実行委員会紹介	
日本側参加者リスト	
米国側参加者リスト	
	第5章 分科会活動
第3章 事前期間中活動報告	分科会活動とは
春合宿前の活動	分科会リスト
春合宿	環境と経済発展 分科会
防衛大学校研修	現代における健康のあり方 分科会
在福岡米国領事館合同勉強会	サイバー空間と脅威 分科会
若手懇親会	働き方と社会 分科会
デロイトトーマツ勉強会	ハードパワーと個人 分科会
オンライン事前研修会	文化とアイデンティティ 分科会
夏会議前決起集会	メディアと民主主義 分科会
第4章 夏会議報告	第6章 岐阜募金
夏会議 Day 1	岐阜サイトと日米学生会議
夏会議 Day 2	岐阜募金概要
夏会議 Day 3	募金名簿
夏会議 Day 4	
夏会議 Day 5	第7章 第72回実行委員あとかぎ
夏会議 Day 6	
	第8章 ご協力いただいた皆様



JASC72

第1章

日米学生会識



日米学生会議とは

日米学生会議は「世界の平和は太平洋の平和にあり。太平洋の平和は日米間の平和にある。学生もその一翼を担うべきである」という理念のもと、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮した4人の日本人学生により1934年に創設された80有余年の歴史を持つ国際学生交流プログラムである。

会議の本懐は、会議終了後も続く、生涯にわたる友情、信頼関係を構築することであり、歴史を通してその会議の形態は変更をしつつも、日米両国の学生の相互理解に寄与してきた。この草の根の交流を通し、日米両国のみならず世界の平和実現のために各分野で活躍している。

日米学生会議の歴史

1934年～1940年 初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

1947年～1954年 戦後の日米学生会議

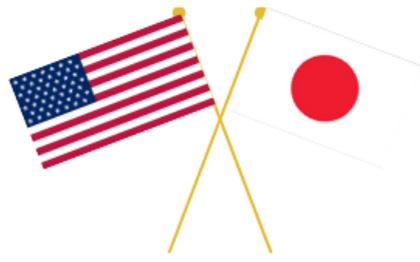
戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

1964年～ 今日の日米学生会議

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める一般財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を1ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。80年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

本文中の略語説明

略語	説明
JASC	日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer	日米学生会議現役参加者及び過去参加者
デリ	参加者 (Delegate)
ジャパデリ	日本側参加者 (Japa-Deli)
アメデリ	米国側参加者 (Ame-Deli)
EC	実行委員 (Executive Committee)
JEC	日本側実行委員 (Japanese Executive Committee)
AEC	米国側実行委員 (American Executive Committee)
IEC	日本側主催団体：国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	米国側主催団体：International Student Conferences, Inc.
アラムナイ	日米学生会議 過去参加者 (Alumni)
RT	分科会 (Round Table)
環境 RT	「環境と経済発展」分科会
健康 RT	「現代における健康のあり方」分科会
サイバーRT	「サイバー空間と脅威」分科会
働き方 RT	「働き方と社会」分科会
ハードパワーRT	「ハードパワーと個人」分科会
文化 RT	「文化とアイデンティティ」分科会
メディア RT	「メディアと民主主義」分科会



JASC72

第2章

第72回日米学生会議 概観



第 72 回日米学生会議概要



テーマ

過去から未来へ、日米平和の灯火を ～己と社会の価値観に挑め～

“Endeavors of Peace: Take from the Past, Give to the Future”

86年という長い時と二度の中断を経つつも、脈々と引き継がれ続けてきた日米学生会議に、第72回会議参加者として参加する意義は何か。この問いに対し第72回会議実行委員が行き着いた答えは、過去を省み、現代を見つめ、未来を創造するこれ以上ない機会に参加できるということであった。

2020年は、戦後75年、日米安全保障条約改定から60年という歴史的な節目の年であり、米国においては米大統領選挙が行われ、日本においては今後20年の日本を形作る東京五輪が開催される予定の年であった。会議の開催を目前にして事態は一変、会議テーマはより多くの文脈を含むものとなった。

コロナ禍の最中行われた第72回会議では、過去の先人たちの歩みを鑑み、その灯火を引き継いだ上で自らが担う未来について考えることが求められた。社会的価値の見直しが図られる中で、オンラインにて、価値観に挑むことを求める会議となったことは疑いようがない。

学生たちがこの会議で何を考え、「過去から未来へ、日米平和の灯火を」今後どのように繋ぐのか、ぜひご注目いただきたい。



会議概要

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第72回日米学生会議実行委員会

【後援】

外務省、文部科学省、米国大使館、一般社団法人日米協会

【開催期間】

会議開催期間：2020年8月8日～8月18日、11月14日～11月15日

事業実施期間：2021年4月1日～2021年3月31日

【参加者】

日本側：35名（実行委員8名を含む）

米国側：24名（実行委員8名を含む）

【開催地及び、日程】

オンライン：2020年8月8日～8月18日

ファイナルフォーラム：2020年11月14日～11月15日



第 72 回日米学生会議実行委員名簿

日本側実行委員会



木村 勇人
慶應義塾大学 法学部政治学科 3 年
第 72 回日米学生会議日本側実行委員長



小溝 舞
慶應義塾大学 法学部政治学科 3 年
第 72 回日米学生会議日本側副実行委員長
「現代における健康のあり方」分科



白石 智鏡
立命館アジア太平洋大学 2 年
「文化とアイデンティティ」分科会



武末 崇義
東京外国語大学 国際社会学部国際社会学科 3 年
「働き方と社会」分科会



野澤 玲奈
早稲田大学 文化構想学部国際日本文化論プログラム 4 年
「ハードパワーと個人」分科会



野村 紗里
九州大学 共創学部 3 年
「環境と経済発展」分科会



坂東 茉唯
早稲田大学 政治経済学部政治学科 4 年
「メディアと民主主義」分科会



深津 佑野
上智大学 法学部国際関係法学科 3 年
「サイバー空間と脅威」分科会

米国側実行委員会



Christopher Wever
Indiana University, Bloomington
第 72 回日米学生会議米国側実行委員長



Madeline Wiltse
Johns Hopkins University SAIS
第 72 回日米学生会議米国側副実行委員長
「環境と経済発展」分科会



Alec Mesropian
University of California, Berkeley
「メディアと民主主義」分科会



Carly Shiever
Hobart and William Smith Colleges
「働き方と社会」分科会



Celinda Chang
Tulane University
「サイバー空間と脅威」分科会



Emily Marlowe
University of California, Santa Barbara
「現代における健康のあり方」分科会



Kerry Walker
Smith College
「文化とアイデンティティ」分科会



Ryuichiro Suzuki
George Washington University
「ハードパワーと個人」分科会

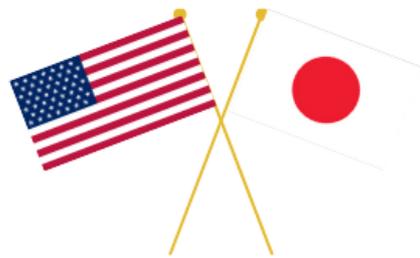
第 72 回日米学生会議 参加者名簿

日本側参加者

氏名	大学	学部・専攻	学年	分科会
崎山 遼	大阪大学	経済学部 経済学科	3	健康
佐藤 颯子	学習院大学	国際社会科学部国際社会科学科	3	健康
松本 章寛	群馬大学	医学部医学科	4	健康
濱田 真利奈	慶應義塾大学	法学部政治学科	4	健康
大井 雄磨	慶應義塾大学	法学部政治学科	2	ハードパワー
榎 唯衣	国際教養大学	国際教養学部国際教養学科	2	ハードパワー
太田 智寧	早稲田大学	政治経済学部 経済学科	2	ハードパワー
尾崎 純矢	九州大学	大学院工学府機械工学専攻	院 1	ハードパワー
反後 元太	東京大学	教養学部教養学科国際関係論コース	3	メディア
飛知和 志帆	早稲田大学	政治経済学部 政治学科 ジャーナリズムメディア専攻	4	メディア
松村 瑞希	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科 経営学専攻	4	メディア
東 綺伽	東京外国語大学	国際社会学部 東アジア学科中国語専攻	2	メディア
中澤拓也	岡山大学	経済学部経済学科	3	環境
初雁 藍	トロント大学	建築学部建築学・経済学・統計学専攻	4	環境
内林 大志	北海道大学	環境科学院	院 1	環境
矢野 隆	大阪大学	工学部環境・エネルギー工学科	2	環境
伊藤 駿介	明治大学	政治経済学部 政治学科	3	サイバー
須藤 直太郎	東海大学	工学部 航空宇宙学科	2	サイバー
小菅優介	慶應義塾大学	法学部 政治学科	3	サイバー
木村理紗子	早稲田大学	国際教養学部	1	サイバー
波田真友子	大阪医科大学	医学部医学科	2	働き方
鈴木悠太	東京大学	教養学部文科一類	2	働き方
西田優芽	福岡教育大学	教育学部 初等教育教員養成課程 英語教育専攻	4	働き方
亀井 龍	明治大学	法学部 法律学科	3	働き方
大東千潤	上智大学	国際教養学部国際教養学科	3	文化
生沼津嘉	防衛大学校	人文社会科学学部 公共政策学部	3	文化
関理々子	東京大学	前期教養学部	2	文化

米国側参加者

<u>Name</u>	<u>University/College</u>	<u>Major</u>	<u>Class</u>	<u>RT</u>
Audrey Ruth Bell	Colby Colleg	English and Japanese	2021	Health
Katsura Rosa Pennington	New York University	International Relations	2022	Hard Power
Siyu Li	Wellesley College	Economics and Philosophy	2023	Hard Power
Christine Heaton	University of Arizona	Japanese Language Studies and Information Science, Tech, & Art	2021	Media
Keisuke Wada	University of California, Berkeley	Political Science	2021	Media
Jio Francis Kamata	Akita International University	International Relations	2021	Environment
Rika Hamayama	University of South Florida	Women's and Gender Studies	2021	Environment
Victoria Liu	University of California, Berkeley	Environmental Earth Science and Japanese Language	2021	Environment
Maddie Moon	Wellesley College	Undeclared	2023	Cyberspace
Nanase Hayami	Bowdoin College	International Relations and Digital & Computational Studies	2022	Cyberspace
Fabiola Alvarez	Hamilton College	Dance and Japanese	2022	Labor
Justin Ken Kraft	University of Southern California	Business Administration	2023	Labor
Miriam Yokebed Piña	DePauw University	Computer Science and Japanese Studies	2022	Labor
Chelsea Suzuko Uchida Wells	University of Virginia	Foreign Affairs and Mathematics	2021	Culture
Michael Kleinlercher	State University of New York at Geneseo	History and International Relations	2021	Culture
Sachi Nishida	Soka University of America	International Studies and International Relations	2023	Culture



JASC72

第3章

事前期間中活動報告



事前活動報告

<春合宿前の活動>

4月下旬～5月上旬

本年において春合宿は新型コロナウイルス感染拡大の影響を鑑み、例年より約1ヶ月遅れて行われた。こうした運びの中で、全参加者は各々、自身の在籍する分科会での議論を行った。

参加者感想

春合宿に先立ち、各ラウンドテーブルは着々と動き始めていた。基本的には週に1回、オンライン上で参加者とECを含めた5人が顔を合わせる。定期的にミーティングが開催されるようになってからまだ1ヶ月程度だが、私が所属する「メディアと民主主義」のラウンドテーブルで、議論の甲斐があるニュースが次々と起こった。例えば、検察庁法改正先送りの問題は「SNSは、権力に対する監視、抑制機能を果たすか」との問いを提起する。また、NewYorkTimesは米国のコロナウイルスによる死者10万人のうち1000人の実名・年齢・居住地・ライフストーリーを掲載したが、これは「匿名報道の是非」という問いにつながる。たった1ヶ月の間でも世界で新たな論点を提起する様々なイベントが起きたのだから、冬会議までの8ヶ月、世界と私たちの視座がどのように変化していくのかがとても楽しみだ。

飛知和志帆

早稲田大学 政治経済学部 政治学科



「JASC っていうめっちゃ面白いプログラムがあるんよね」

この言葉が、私と JASC というものの初めての出会いだった。過去参加者である友人から、JASC での経験やそこに集う学生についての話を聞くうちに、私は自分の内側がなぜか熱くなっていくのを感じていた。その時の私が実際に熱を持っていたのか、友人の熱量が伝わっただけなのかは分からない。しかし話を聞きながら、私はいつしか自然に自分が参加をしている姿をイメージし、久しく感じたことのなかった高揚感に包まれていた。

私は、JASC に対して明確な目標があって参加を決意したわけではなかった。しかし、この機会を自分史に残せる経験にする覚悟はある。その覚悟を持って行動していくことで、目指すべきものはおのずと見えてくるのではないかと考えている。私が所属する分科会での活動も動き出し、他の参加者や EC の方々は友人から聞いた話と違わぬ、魅力的な人ばかりである。このような方々と議論を重ね、後に JASC を振り返るときがきたら、その時そこにどんな自分が立っているのか、今から楽しみで仕方ない。COVID-19 の影響により、例年の JASC とは違ったものになるかと思う。しかし私は、どんな時も本質である「本音での対話」を忘れずに活動をしていきたいと思っている。

尾崎純矢

九州大学 大学院工学府 機械工学専攻



【春合宿】

2020年5月23日～5月24日

例年、都内のオリンピックセンターにて開催され、日本側参加者にとっては初の顔合わせの機会となる春合宿を、本年度はオンライン形式にて開催した。参加者は開会式を通し、日米学生会議の参加者としての入り口に立ち、自身とともに第72回日米学生会議参加者として歩む27名の参加者、8名の実行委員とオンラインにて懇親を深め、事前研修や夏会議に向けての第一歩を踏み出した。

プログラム内容

5月23日

・開会式

国際教育振興会前代表理事・理事 伊部正信様ご挨拶

国際教育振興会代表理事 金野洋様ご挨拶

日本側実行委員長木村勇人、米国側実行委員長

クリストファー・ウィーバーによる開会挨拶

・自己紹介・アイスブレイク

27名の参加者と8名の実行委員による自己紹介

5月24日

・RTタイム・レポートタイム

既に始まっている分科会活動の進捗状況や、これからどんな議論をしたいのかなど他のRTのメンバーとの共有

・オンラインようこそ先輩

オンラインにてアラムナイの方と初めての交流

<春合宿初日>

5月23日

春合宿初日は、日米学生会議の「入学式」である。日米学生会議の日本側主催団体である国際教育振興会前理事の伊部正信様、及び現職理事の金野洋様よりご挨拶いただき、第72回日米学生会議としてのスタートを切る日となった。

参加者感想

「JASCの参加者は想像以上に個性あふれる人ばかりで面白い」「JASCを通じてどれだけ成長できるか楽しみだ」、これらが春合宿初日を終えての私の感想である。JASC史上初のオンライン開催ということもあり、ECやデリの皆と無事に仲良くなることができるだろうかと心配していたものの、個性あふれる仲間の自己紹介は非常に印象強く、鮮明に頭に残り、一気に距離を縮めることができた。また、アイスブレイクでは更に各々の個性が発揮され、気付くとそこには一致団結した空気ができ上がっていた。オンラインにもかかわらず急速に結束を高められたのは、ECによる洗練されたプログラム構成、JASCのタメ口文化、そしてメンバーの個性の強さがあってこそだと感じている。

その個性豊かなメンバーで今後、どのように第72回日米学生会議に参加していくのか。開会式の挨拶でお聞きした「日米学生会議は教育機関の間でもある」という言葉がその糸口となる、と考えている。

オンラインだからこそできることを考え、将来の担い手としてこの教育の機会を最大限意義あるものとする、それがJASC72参加者の使命の一つであると実感した一日だった。

中澤拓也

岡山大学 経済学部 経済学科夜間主コース

オンライン春合宿の二日目は、Joint RT Report Timeで、各分科会のこれまでの議論や今後の見通しを交換し合った。私たちの分科会の発表のために、これまでの議事録を見直したり、フィールドトリップ（オンライン開催）の構想を立てたり、そもそもの分科会としての目標を改めて設定したりできたため、今後の分科会活動に向けて重要な機会となった。他の分科会の発表を聴く中では、COVID-19の影響という側面からも各々の分科会のテーマを考えようとしている人たちがやはり多いということを知った。また、他の分科会が企画しているフィールドトリップは、私にとっても興味深いものばかりで、参加してみたいと思った。続いて実施された「ようこそ先輩」では、日米学生会議の先輩方から、当時の経験や、JASCがその後どのように生かされたかなどを熱く語っていただいた。その中で、私自身が日米学生会議の議論にどう臨むべきか、何を考えるのがよいかなどを考えるための重要なアドバイスをいただくことができた。私も、来年以降、卒業生として「ようこそ先輩」に呼ばれて後輩たちに伝える立場になりたいと思った。春合宿は二日間かつオンライン開催ではあったが、非常に有意義な時間を過ごすことができた為、今度のイベントが今の時点で既に楽しみで仕方がない。

亀井龍

明治大学 法学部法律学科

<JASC Café>

5月24日

第72回会議では、オンラインにて夏会議および事前研修を行うことを受け、日米参加者の交流を事前研修期間から密に設けることを目的にオンラインの交流会、JASC Cafeを開催した。会の運営は米国側実行委員が担い、日米両国の参加者の交流機会として、会議期間を通じて複数回行われた。

参加者感想

春合宿の二日目の午前、zoomにて初めてアメリカの参加者との交流を行った。私にとって、今回が初めてのアメリカ側の参加者との対面、交流であった。全体での実行委員の自己紹介の後、少人数に分かれて交流を行い、私たち参加者も自己紹介を行った後、「小さい頃の将来の夢は?」「猫派それとも犬派?」といった簡単な質問に答えていくなどして、アイスブレイクを行った。簡単な質問で答えやすく、話も弾み、楽しく交流を行うことができた。実際にアメリカ側との交流を通して、これが日米学生会議かといった雰囲気を感じる時間でもあった。アメリカと日本という国境を超えて、幅広い視点から話し合いをしていくことが日米学生会議の魅力の一つでもあるので、コロナ禍の中でも開催できることのありがたさを噛み締め、これから、より対話を深めていきたいと思う。今回は、お互いを知るきっかけになり、楽しく気軽に話をする事ができて良いスタートを切ることができ有意義な時間になった。アメリカとの合同分科会など、今後増えていくであろう日米を超えた活動がとても楽しみである。

西田優芽

福岡教育大学 教育学部 初等教育教員養成課程



<ようこそ先輩>

2020年5月24日

例年春合宿にて、新たな代のJASCerを迎える行事として「ようこそ先輩」が行われる。85年間、計71回行われた日米学生会議の過去の参加者を迎え、日米学生会議での経験やアドバイスなどを共有していただく時間となる。

参加者感想

春合宿2日目の午後に、日米学生会議のアラムナイの皆様と顔合わせをする「ようこそ先輩」の時間が設けられた。本年はオンラインでの開催となったが、同じ日米学生会議という経験を共有されている先輩方の大変興味深く、示唆にも富んだお話を聞くことができた。特に、参加回の違いによる日米学生会議の議題の変化を聞く中で、日米の国際的な立ち位置が時代とともに変遷していったことや、日本国内での社会的な意識が変わっていったことに気づかされた。これは、異なる年代のアラムナイの皆様とのお話を通してこそ得られる視点だったと思う。そして、戦中から令和の今日まで日米学生会議は変化し続けており、第72回についてもオンラインという新たな変化に直面していることを改めて実感した。その一方で、日米学生会議に参加する人の根底には、好奇心の強さや自身の価値観への挑戦といった共通事項も存在するという言葉も伺った。私には、これこそが、変化を伴いながらも、日米学生会議が72回目の開催に至っている理由であるように思える。この「ようこそ先輩」の機会を通して、私もこの日米学生会議の中で成長していきたいと身が引き締まる思いがした。お忙しい中お時間を割いてくださったアラムナイの皆様に、改めて御礼申し上げたい。

内林大志

北海道大学 環境科学院 生物圏科学専攻



春合宿の2日間が終了した。初めての全体イベントを終えた私の率直な感想を述べる。私がこの2日間を終えて真っ先に感じたことは「『第72回』日米学生会議に参加して良かった」ということだった。正直にいうと、恥ずかしながら春合宿直前までの私は「どうして今年に合格したのだろうか、参加すべきだろうか」という気持ちがあった。それはもちろんコロナ禍の中大幅な予定変更があったからだ。しかし、春合宿を終えた今ははっきりとそれが杞憂だったと言える。春合宿ではオンラインにも関わらず、まるで目の前で話しているかのように議論し、笑い合うことができた。これから待っている夏会議もきっと素晴らしいものにできると確信した。

次に感じた気持ちは「感謝」の気持ちであった。春合宿のプログラムが進むたびに、未曾有のコロナ禍の中、実行委員や運営母体の方々の想像を絶するような苦労があったからこそ、この会は開催されていることを切々と感じた。加えてJASC Caféでは米国側の実行委員および参加者、ようこそ先輩における偉大な同窓生の皆様方の協力があったからこそこのような素晴らしい経験ができた。そして未曾有のコロナ禍のなか一緒に歩むことを決めてくれた参加者の皆には感謝しかない。

これからもオンラインだからこそできることをモットーに、この素晴らしい友と共に夏会議に向けて尽力する覚悟を新たにした。

松本章寛
群馬大学医学部医学科

実行委員総括

第72回日米学生会議の春合宿は、私が企画・運営をしたイベントの中で最も記憶に残るものである。春合宿は、2泊3日の平凡な学生の合宿ではなく、新たな27名を迎え入れる日米学生会議の入学式とも言われるほど、正式な儀式の場でもある。この厳格さと、緊張している参加者同士の初顔合わせをリラックスして行える環境をオンラインで両立させることは骨の折れる作業であった。それでも、他の春合宿担当と相談に相談を重ねることで、最終的には満足いく形での開催が実現できた。慣れないオンラインという環境で、なぜ春合宿が実現できたのかと考えると、多くに人の協力があったことに思い当たる。プログラムを企画している最中には、目の前の仕事に追われ、いかに沢山の方の協力をいただいていたのかが理解できていない自分がいたが、合宿終了後の振り返ると、私は、数えきれないほど多くの人から実現の手助けを受けていたことに気が付いた。オフラインの合宿であれば、これほどまでに助けを必要とすることも無かったであろうし、オンラインという初の試みであったからこそ、人の優しさを感じられた、そんな思い出に残る春合宿であった。

小溝舞
慶應義塾大学 法学部政治学科

【防衛大学校研修】

2020年6月20日

防衛大学校研修は日米学生会議の事前活動の一つとして位置付けられる、大変意義深いイベントであり、日本側参加者に向けて毎年開催される。安全保障について、専門的な見識を広め、身近な同世代でありながらも安全保障の分野に当事者として向き合う防衛大学校の学生の日常を見学し、生の声をお聴きすることで、防衛大学校や、日本における安全保障に関する理解を深めることを目的としている。防衛大学校研修では、同大学校教授より特別講義を受けるとともに、防衛大学校生徒との対話や討議の機会を設け、相互に刺激を受け、高めあえる環境を築く機会を設けている。参加者は毎年、自身とは異なる安全保障に関する観点や、生活のあり方と触れ、衝撃を受け、自分の価値観を覆される体験をする。

プログラム内容

・特別講義

武田康裕教官による「日本の安全保障と日米同盟」

・学生討議

いずれ日本の防衛の最先端に立つ防大生と、本音の議論を深める時間を設けた。分科会のテーマに沿った議論を1時間半の中で行い、分科会メンバーとの議論に一石を投じるような、新鮮な時間となった。



各分科会ディスカッショントピック

環境と経済発展 分科会

途上国の越境性を持つ環境汚染は安全保障上の脅威たりうるのか？

今日における世界の生産業の中心を占める中国やインドの環境汚染は越境性のある問題であるといえる。こういった問題は“環境の安全保障”と呼ばれ、今日では非伝統的安全保障の一角を作りつつある。しかし、この議論には安全保障の脅威の幅を広げすぎているという指摘もある。今日、安全保障上の脅威として示されるものの指数は「攪乱の意図の有無に関係なく…攪乱を引き起こすかどうかの作用は、安全保障主体の判断に委ねられる。」（『安全保障学入門』第5版330頁～331頁）とされており、定義にはあいまいさが付きまとう。

こういったあいまいさの中で、越境性を持つ環境問題というのは本当に安全保障上の脅威たりうるのか？純軍事的視点を持つ学生と、シビリアンの視点を持つ学生による議論でこれを追求する。

現代における健康の在り方 分科会

大規模感染症発生時の軍事セクターと民間セクターの在り方とは？

昨今のコロナウィルスの蔓延に伴い、各国の社会活動は停止し、人類のその脆弱性が露呈した結果となった。しかし、その対応において、軍民両セクターは一定の実績を残している。具体的な支援としては、アメリカにおいては、工兵隊による野戦病院の構築・病院船の派遣、日本においては、自衛隊衛生部隊による治療支援等が行われている。そのほかにも、民間セクターへの技術支援（防護服着用方法の教育支援等）が行われている。

今回のような未曾有な大規模感染症が発生した時、軍民の両セクターはどのような関係性をもって対処すべきなのか？その関係性を今回のコロナウィルスへの対処実績をもとに、軍民の学生サイドの視点から追求する。



サイバー空間と脅威 分科会

サイバー戦における個人情報の利用はどの範囲まで可能か？

サイバー戦は「第5の戦場」と呼ばれるように、今日の安全保障上の脅威であり、手段となりつつある。脅威は個人情報、国家機密を奪うほか、戦場においても、その手段を駆使してくる。その過程で個人情報や暗号化された情報にアクセスをかけてくることはこれまでのウクライナ、タリンなどの事例から自明である。

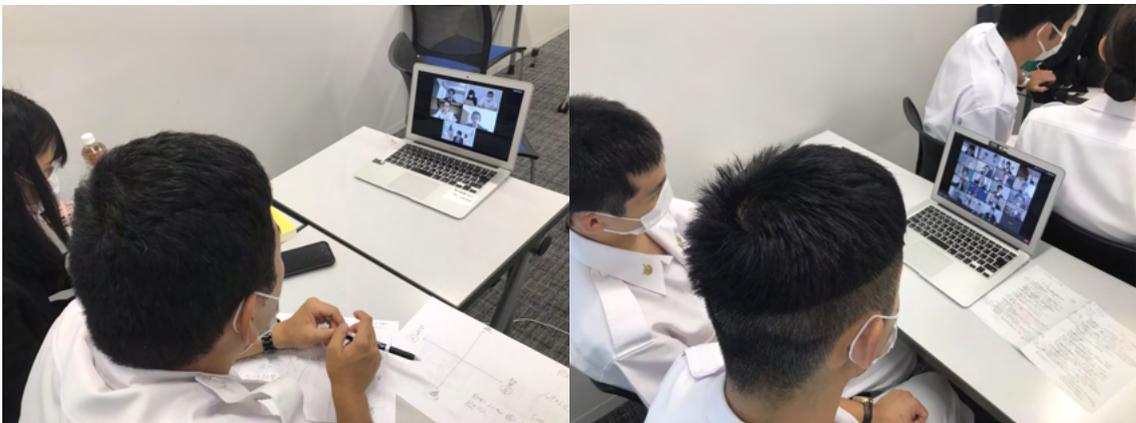
これに対抗するためには、個人情報の監視を常に行い、警戒し、情報を収集すべきである。しかし、近代国家においてはプライバシーの問題などからこれを積極的に行えるとはいいがたい。このような安全保障上の必要性と倫理観が対立する戦場であるサイバー戦においては、その個人情報の利用はどのような条件で、どのような範囲まで可能なのであろうか？

働き方と社会 分科会

軍隊組織におけるジェンダーの在り方とは？：機能的側面か機会的側面を優先するのか

今日の軍隊組織においては、女性の参加が積極的に行われている。現状として、自衛隊では初の女性空挺隊員・戦闘機パイロットの誕生と潜水艦への女性搭乗許可が発令された。米軍においては、初の女性海軍大将：海軍作戦副部長への就任が決定される等、その動きは確実に来ている。一方で、戦闘能力の発揮等の面からこの動きを疑問視する意見もある。軍隊という特殊環境においては、戦闘職種などの考慮条件を含めた場合の意見は多様である。

このような議論がある中で、軍隊組織において、女性の平等な登用は機能的側面を優先させるべきなのか、それとも機会的側面を優先させるべきなのか？この議論をシビル・ミリタリー双方の目線から討議する。



ハードパワーと個人 分科会

深刻な人道危機に対しては軍事力を用いるべきか？それとも非軍事的手段で対処すべきなのか？

人道的介入として、これまでに強制力を持つ国々が自国に直接的な実害のない他国に軍事介入をしてきた例には事欠かない。その思惑がいかなるものであれ、人権侵害は見捨てられるべきものではないだろう。しかし、人道的介入には軍事力の行使が伴うことが多く、これは介入される当該国の主権を明確に犯していることにもなると指摘されることがある。

このようなジレンマが存在する人道危機に対しては果たして、軍事力を行使した介入：人道的介入なのか、それとも、非軍事的手段を用いた国際協調による外交的な介入：保護する責任を志向するべきであるのか？

文化とアイデンティティ 分科会

『文明の衝突』はなぜ、起きているのか？そして、それは解消できるのか？

サミュエル・ハンチントン氏が『文明の衝突』の中で、「冷戦後の世界において、文化は分裂を生み出す力であり、また統合をうながす力である。」としているように、その文化が持つパワーは無視することはできないだろう。ハンチントン氏の『文明の衝突』は賛否両論あるものの、実際の国際情勢を読み取る範囲では、実際に生起しているものと言わざるを得ない。文明が違うだけで、冷戦後の世界はなぜ、それを理由に争うようになったのだろうか？そして、これを解消することは我々人類にとって可能なのであろうか？

メディアと民主主義 分科会

報道で見る戦争が与えた民主主義国家における戦争遂行への影響とは何か？

初めて食卓に戦争が持ち込まれたのはベトナム戦争といわれている。日々のベトナムでの生々しい戦闘をアメリカの国民は食事をしながらほぼリアルタイムでそれを見ることができたのである。この風景は今日において、ありふれたものとなった。湾岸戦争・イラク戦争・アフガニスタン戦争そして、シリア内戦等、今日の戦争・紛争で行われる戦闘風景は我々の一般生活では極めて普通に目にする光景となった。

その光景をみて、民主主義に慣れ親しんだ日本国民・政治家の戦争遂行・安全保障政策に対する意識は一体どのように変化したのだろうか？また、報道の映し方はいかにその影響を変えたのか。そして、それが生んだ実際に血を流す兵士と血を流すことのない一般市民に与えた影響とはいかなるものだったのか？

参加者感想

毎年 JASC での夏会議前に訪問している防衛大学校研修は、今年は感染症の影響もあり、オンラインでの開催となったが、オンラインだからこそ画面上で、対面しながら議論に集中できたことは、防衛大学生と、というよりも、1人の学生として向き合えた、大変良い機会となった。4時間の半分を防衛大学校所属教官によって、[日米の安全保障と日米同盟]というテーマから出てきた11点の質問に答える形で講義をしていただいた。そして残りの半分の時間で、実際に防衛大に所属する学生の方々とディスカッションを行い、私の所属するハードパワーと個人分科会では、<人道的介入の是非>について、議論を重ねた。

私たちの所属する大学とは異なり、日本で唯一の省庁大学校であり、5分刻みで訓練や、勉強、部活動を含む、正反対の学生生活を送っている同世代の防衛大学生との交流を経て、常識だと思っていた自らの固執した価値観を揺るがす大きな経験となった。

特に、国を代表し、自衛隊として活躍する存在を任せられている立場としての責任感を強く感じ、また、そうして卒業後の将来が決まっている彼らにとって、未来に対する確固たる思いや、信念が共通していたため、揺がない意志を育む防衛大のあり方を垣間見られたような気がした。

一方で、そうした学生と議論する上では、私たち日米学生会議に参加している側としても、責任ある発言と表現を心がける必要があることを実感させられた。お互いに異なる価値観や、考え方の軸をもつ立場として、どんな意見を述べる際にも、その背景にある思いや意図をきちんと説明することで疑問や違和感がなくなり、equityが確立された議論につながることを学んだ。私の分科会に所属するメンバーの1人の言葉を借りて、「無自覚と無知ではなく、正しい知識と思いやりの意見」を意識し、特にオンライン上という互いの思いが伝わりにくい中での議論も正当に行えるよう意識していきたい、と実感できた研修だった。

榎唯衣

国際教養大学 国際教養学部 グローバルビジネス学科

実行委員総括

緊急事態宣言後、初の外部研修となった本イベントを企画する機会をいただけたことは大変光栄なことであったと振り返る。

私自身、参加者として臨んだ研修の中でも、防大研修は1位・2位を争うほどに充実し、学びの多い研修であったことを記憶している。そして例によらず、広報活動や選考活動を通じて多くの応募者/参加者が期待を寄せていることを知った。実行委員就任後は、自ら本研修の担当者に手を上げ、最上の学びを参加者に届けたいと様々な仕掛けを考案しながら研修企画に励んだ。また、受け入れ先である防衛大学校生からの期待値が高いことも知り、企画運営にさらなる熱を持って臨むようになった。

しかし、ひたむきに企画を進めていた本研修も2020年4月に発令された緊急事態宣言の影響で頓挫を余儀なくされた。「防衛大学校研修に参加することがとても楽しみです」と満面の笑みで話してくれた応募者の顔が頭から離れず、どのような形であっても本研修を続行させたいと、防衛大学校側の担当者と実行委員の武末の3人で議論を重ねた。防衛大学校を中継地としてオンライン研修を行うことが、情報セキュリティの観点から困難であったため、ご協力いただく防衛大学校生の皆さんにとり、安全で感染リスクを徹底的に予防するためには何が必要であるか、限られた時間の中で試行錯誤する毎日であった。

そのような背景がありながらも、本研修はハイブリッド形式で無事決行することができた。

その後、「このような状況で、本研修を企画してくれてありがとう」という声を聞き、喜びも一入であった。また、防衛大学校生とのディスカッションを定期的に継続している参加者がいることを知り、本研修を契機にさらなる人脈の広がり、そして学びの深堀があることは、実行委員冥利に尽きる。

本研修を実現することができたのも、一重に柔軟に対応いただいた防衛大学校の皆様のおかげだ。本感想の結びに代えて、感謝の意を表す。

深津佑野

上智大学法学部国際関係法学科

【在福岡米国領事館合同勉強会】

2020年6月11日、7月1日、7月22日

「選挙人団」、「日米における経済協力と九州」「ソフトパワーの伝達力と影響力」をテーマに行った在福岡領事館との合同勉強会。

勉強会は3回にわたって行い、領事からのレクチャーを踏まえ、領事、アメリカンセンターの宮石建治様も交えて参加者同士が議論を行い、その後グループごとに話し合った内容を共有する時間を設けた。在福岡米国領事館ならではの、「九州」の視点を交えたレクチャーに加え、夏季オンライン会議で扱うトピックでもある「米国大統領選挙」や「ソフトパワー」についての事前知識を深め、夏季オンライン会議でアメリカ側参加者とより活発な議論を行うにあたり、とても有意義な時間となった。

第1回：2020年6月11日 「選挙人団」

(登壇者 John C. Taylor 首席領事)

第1回目の勉強会はJohn C. Taylor 首席領事をお招きし、2020年11月に控えた米国大統領選挙に向けて、アメリカの選挙形態についての知識を深めることを目的とし開催された。勉強会は米国大統領選挙プロセスについてのレクチャーを受けた後、質疑応答を行い、小グループに分かれて議論を行い、最後に全体で議論した内容を共有し合うという形で進められた。タイムリーなテーマでありながら、日米の政治体制を知る上で欠かせない勉強会となった。

プログラム内容

- 18:00-18:05 開会挨拶/登壇者紹介
- 18:05-18:20 レクチャー
- 18:20-18:35 質疑応答
- 18:35-18:40 休憩
- 18:40-19:00 小グループに分かれて議論
- 19:00-19:15 全体での発表
- 19:15-19:17 閉会挨拶
- 19:17-19:20 閉会

ディスカッショントピック

- ・民主主義はマイノリティの政治的意見をどのように取り込んでいくべきか？
(キーワード: 民族の多様性、所在地の特権(地方/都市)、選挙プロセス、年齢、性別)
- ・「選挙人団」のメリットとデメリットは何か？

- ・現在の日本の政治体制は米国の影響を強く受けているが、日本の選挙は独特である。これはなぜか？日本が同じ選挙制度を導入したらどうなるか？
- ・米国、日本においてメディアとお金（経済）は政治にどのように影響しているか？

参加者感想

直前研修勉強会第一回目は、在福岡アメリカ領事館のテイラー首席領事に“選挙人団”という演題でご講演いただいた。アメリカの選挙制度を、わからない人にもわかるようにひとつひとつ丁寧に説明していただいた。特に、州ごとの人口の差が上院・下院の議員定数にどのように影響しているかや、歴史的にイギリスがどのように影響してきたかなど、さまざまな視点を絡めて具体的に話をしてくださった為、大変わかりやすかった。個人的にアメリカの選挙制度は日本の選挙制度と違って複雑だという印象があり、その誤解が解けて、私自身とても勉強になった。

その後、小さなグループに分かれディスカッションを行い、私達のグループではメディアとお金の選挙への影響について議論した。これらの関係は非常に根深く、ディスカッションを通して演題の理解がより深まったと感じている。また、直前研修までになにを勉強するべきかが見えてきた。

お忙しい中、お時間を割いてくださった在福岡アメリカ領事館のみなさま、ありがとうございました。

初雁 藍
トロント大学建築学部



- 18:00-18:05 開会挨拶/登壇者紹介
- 18:05-18:25 レクチャー
- 18:25-18:35 質疑応答
- 18:35-18:40 休憩
- 18:40-19:05 小グループに分かれて議論
- 19:05-19:15 全体での発表
- 19:15-19:20 閉会挨拶
- 19:20-19:25 閉会

ディスカッショントピック

- ・アメリカと中国は将来の日本の経済にとってどれほど重要か？なぜか？
- ・日本はアメリカ、または中国に対してどのような経済政策をとるべきか？

参加者感想

これまで、日米関係を安全保障という視点で考えてきた私たちにとって、経済という視点から、またアジア地域と範囲を広く捉えて考えることで新たな日米関係、さらに多国間での国際関係を考える機会となった。特に、Rakove 氏から受けた講演を通して、現在の中国の掲げる一带一路構想、アジアの国々における経済支援の現状などを詳しく知ることができた。また、日米欧州での繋がり的重要性を中国の発展途上国への支援体制を知ることによって、よりその大切さを感じることができた。九州、アジア、そして世界の経済といった視点を元に国際関係を捉えることができ、軍事同盟を考えるだけでは見えてこなかった、思考の深まり、また複雑さを感じ、日米という視点のみならず、さらに広げた国際的な視点で、各国の関係性を考えることができた時間となった。九州に住んでいる立場から見ても、福岡で各国との経済協力を行おうという取り組みが行われていることを知り、遠いように感じていた、国家の経済協力を身近に感じることができた。

西田優芽

福岡教育大学、教育学部、初等教育教員養成課程

第3回：2020年7月22日「ソフトパワーの伝達力と影響力」

(登壇者 Yuki Kondo-Shah 広報担当領事)

最後の勉強会では Yuki Kondo-Shah 広報担当領事をお招きし、「ソフトパワーの伝達力と影響力」というテーマで、ハードパワーからの視点のみでなく、日常的に影響を受けているソフトパワー、また政治システムに影響を与え、弱体化させるための外交政策である「シャープパワー」について考察を深めることを目的とし、開催された。オンライン夏会議でも取り上げられる「ソフトパワー」についての事前知識を深めるだけでなく、その影響力について当事者意識を高め、議論が白熱する大変有意義な勉強会となった。

プログラム内容

- 18:00-18:05 開会挨拶/登壇者紹介
- 18:05-18:30 レクチャー①
- 18:30-18:40 小グループに分かれて議論
- 18:40-18:50 レクチャー②
- 18:50-18:55 まとめ
- 18:55-19:10 質疑応答
- 19:10-19:15 閉会挨拶
- 19:15-19:20 閉会

ディスカッショントピック

- ・ COVID-19 は国家やコミュニティを分断させたが、ソフトパワーはどのようにアメリカと日本をつなぐことができるのか？
 - 政府から政府へ
 - 民間セクター/ビジネス
 - 教育、文化、草の根運動
- ・ 国々は「シャープパワー」に対し、どのように対処すべきか？



参加者感想

今回の勉強会や分科会での活動を通して、「ハードパワー」や「ソフトパワー」、「シャープパワー」といった概念について学び、議論を重ねてきた。その中で私が感じたのは情報の持つ力の大きさである。コロナ禍において誤情報が飛び交い、トイレットペーパーがなくなるといった出来事もあり、たった一つの発信から大きな影響を与えてしまうことに怖さも感じた。インターネットが発達した現代においては、悪意を持って情報を発信することで人々の行動を意図的に操作し、限定してしまうことも容易になっている。自由に情報にアクセスできる世の中であるからこそ、私たち個人がその情報を精査し行動することの重要性を改めて実感した。

尾崎純矢

九州大学大学院 工学府 機械工学専攻

実行委員総括

昨年の第71回会議でも佐世保基地訪問でお世話になった在福岡米国領事館広報部/アメリカンセンターの宮石建治様をはじめとする在福岡米国領事館の方々の多大なるご協力で、John C. Taylor 首席領事、Daniel Rakove 政治経済担当領事、Yuki Kondo-Shah 広報担当領事のお三方をスピーカーとして迎え、本勉強会を実現することができた。ディスカッショントピックを考える企画の過程で、「どのような議題が参加者にとって面白い議論に繋がるのか」を領事館の皆様とともに熟考することは企画担当者自身にとっても大きな学びとなった。第72回日米学生会議は対面で会うことが困難であった一方で、その逆境が例年以上にオンラインツールを最大限に活かした機会創出に繋がったのではないかと考える。実行委員主催の本勉強会が、少しでも参加者主体の勉強会企画のモチベーションに繋がっていれば幸いだ。本勉強会の実現にお力添えをいただいた、在福岡米国領事館の皆様はこの場をお借りして改めて深く御礼申し上げます。

野村紗里

九州大学 共創学部

【若手懇親会】

2020年7月8日、2020年7月11日

第51回会議以降の日米学生会議アラムナイの皆様にご協力いただき、ご参加いただいたアラムナイの皆様と第72回日米学生会議参加者による若手懇親会を設けさせていただきました。「JASC後の未来を想像する」をテーマとし、日米学生会議後の経験や、実行委員としての活動内容、さらにはキャリアパスや、生き方についてなど、様々な角度からお話をお伺いする機会とすることを目的とした。参加者にとって今年の日米学生会議への参加をどのように位置付けるか、この経験をどのような場面で生かすのかについてイメージを膨らませる良い機会となった。

プログラム内容

A 日程 2020/7/8 19:00-21:00

B 日程 2020/7/11 14:00-16:00

参加者感想

今回の若手アラムナイ懇親会は、より年の近いアラムナイの皆様と二日間交流する機会を設けて頂いた。

水曜日の懇親会では、アラムナイの先輩方に過去のJASCでのご経験について質問をしながら会話を楽しみ、また土曜日の懇親会では、ディスカッションを通して、JASCの真髄である対話を今年の参加者とだけでなくアラムナイの皆様ともすることができた。

多くのアラムナイの先輩方と意見を交換し、JASCでの経験を共有することができたという点で有意義だったのはもちろんだが、自分としてはもう一つ、就職活動の話が非常に印象的だった。就職活動を来年に控えている中で、自分の中にある漠然とした不安を伝えたところ、アラムナイの皆様が過去の経験を共有してくれるだけでなく、今感じている仕事への想いや難しさを共有してくださった。ブレイクアウトルームにいる全員が仕事について深く考える時間となった。就職活動に対する自分の意識が変わるのを感じたとともに、回を隔てても「共感」が生まれるプラットフォームと人があるJASCの素晴らしさに改めて気づいた。

この度は、このような機会を作ってくれたECの皆様、お忙しい中お時間を割いてくださったアラムナイの皆様へ深く感謝申し上げますとともに、第72回の参加者としてそのようなJASCでありつづけたいと強く思った。

内林大志

北海道大学 環境科学院生物圏科学専攻修士

実行委員総括

まずこの場を借りて改めて、懇親会にご参加いただいたアラムナイ参加者の皆様に厚く御礼申し上げたい。大変急な企画にも関わらず、第51回会議から第71回会議まで様々な代の JASCer の先輩方計 38 名にご来場いただいた。この度オンラインにて開催された春合宿よろこ先輩に加えて、懇親会を設けさせていただいたことにより、これまで以上に参加者がアラムナイの皆様と密な交流を行える環境が実現した。日米学生会議の本懐はその会議後にある。会議にて学んだことやその繋がり、考えたことを自分なりに長い期間をかけて消化し、日々の生活のなかで自覚する中で初めて日米学生会議の影響を感じるものであると認識している。私自身、第71回参加者として参加した際の感情や発見を消化しきれていない。学生会議期間中にアラムナイの方々と密な交流を行うことは学生会議をどう生かすかや、JASC 後の未来についてを考え、学生会議期間を最大限生かす経験になると考えた。寛大な先輩方のご助力をいただき開催できたこの会は、JASC を真に Life Changing な経験とするための自身にとっても大変有意義な機会となった。

木村勇人

慶應義塾大学法学部政治学科



【デロイト勉強会】2020年7月12日

デロイトトーマツコンサルティング（以下デロイト）にお勤めのアラムナイ、第66回参加者の大沼様、加藤様にご協力いただき、Planetary Health～Post COVID-19のシナリオについて議論をする勉強会を行った。

日米学生会議の議論において、自由なディスカッションを繰り広げる参加者が新たな思考方法を得るきっかけとなることを願い開催された本勉強会では、ゲストの方々の講演後、ワークショップ形式で大きな問題の構造を分析する試みをした。解決までの道筋を立てることを学ぶ中で、参加者は問題解決の難しさを実感する機会となった。また、COVID-19をミクロとマクロの観点から分析し、学生の視点からはわかりづらい、実務的な経済、企業活動の考え方を学ぶ機会となったほか、キャリア開発の観点からコンサルタントという職業に触れることもできるセッションとなった。

プログラム内容

- 13:00 司会からのご挨拶と説明
- 13:03 デロイトの皆様より自己紹介
- 13:10 レクチャー①*
- 13:40 ディスカッション①
- 14:00 休憩
- 14:10 レクチャー②*
- 14:40 ディスカッション②
- 15:00 Q&A セッション
- 15:20 集合写真、締め言葉
- 15:30 イベント終了

*レクチャー①：COVID-19は「SDGsが問いかける経営の未来」へのWake Up call

*レクチャー②：COVID-19のAutoのレポート（ミクロから見るCOVID-19）

参加者感想

デロイト勉強会以前、私はコンサルタントについて大雑把なイメージのみを持っていた。それは企業に販売の新戦略を提案し成果をあげるというものだった。しかしレクチャーが進み、グループディスカッションや懇親会が行われるにつれて私のイメージは大きく変化した。コンサルタントとは企業に関係する

ステークホルダーの価値観の変化を素早く理解し、企業戦略が対応できるように手助けすることだった。そのため、そこで働く人々は様々なスキルを持っている。その中でも特に感銘を受けたのは価値編の変容につながる状況変化を感知するアンテナの鋭さだった。これは常に情報収集を怠っていないだけでなく、一つの文章、ニュースなどから得る情報量が多いということだ。直接人に聞かなければ手に入らない情報はほとんどない。重要なことは一つの文章から読み取れる情報量を多くすることだった。私たちは現在、情報が氾濫した時代に生きている。そのような時代を生き抜く中では、一つの出来事から読み取れる情報量を増やしていくことがいたずらに情報を浴びるよりも重要なことだと今回の勉強会で感じた。

崎山遼

大阪大学 経済学部 経済経営学科

実行委員総括

私は、第72回日米学生会議の発足当時から、ビジネスに関する分科会及び企画が少ないことを危惧していた。もちろん、日米学生会議は発足の背景に外交や国際関係、平和構築などがあり主題として議論されるが、現代社会において、民間が果たす役割が大きくなっている。貿易やソフトパワー外交だけでなく、外資企業の参入による働き方の変化など個人の価値観に大きな影響を与えている。また、環境や文化盗用などの問題を語るには、お金とビジネスの現実を知る必要があると考えた。

現在、デロイトトーマツコンサルティングに勤めているアラムナイの大沼様と加藤様にご多忙の中お時間をいただき、このイベントを実施することができた。お二方のご尽力と優しさで参加者にとって、非常に有意義な時間を提供することができた。

イベントの設計を行う際には、3つのレイヤーからの学びが提供できるようにアラムナイのお二方と幾度も打ち合わせを重ねた。コロナウイルスによる企業の形態の変化という事例を元にビジネスにおける目標設定の仕方を参加者に伝える。その後、「JASCにおける長期的、短期的目標設定」という議論を行う中で、コンサルタントのマクロからミクロへ絞り込んでいく考え方を学んだ。同時に、JASCについて議論する中で、夏会議に向けて識を上げていく。

このようなイベントを企画できるのも、日米学生会議をご経験された方ならではのと思い、自分もいつか次の世代に貢献できるような人間になりたいと思った。

野澤 玲奈

早稲田大学 文化構想学部 国際日本文化論プログラム

【オンライン事前研修会】2020年7月3日～7月4日

日米における安全保障について、専門家から聞き、議論する研修

日米関係やそれを取り巻く課題について、多面的に捉えることを目的として行われた本年度のオンライン事前研修においては、「日米安全保障条約改定60年を考える ～過去から現代へ～」をテーマとした。

上記目的に沿い、東アジア情勢の中での日本の立ち位置、沖縄を取り巻く日米関係、また、最後にこうした関係性の中での日米学生会議の意義を取り上げ、最終的には日米関係を象徴するキーワード：「平和」について参加者が議論を交わし、日米学生会議として日米関係について考えるという、日米学生会議を通しての活動の意義に目を向ける研修となった。また、研修前にはデリ自身が事前研修に向けての勉強会を主催した。

プログラム内容

7月3日

- ・ご講演「沖縄基地問題の理想と現実」

ご登壇者：

朝日新聞社編集委員（朝鮮半島、米朝・日米関係担当）牧野愛博様

- ・パネルディスカッション「沖縄と日米安全保障条約」

ご登壇者：

外務省参与 又吉進様、

成蹊大学法学部政治学科教授 西山隆行様、

熊本学園大学社会福祉学部第一部ライフ・ウェルネス学科准教授

向井洋子様

- ・参加者による総括ディスカッション

7月4日

- ・JASC Cafe（アメデリ合同でのZOOMアクティビティ）

- ・ご講演「ポストコロナの日米関係」

ご登壇者：

外務省北米局日米地位協定室課長補佐 川口耕一郎様

- ・総括ディスカッション「平和とは」

- ・リフレクション

- ・ECコンサルテーション

【参加者主催オンライン事前研修前勉強会】

2020年6月18日

オンライン事前研修前勉強会 辺野古移設と沖縄～米軍基地問題について考える～

オンライン事前研修の目的は先述の通り日米関係やそれを取り巻く問題について多面的に捉えることを目的としている。こうした機会を設けるにあたり、参加者が事前に予備知識を持つことは必要不可欠となる。上記の目的から、オンライン事前研修を迎えるにあたり、有志参加者が勉強会を3回にわたり、自主的に開催した。

第1回では防衛大学校学生で、第71回日米学生会議参加者の学生と実行委員長により安全保障に関する基礎を抑える講義とディスカッションが行われた。第2回においては第72回会議参加者1名および実行委員2名により米軍基地問題とその論点を掴むためのワークショップが開かれ、第3回勉強会では参加者3名により日米安全保障条約について、その条文や内容にフォーカスをあてて講義と議論が展開された。

参加者感想

①日米の安全保障を考える切り口としたい・②（私的だが）九州育ちの者として、より深く理解したい——本勉強会の企画を担当した私は、これらの理由で「沖縄の米軍基地問題」をテーマとした。地元・九州の特番などでよく扱われていた話題だったため、ある程度はスムーズに準備を進められるだろうと思っていたが、そう単純なはずがなかった。

調べれば調べるほど、この問題の複雑な構造が目に見えてくるようで、ディスカッションのテーマを絞るのには特に苦労した。そのような中最終的にたどり着いたのが、「基地負担の軽減を望む声が沖縄の最大のコンセンサスであり、日本全体としてその声とどう向き合っていけばよいか」というものだった。

勉強会本番での、議論内容の共有の際には、経済、教育、観光、軍民交流など、幅広い観点から多様な意見が出され、自らの視野も大いに広がった。沖縄の人にしかわからないことも多いのだろうが、私たちが考えることそれ自体に大きな意義があるのではないかと感じた。

今回の勉強会は、JASC72の活動全体から見ればほんの一部に過ぎないだろう。しかし、企画・準備そのものや、勉強会での意見交換などを通して、私も実に多くのことを学ばせてもらい、充実した良い経験となった。企画班のメンバー、参加してくれた皆に心から感謝したい。

太田智寧

早稲田大学 政治経済学部 経済学科

【牧野愛博様ご講演】2020年7月3日

朝日新聞社牧野愛博編集委員(朝鮮半島、米朝・日米関係担当)にご登壇いただき、新聞社の東アジア担当から見た日米関係や安全保障、日本の防衛についてご講演いただきました。講義では、日米安全保障条約とその文脈や、周辺環境の変遷について紹介をいただいたのち、その中でのメディアの役割について語られた。

参加者感想

事前に安全保障に関する参加者主導の勉強会を開催し、下地を整えた上で、直前研修に牧野様をお迎えした。講義を通して、太平洋と日米関係の現状と展望について、新たな視点を得ることができた。現代太平洋情勢を俯瞰する時に目を引くのは、米国を中心とする従来の世界秩序の不在と中国の台頭である。しかし、中国・米国をはじめとする大国間のパワーゲームに限らず、太平洋はより広いアクターに囲まれた空間であり、様々な国の安全保障・経済政策の要である。現在の力の空白状態は衝突を生みやすく、新しい定義・戦略が必要とされている。その中で、日米安全保障も紛れもなく一つの重要なキーワードである。現在の安保法制下において、日本は多大な経済的コストを支払い、安全保障を確保してきたが、未来においてより望ましいコスト分配とは何だろうか。今年で日米安保条約改定から60年が経過する。イージスアショアが破棄されることになった今はまさに再考する絶好の機会であるとも捉えることができる。多くの人と語り合うほど日米安保とは定義が困難で逆に言えば可能性を秘めるものであることを知った。牧野様の講義の中でとりわけ印象的であったのが「(安全保障に関する記事は)判断を迫る記事であるべきだし、相手の立場に立って考える必要がある」との言葉である。学生だからこそ憲法論の前に各国の立場の最大理解と新しい戦略を皆で模索し、可能性を創造していきたい。

佐藤顕子

学習院大学 国際社会科学部 国際社会科学科



【沖縄と日米安全保障に関するパネル】2020年7月3日

パネルディスカッション「沖縄と日米安全保障条約」では、外務省参与 又吉進様、成蹊大学法学部政治学科教授 西山隆行様、熊本学園大学社会福祉学部第一部ライフ・ウェルネス学科准教授 向井洋子様をご登壇者としてお迎えし、沖縄を舞台に展開される日本政府、米国政府、沖縄県政、現地の方々による議論や状況について深く学ぶ機会を得た。

プログラム内容

- 13:00-13:05 イン트로ダクション
- 13:05-13:45 パネルディスカッション
- 13:45-14:15 質疑応答
- 14:25-15:10 ディスカッション

ディスカッショントピック

- ・安全保障は最大多数の最大幸福によって定められるべきか

参加者感想

沖縄県基地問題を軸に据えつつ、米国の国内政治と安全保障からの視点や、占領期以降の沖縄の置かれた文脈、諸問題に対する沖縄からの眼差しなど、異なるアプローチから、基地問題、沖縄、そして日米関係についてより多角的な視点を得ることができた。ややもすれば単純な対立構図として捉えがちな基地問題を、歴史的な文脈と併せて多数のアクターの視点から再構築することで初めて、膠着する問題の本質と直面する障害への理解の基盤となると考えた。また、過去の分析においても未来に向けての施策の考案においても、同時代的な文脈と切り離して考えることはできない。況してや激動の国際情勢に直面する現在においては尚更である。戦争の記憶と住民の福祉・安全、国家安全保障など、過去と現在と未来が複雑に絡み合うこの基地問題を考える上で重要なのは、やはり利害関係の複雑性と流動性を念頭に置きつつ、変わるものと変わらないものの狭間で常に問題意識を再構築し続けることなのではないかと考えるに至った。議論の中で出た「一定程度基地問題について勉強した人の陥りがちな視点があるのではないか」という言葉はまさにこの問題の難しさと奥深さを表していると感じ、印象に残っている。今後自分で勉強を深める上でも、常に視点の外側を意識する姿勢を忘れずに問題と向き合うよう肝に銘じたい。

反後元太
東京大学 教養学部教養学科

【日米関係の未来レクチャー】2020年7月5日

オンライン事前研修の最後では第59回日米学生会議実行委員長、外務省にて現在にご活躍されている川口耕一朗様にご登壇いただき、日米関係とその中での日米学生会議の立ち位置、川口様ご自身のキャリアについて伺う時間をいただきました。

参加者感想

第59回日米学生会議の実行委員長であり、現在は外交官としてご活躍されている川口様から日米関係とキャリアについてご講演をいただきました。はじめにアメリカ人から見た世界、東アジア、日本についてお話を伺った。実行委員長としてのご経験をもとに、アメリカにとって日本は必ずしも最も関心がある国ではないかもしれないというお考えをご教授いただきました。日米学生会議には日本に興味を持っているアメリカ側参加者が多いので見逃しがちな視点だが、広い視野を持って日米関係を学ぶ重要性を再確認することができた。

さらに日米学生会議のOBとしての川口様のキャリアについても伺うことができた。川口様はオバマ前大統領の広島訪問や安倍首相の真珠湾訪問にて準備業務をご担当された際に、日米学生会議でのご経験が活かされたとおっしゃっていた。また日米関係は政治のみではなく草の根活動からのアプローチも大切というお話があり、来春から民間企業で働く私にもできることを今後のプログラムを通して考えたいと思った。川口様のご講演により、日米学生会議を国際交流だけで終わらせずに日米関係の目的を考える機会にしようという気持ちがより高まった。

松村瑞希

国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科



【日米合同ディスカッション】

2020年7月4日～5日

オンライン事前研修期間においては、JASC Cafe からさらに発展し、日米学生会議ならではの空間で日米関係に関する、日米それぞれの立場からの議論をするディスカッションを行った。

参加者感想

米国側参加者と日米関係についてさまざまな角度から意見を出し合って見解を比べ合った。私たちのディスカッショングループでは最終的に香港における「一国二制度」や中国の「国家安全法」に関する議論にもなった。各々の立場の違いや、見解の違いが見えたのは勿論、抽象的で考えにくい問題に対して米国側参加者がいくつも意見を述べ問題提起をし、なるほどそういう点に関心があるのかと感心しながら聞き入ってしまった。ディスカッションクエスチョンとして提示された一つ目が安全保障に関する話題で、私自身にとって浅学であったものの、皆の見解を聴きつつ、質問して理解を深めることができた。そして、なによりも外国人と非日本語でディスカッションしたという経験も大変貴重だった。英語を使ったディスカッションではどうしても緊張を拭い去ることができない。普段使い慣れない言語は覚束なくて、きっと同じグループの人たちには労力をかけさせてしまった。それでも私にとって英語で相手と話すのが楽しいもので、ついつい長く話してしまう。この日においても、米国側参加者とのディスカッションは英語で新しい知識を発見でき、とても愉しくまた充実していた。

亀井龍

明治大学 法学部 法律学科

今回の事前研修では、米国の参加者とのディスカッション、有識者の方々のご講演、そして日本側参加者との白熱した意見交換を通じ、自分自身の安全保障に関する価値観を相対化する機会に恵まれた。私にとっては、米国の参加者と比較したときの、安全保障に関して受けてきた教育の違い、日米学生会議でのご経験を交えながら話された登壇者の方のご講演や、ポストコロナ期における日米関係の在り方について参加者と話し合う機会などが特に印象的だった。本研修は私だけでなく参加者全員にとって、普段生きていてなかなか意識することのない「日米関係」を、より解像度の高いレンズで覗くことを可能とした貴重な機会になったのではないかと思う。

また今回の研修全体を通じ、分科会の違いやオンラインという形態の都合上、今まであまり話したことがなかった参加者とも話す機会に恵まれた。意見交換のための班分けに際し、こうした事情も考慮してくださる実行委員の気遣

いに感謝しつつ、やはり普段話すことがなかった参加者との会話・意見交換は純粹に楽しめた。これからも楽しむ気持ちを忘れず、今回仲が深まった参加者とともに、夏会議に向け充実した議論を展開していきたいとも感じさせてくれた研修であった。

鈴木悠太
東京大学 教養学部 文科一類

実行委員総括

この場を借りて、この度のオンライン事前研修開催にご協力いただきました登壇者の牧野様、川口様、パネルディスカッションパネリストとしてご登壇いただきました又吉様、向井様、西山様に改めて深く感謝申し上げます。また、今回の会の開催にあたり、多大なご協力をいただきました第 69 回日米学生会議実行委員河崎様、沖縄県庁山田様、ご協力いただきまして誠にありがとうございます。

例年の自主研修、また、直前研修の代替として執り行われた今回のオンライン事前研修では、大きくその目的を日米関係、とりわけ基地等に関する問題や課題について、自主性を持って考えていただくことにおいた。ご覧いただいたように、参加者本人による勉強会や、当日のディスカッションなど様々な手段を持ってこの趣旨の実行を試みた。

今回の事前研修においては、沖縄県を事象に日米関係について、日米学生会議として問うた。日米両国の関係性は刻々と変化を続けており、その時代時代に沿った日米関係に関する議論を設けることがその年の実行委員会には問われる。辺野古基地の工事再開や、米軍基地におけるクラスターが問題になるなど、様々な変遷のあった 2020 年、戦後 75 年という長い年月を経てこの関係性がどのように変化したかに再度目を向け、顕在化している問題についてより本質的なアプローチを試みる機会となったと感じる。

木村勇人
慶應義塾大学法学部政治学科

【夏会議前決起集会】

2020年8月6日

夏会議に向け、それぞれの意気込みを共有し合う決起集会

夏会議前日に、実行委員会主催の決起集会を開催した。オンライン会議にて、夏会議を控えた参加者に意気込みを聴き、これまで分科会で議論した内容などを振り返り、それぞれが設定した目標を見つめ直し、他の参加者と共有し合うことで相互的に刺激を受け士気を高めることができた。オンライン開催ながらも心の中にある思いをぶつけ合う中で、他の参加者との感情を共有し合える場を創出することができたと考える。会の最後では、参加者が各々の決意表明をするとともに、JASCの文化でもあるリフレクションの形態に添い、一人一人が、本音を共有できる空間を提供することができた。応募当時の初心にかえり、第72回日米学生会議として、再度会議と向き合う、大変有意義な時間となった。

プログラム内容

- 19:00-19:05 説明
- 19:05-19:25 分科会でのこれまでの活動のリフレクション
- 19:25-19:50 話したことの全体共有
- 20:00-21:00 決意表明

参加者感想

参加推奨とはいえ、参加前は正直何を話そうかと緊張していた。というのも、自分が分科会やJASCの議論に貢献できているか？手探り状態だったからだ。しかし、決起会に参加してみると驚いたことに、私と似た心情を抱えたデリが何人もいたのである。急にデリに親近感と人間味を感じた。そして、各デリが持つ本音やストーリーを共有することの大切さを痛感した。誰かが「自分の負けを認めつつ、自分のバリューを探索し続けることが大事なのだと思う」と言っていて、私に出来ることは経験則を活かしてカジュアルに議論できる場所の創作ではないかと思った。後々、私は非公式イベントを企画することになるのだが、決起会のお陰と言っても過言ではない。

佐藤顕子

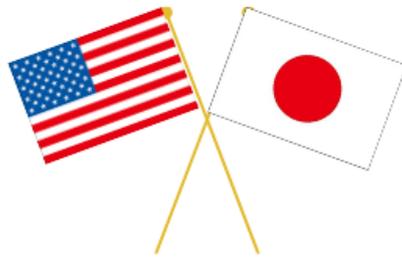
学習院大学 国際社会科学部 国際社会科学科

実行委員総括

決起集会は、夏会議に向けた決意・目標を見つめ直し、それを他の参加者と共有し合うことで、夏会議前に参加者のモチベーションを高めることを目的に開催した。夏に渡米するという期待を胸に応募した日米学生会議がオンライン開催となってしまったこともあり、本年度会議参加者は一度も顔を合わせたことがない参加者と、夏のオンライン会議を迎えることとなった。オンラインでのコミュニケーションは難しく、また例年通りに直前合宿でのリフレクションのような機会を設けることができなかった。そのため、夏会議前にエンジンをかけ直すきっかけとして、応募当時の熱意を思い出すことができるような機会を設けたいという思いがあり、本企画を開催する運びとなった。前半には、分科会単位でこれまでの活動を振り返り、印象に残った議論や思い出などについて話し合った。後半は一人一人の決意表明を全体に対して1人が話すという形式で行った。夏会議が終わった後にどのような自分でありたいか、どのような弱点を克服したいかなど十人十色の決意表明が行われ、対面でのリフレクションさながらのスナッフ（指を鳴らして同意を示すハンドサイン）が沸き起こった。

野村紗里
九州大学共創学部





JASC72

第4章

議決期間中活動報告



第4章では、8月8日から8月18日まで開催された夏会議および11月14日から15日までにかけて開催されたファイナルフォーラムについて紹介する。

【夏会議】

2020年8月8日～2020年8月18日

参加者

日本側：35名（実行委員8名を含む）

米国側：24名（実行委員8名を含む）

開催地及び

オンライン：Zoom

プログラム内容

2020年8月8日

開会式、自己紹介、アイスブレイク、RT Mixers、Buddy Activities

2020年8月9日

USIP Walk Through History、福島パネル①、RT Time

2020年8月10日

第2次世界大戦ディベート「原子爆弾投下の是非」、RT Mixers、ヴァーチャル脱出ゲーム

2020年8月11日

アジア系アメリカ人の歴史、アジア系アメリカ人についての教育プログラムの考察、言語交流部屋

2020年8月12日

歴史的公害問題から考える危機的状況における社会的弱者に関するレクチャー～コロナ禍&ポストコロナの生活～、Spent Game、RT Time

2020年8月13日

パネルディスカッション「2020年における社会正義」、Living Room Conversation、RT Time、第73回日米学生会議実行委員選挙説明会、Show and Tell

2020年8月14日

選挙と政府に関する議論、LGBTQ+パネル、RT Time、JASC Buddy 交流

2020年8月15日

被爆者の証言ビデオ視聴、福島パネル②、実行委員選挙スピーチ、黙祷、広島アクティビティ

2020年8月16日

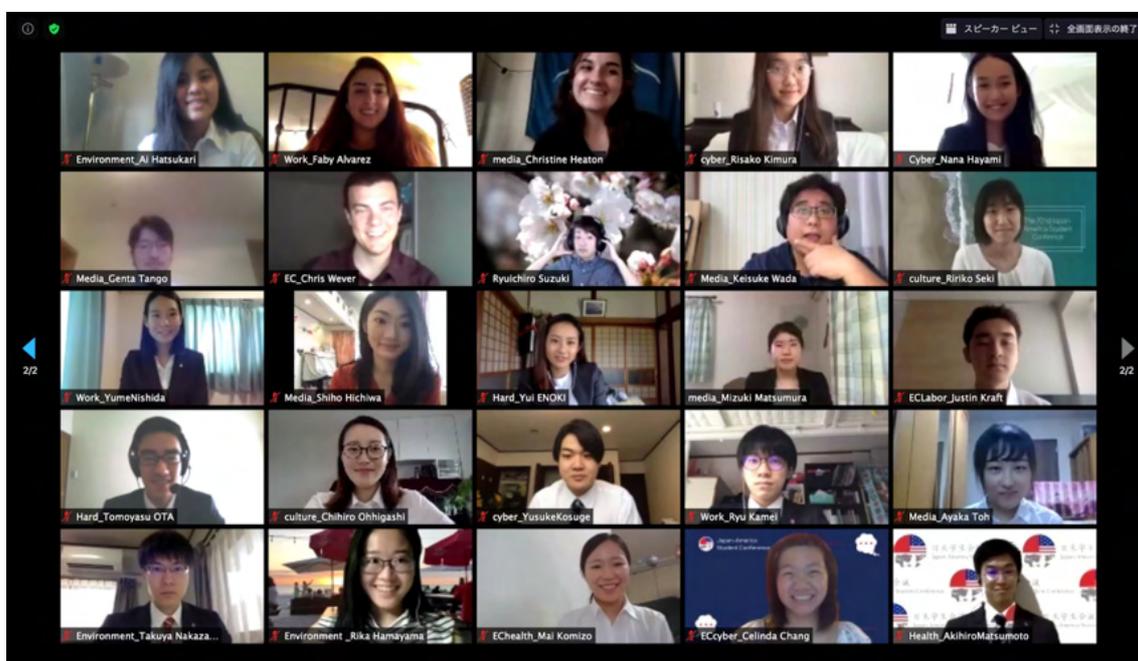
RT Time, ソフトパワーレクチャー（日本の美学とそのイメージ、グローバルゼーションと Cool Japan 政策）

2020年8月17日

シンポジウム、第73回日米学生会議に向けた実行委員選挙

2020年8月18日

RT テーマ別アクティビティ、JASC Buddy フリータイム、リフレクション、閉会式



【夏会議 Day 1】 2020 年 8 月 8 日

開会式、自己紹介、アイスブレイク、RT Mixers、Buddy Activities

開催概要

いよいよ日米学生会議にとって史上初となるオンライン開催での夏会議が幕を開けた。会議初日は開会式から始まり、各自個性溢れる自己紹介をした後に、アイスブレイクや Buddy Activities、RT Mixers を通して参加者との交流を深め合った。まだ話したことのない参加者との初顔合わせかつ、日本側参加者にとっては早朝の集合であったが、参加者たちの生き生きとした表情が伺えた。

プログラム内容

8:00-8:30 開会式

8:30-9:30 自己紹介

9:30-9:45 休憩

9:45-10:45 アイスブレイク

10:45-11:00 休憩

11:00-12:00 RT Mixers

12:00-12:15 休憩

12:15-12:30 WWII ディベート事前会議

12:30-13:00 JASC Buddies Activities

ディスカッショントピック

あなたの RT ではどのようなことに興味を持って議論を進めていますか？

「過去から未来へ、日米平和の灯火を」というテーマとあなたの RT はどのように関連していますか？

参加者感想

JASC 史上初めてとなるオンライン開催の夏会議が始まった。

開会式にあたり、日米双方の実行委員長に加えて、支援してくださっている一般財団法人国際教育振興会代表理事の金野洋様、アメリカのボランティア団体 International Student Conferences, Inc. の代表 Linda Butcher 様からご挨拶いただいた。その後は参加者一人ひとりの自己紹介、ブレイクアウトルームに分かれてのアイスブレイク、そして一緒に個人的な交流を深められるような buddy との雑談タイムが設けられていた。この会議に限らず、日米をはじめとした国際関係に学術的興味をもち、実際に草の根交流を通してそこから得られることを糧にしていこうという意識の高い人がとても多かったのはさすがだ。気さくで前向きに話をしようとしてくれる人も多く、とても居心地が良いのがすごいと思う。

正直に言えば、個人的には家族や留学経験といった日本とのルーツのないアメリカ人参加者が少なそうだと印象があった。アメリカ開催の年はどうしてもアメリカ側の人気下がるという話も聞いたが、やはりアメリカからみた日本のイメージというのが多少なりとも反映されているような気がする。設立当初とは確実に異なる世界情勢にある現在、日米学生会議の目的や意義はどのように変わっていくべきなのか。

関理々子
東京大学教養学部文科三類

夏会議の幕開けとなった今日、アメリカと日本から 50 名以上の学生がオンライン上で集まった。5月に春合宿を終えてから早3ヶ月、こうして無事に夏会議を迎えられたことを非常に感慨深く感じる。緊張とワクワクの両方を胸に臨んだ初日であったが、楽しい時間はすぐに過ぎ、あっという間の5時間となった。オンラインだということを忘れるくらい、皆との心理的な距離の近さを感じられた。初日である今日は、自己紹介とアイスブレイク、そしてそれぞれの分科会同士の関わり合いについて話した。参加者の多様なバックグラウンドと個性豊かなキャラクター、初日から止まることのない活発な議論に日米学生会議の醍醐味を感じている。他の分科会との交わりを見つけることで、分科会内だけでは見えてこなかった新たな視点を得られたことが印象的であった。これから続く10日間の夏会議、どのような議論が飛び交うかとても楽しみだ。第72回日米学生会議のテーマである「過去から未来へ日米平和の灯火を〜己と社会の価値観に挑め〜」を心に刻み、これからの日米関係や平和について「本音の対話」を行なっていきたい。開催にあたってご尽力いただいた皆様への感謝を忘れず、最後まで全力で会議に臨みたい。

濱田真利奈
慶應義塾大学 法学部 政治学科

【夏会議 Day 2】 2020 年 8 月 9 日

USIP Walk Through History、福島パネル①、RT Time

開催概要

オンライン夏会議 2 日目となる 8 月 9 日は日本人なら誰もが知っている、長崎に原爆が投下された歴史的な日である。75 年経った今、日米の両学生が平和について話し合い、両国の日米関係に対する価値観を共有し合った。そして東日本大震災から 10 年となる来年へ向けて、風化されつつある「復興」について考え直した。その後、分科会ごとに初の RT Time として、日米両国のメンバーと夏会議で議論したい内容やファイナルフォーラムに向けての意気込みを共有し合った。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-9:15 USIP(合州国平和研究所) ~Walk Through History~

9:15-9:30 休憩

9:30-10:20 USIP Walk Through History 発表

10:20-10:40 休憩

10:40-11:45 福島パネル① ~民間の視点から見た「復興」~

11:45-12:00 休憩

12:00-13:00 RT Time

USIP(合州国平和研究所) Walk Through History

アメリカ代表学生と日本代表学生が分かれてチームを作り、そのチーム内で日米関係において最重要だと考える出来事について意見を出し合う。その後、各グループごとに意見を発表し合い、いかに国籍や文化によって日米関係の捉え方に差異が見られるかを考察する。

福島パネル①「福島産 ~人々、商品、期待~」

<セッション内容>

- ・道の駅「ならは」とはどんな場所か（道の駅ならはの概要と役割）
- ・風評被害の現状と取り組みについて
- ・農家の視点からは、どのような状況か？

参加者感想

本日オンラインでの日米学生会議の2日目はゲストスピーカーとして合州国平和研究所の Paul Lee 様をお招きし、日本とアメリカの歴史とそれぞれの国の学生が持つ歴史的認識を共有した。

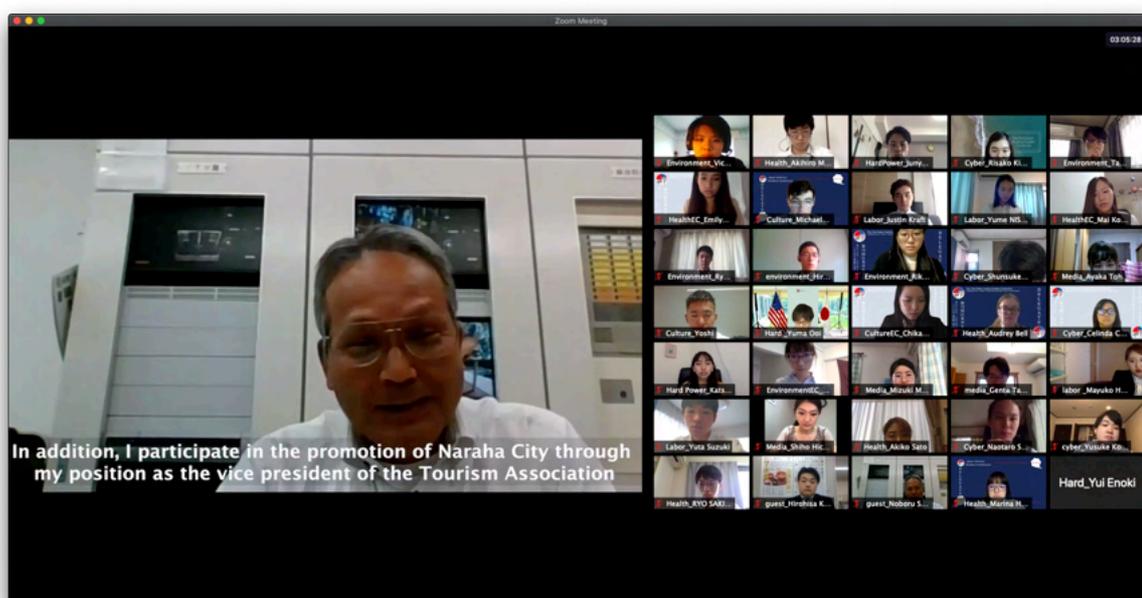
初めに全体を3つに分け、1つをアメリカ側参加者、2つを日本側参加者のグループとして、それぞれのグループで現在の日米関係を考えるうえで重要な出来事を7つリストアップした。その後、それぞれのグループが挙げた7つの出来事を全体で共有し、気づいたことや意見を交換した。

意見交換では、アメリカ側の認識と日本側の認識の間で顕著な違いがいくつかあり、事実をどう認識するかについて文化と教育が深くかかわっていることに改めて気づいた。また、挙げられた出来事の多くがハードパワー的な出来事であったにもかかわらず、実際の日米関係は文化や学術などのソフトパワーも関わっているという気づきもあった。しかし、歴史上の出来事をあげるとハードパワー的な出来事が多く取り上げられるような傾向があるのは事実であり、ソフトパワーとハードパワーの歴史上の立ち位置の違いについて個人的にもう少し考えてみたいと思った。

最後に、このような日米間での違いをわかりやすく知ることのできるプログラムを組んでくださった Lee 様と実行委員の皆様へ感謝申し上げたい。

内林大志

北海道大学環境科学院生物圏科学専攻



初めて夏会議のパンフレットを手にし、福島セッションの存在を見つけたときは「意外」というのが正直な感想だった。というのも、震災から9年経った今、自分たちがどんなことを議論するのかパッと頭に浮かばなかったからだ。しかし、この考えはパネリストのお二方のお話が始まった瞬間に変わり、9年前のあの震災を終わった出来事のように捉えてしまっていた自分に気がつき、自分がどれだけ浅はかだったかを恥じ、今はまさにここに震災の問題の本質があるように感じた。

震災や戦争といった悲劇は、それを経験した土地、そしてその土地の方々にってはもちろん何年経ってもその出来事は遠い過去のことにはできない。

だが、その地から離れた地域にいと、どうしてもその問題に対する私たちの関心は薄れていってしまうのが現状だ。

「同じことを繰り返さないためにも、福島に行って、見て、感じてほしい。」

鈴木昇駅長がおっしゃったように、私たち若い世代は、同じような悲劇を繰り返さないために、何が起きたのか、何を未来に伝えるのか、まさに今年の日米学生会議のテーマのように、“Take from the Past, Give to the Future”、過去から学び、次の世代に伝えていく義務がある。

私自身も、今はこのような未曾有の事態なので憚られるが、近い将来、自分自身の足で震災の現場に行き、どのような現状の問題が残っているのか、見て、感じに行きたいと思う。このような貴重なお話をさせていただきました、桑田様、鈴木様、そしてこの機会を作ってくださいました実行委員の皆様への感謝を忘れず、残りのプログラムも全力で頑張りたい。

波田真友子
大阪医科大学医学部医学科

【夏会議 Day3】 2020 年 8 月 10 日

第 2 次世界大戦ディベート「原子爆弾投下の是非」、RT Mixers、
ヴァーチャル脱出ゲーム

開催概要

夏会議 3 日目となるこの日は、「原子爆弾投下の是非」というテーマでディベートを行い、これまでとは異なる視点から「原子爆弾投下」という事実を評価する機会を設けた。その後、RT Mixers、そして最後にバディーとチームになったのヴァーチャル脱出ゲームを行った。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-9:00 第 2 次世界大戦ディベート「原子爆弾投下の是非」

9:00-9:15 休憩

9:15-10:15 第 2 次世界大戦ディベート「原子爆弾投下の是非」発表

10:15-10:30 休憩

10:30-11:45 RT Mixers

11:45-12:00 休憩

12:00-13:00 ヴァーチャル脱出ゲーム

第 2 次世界大戦の「原子爆弾投下の是非」ディベート

このディベートの目的は、第 2 次世界大戦中に主要な決定を下した人物の立場に立って、原子爆弾投下の是非について再考することである。日米双方の視点において賛否両論があるセンシティブなトピックではあるが、賛成・反対の立場に関係なく、すべての参加者が当時のコンテキスト、道徳的な意味合いも含めて、批判的に熟考することを目指す。ディベートでは割り当てられた立場の意見を主張するが、担当となった立場に賛同しない場合、必ずしも参加者が自分自身の考えや感情を自由に表明できないことを意味するものではない。

参加者感想

私はディベートにおいて、原爆使用に賛成する立場を選んだ。これまで19年間、学校教育やメディアを通じて原爆の悲惨さを学んできた中、原爆投下を肯定的に捉えるのは新鮮であり大きな挑戦であった。私達は「原爆を投下しなければ、戦争が長引き日米双方に甚大な被害が出たはず」などと主張したが、原爆を投下しなかった場合どうなっていたかは、誰にもわからない。このように原爆投下についての議論は仮定の話が多く、一生結論が出ない議論にも思えた。

では、なぜこの議論を行う必要があるのだろうか。それは、原爆投下の過程や背景を客観的に分析することで、二度と核兵器が使われないようにするためだと思う。核兵器の使用自体に賛成はできないが、日本がなかなか降伏せずソ連の脅威が迫っていた状況を考えれば、投下したアメリカ側の主張にも理解できる部分があった。核兵器使用を止めるには、戦争や国家間のイデオロギー対立など、背景にある問題にまで目を向けなければならないと学んだ。

今回、原爆投下についてアメリカの学生と幅広い視点で議論できたことは、非常に有意義な経験だったと思う。

東綺伽

東京外国語大学 国際社会学部 中国語専攻



画面いっぱいに無秩序に散乱したトランプカードや数式、意味ありげな図形やポストカードを見て、どうやったらこの状況を相手に伝えられるだろう、と冷や汗をかいた。この脱出ゲームではお互いの画面にまったく異なる情報が与えられており、それぞれのヒントを組み合わせないと脱出することはできない。しかし、お互いに何が見えているのかを伝えようとしてもなかなか思い通りには伝わらない、さらに焦れば焦るほど英語につまるという悪循環である。

そこで、相手もこう考えているはずだ、という先入観を捨て、一つ一つのヒントを何度も確かめ合いながら試行錯誤を繰り返した。少しでも不安が残ることは正直に分からないと伝え、確実に共通の認識を築くことに専念すると、双方からお互いのヒントをつなぐ解決策が飛び交うようになった。あっという間の1時間、そして制限時間残り一分を切ったところで画面には”Escape”の文字が。思わず画面越しにハイタッチをして舞い上がった。日米間の様々な社会問題についての真剣な議論の合間にとってもいい息抜きになり、普段とは違う形でアメリカ側参加者との絆を深められたと思う。

お互いに見えている景色が違う中で相手の視点に立って考えること、分からないということをしつかりと伝えること、そして双方の視点をつなぐ糸を模索することが相互理解と問題解決には不可欠なのだ改めて気づかされたアクティビティだった。

須藤直太郎

東海大学 工学部 航空宇宙学科



【夏会議 Day4】 2020 年 8 月 11 日

アジア系アメリカ人の歴史、アジア系アメリカ人についての教育プログラムの考察、言語交流部屋

開催概要

夏会議 4 日目となるこの日は、アジア系アメリカ人の歴史をテーマに人種差別やそれらを伝えていく方法を考察することを目的として開催された。”Black Lives Matter”が世界で叫ばれた 2020 年度、「人種問題」がタイムリーな話題となる中、歴史を辿る中で見えてきた問題点をどのように次世代へ継承するかを議論し、多様性理解への課題を考察した。その後、言語交流部屋を設け、日本語や英語のみならず様々な言語を通して、交流を深めあった。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-9:15 アジア系アメリカ人の歴史~A Look Into the Past~

9:15-9:35 休憩

9:35-10:35 アジア系アメリカ人~過去、現在、そして今後~
(登壇者: 武田興欣様)

10:35-10:50 休憩

10:50-11:50 アジア系アメリカ人についての教育: レッスンプランを考察

11:50-12:05 休憩

12:05-13:00 言語交流部屋



Language Rooms

ブレイクアウトルーム	言語	EC ファシリテーター
1	英語: スラング、慣用句、方言 & その他文化的な表現	Madeline Wiltse Carly Shiever Alec Mesropian
2	日本語: 初級	白石智鏡
3	日本語: 中級	Emily Marlowe
4	日本語: 上級	鈴木龍一郎
5	中国語 (北京官話)	Celinda Chang
6	ドイツ語	Kerry Walker
7	インドネシア語	野澤玲奈
8	Free Language Exchange (for languages not listed that delegates would like to share!)	Christopher Wever

The image shows a Zoom meeting interface. On the left, a Google Slides presentation is displayed. The slide content is as follows:

Have students research, come up with answers on the following questions to present to the rest of the class:

1. Why should you discuss Asian-American Oppression in the
2. What are the negative impacts of not considering this issue?
3. What is immigrant?
4. How can we support those in need?

On the right side of the screen, there is a video feed of a participant named 'P. Nana Hayami'.

参加者感想

夏会議4日目はゲストスピーカーとして青山学院大学教授の武田興欣様をお招きし、アメリカにおいてアジア系移民（アジア系アメリカ人）が果たした役割、そして彼らがどのように扱われてきたのか、といった移民史を学んだ。

はじめに、アジア系移民に関する動画を視聴して基礎知識を習得し、その後武田様よりお話を伺った。大陸横断鉄道開通に中国系移民が多大な貢献をしたことなど、アメリカは移民の力によってここまでの大国に成長したことがよくわかった。そしてさらに、太平洋戦争時の日系人収容所に代表されるように、彼らへの扱いが時として差別的で不公平なものであったことも無視できない。

お話を伺った後、参加者間でアジア系移民についての意見交換を行った。社会はいかにして移民を包摂するのか、などいずれも現在に通じる問題であるだけに、参加者の態度は真剣そのものであった。

歴史を振り返ってみれば、どのような国でも移民に対する反発があったように思う。また、その反発は現在でも国内・国際政治の大きな争点である。今回の企画はそのような移民の歴史を振り返ることによって、未来への視座を培うものであった。チャーチルが述べたように、「過去をより遠くまで振り返ることができれば、未来をより遠くまで見渡せる」のだ。

武田様、貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。

伊藤駿介

明治大学 政治経済学部 政治学科

本日の Language Exchange セッションでは実行委員がそれぞれ、アメリカのスラング、日本語、中国語（北京官語）、ドイツ語、インドネシア語で話すブレイクアウトルームを作り、言語に対する質問やその言語での会話をした。

私はアメリカのスラングについて話すグループに入り、YouTubeなどの動画でよく出てくる "mood" や "in a nutshell" について質問をした。"mood" は「その時に感じている気分を表すもの」で、"in a nutshell" は「簡潔にまとめると」と訳すことをアメリカ側の実行委員の方に教えてもらった。この質問のほかにカルフォルニア特有のスラングや、省略語、および普段のテキストメッセージなどで使える表現も教えてもらった。

このセッション以前はアメリカ側の実行委員とあまり話す機会がなかったので、初めて直接意見を交換できたことがとても嬉しかった。会議も4日目に突入し、英語で話すことにも慣れてきたので、日米の実行委員・参加者ともっと話していきたいと思う。

大東千潤

上智大学国際教養学部国際教養学科

【夏会議 Day5】 2020 年 8 月 12 日

歴史的公害問題から考える危機的状況における社会的弱者に関するレクチャー
～コロナ禍&ポストコロナの生活～、Spent Game、RT Time

開催概要

夏会議も半分が過ぎようとしているこの日は、新型コロナウイルス感染症の流行を再考するプログラムが複数開催された。まず、過去の日米の公害被害の例から、社会的弱者を再考する講義を受け、今日の感染症が社会的弱者に及ぼす影響を議論した。次に、新型コロナウイルス感染症流行前後の世界の変化の予想を、グループに分かれて行った。1日の最後には、「Spent Game」という、今あるお金をどのように使うかというシミュレーションを少人数に分かれて行うことで、参加者の交流を深めた。

プログラム内容

- 8:00-8:15 アナウンスメント
- 8:15-8:45 Crisis and Vulnerable Populations by Professor Shizuka Hsieh
危機的状況における社会的弱者(登壇者: Shizuka Hsieh 准教授)
- 8:45-9:15 コロナ禍とコロナ収束後の生活
～危機的状況下のコミュニティ行動計画～
- 9:15-9:30 休憩
- 9:30-10:00 コロナ禍そしてコロナ収束後の生活
～危機的状況下のコミュニティ行動計画～
- 10:00-10:30 行動計画のプレゼンテーション
- 10:30-10:45 休憩
- 10:45-11:30 Spent Game
- 11:30-11:45 休憩
- 11:45-13:00 RT Time

参加者感想

戦後 75 年目の原爆の日や「黒い雨」訴訟等、戦時中や戦後の日本を考える機会が増えている。今回 Shizuka Hsieh 様をゲストに迎え、日米で起こった公害について講義をして頂いた。公害は人間が産業や発展を優先させたが故に起きたことが自明であるにも関わらず、公害の被害者は racism や social inequalities という二次的な被害も受けることとなった。健康 RT らしく言うならば、公害の被害者は人為的要因で、身体的健康だけでなく社会的健康も失った。公害から「原因の不確実性」を理由にして環境問題を放置してはいけないという教訓を得たという見方もある。身体的不健康に関しては医学や化学の専門家が主役だ。しかし社会的健康を担保するのは雇用や Systematic Racism を草の根レベルから、補償や理解を通して解決できる所謂「民間人」が主役だ。種類は違えど、公害と同様にこの pandemic が stigma・差別という長期的なインパクトを持つ可能性も拭いきれない。これは Asian-American や BLM 運動を考えても、重要な観点だ。それだけでなく、グループによってはコロナによって浮き彫りになったオンライン環境の不平等に対して Wi-Fi 整備という施策を提案していたり、どこでも楽しめる食事の在り方を創造する方法としてレストランのサブスクを提案していたりと serious issues の中からワクワク感のあるアイデアを創出する非常に学生らしいイベントとなったと思う。

佐藤顕子

学習院大学 国際社会科学部 国際社会科学科



Spent Game は「アメリカで生活をする」ということについての知識を教えてください、啓発的要素の強いゲームであった。まず仕事を持っていない人がアメリカに1400万人以上いることを知らされ、私たちはその内の1人となり、新たな仕事を始めて様々な出来事や支払いを経験していった。1ヶ月を所持金がプラスの状態でも乗り切らなければいけない、という条件から、ゲームとはいえ途中から私たちは普段なら絶対にしないような判断ばかりし始めた。例えば母親の入院費の支払いを拒否したり、仕事を休むとペナルティを受けるからと父親の葬儀を欠席したり、ペットを飼うなら住居に追加料金がかかるからとペットを保健所に連れて行ったりなどである。さらに、保険に入っているからと虫歯を放置したところ、悪化し高額な治療費を提示され、健康保険に歯は含まれないということを知った。アメリカは自由の国と言われるが、自己責任という面においての自由であり、日本の手厚い保障や整った公共交通機関に対する安心感と幸せを感じた。

ゲーム感覚で支払いを後伸ばしにし、何とか1ヶ月を乗り切った。しかし、実際に生きてみると、やっとのことで1ヶ月を乗り切った後には、先延ばしにした支払いを含むさらに厳しい次の1ヶ月が待っている。私たちが日米学生会議の活動をできているのも、生活の基盤が盤石であるからであると痛感した。生活の余裕が自分の意見に及ぼす影響も体感できたので、それを含めて多角的な考えをできるように意識していきたい。

小菅優介
慶應義塾大学法学部政治学科



【夏会議 Day6】 2020 年 8 月 13 日

パネルディスカッション「2020 年における社会正義」、Living Room Conversation、RT Time、第 73 回日米学生会議実行委員選挙説明会、Show and Tell

開催概要

“Black Lives Matter”は、夏会議前の時期にアメリカで噴出した活動であるが、日米学生会議も人権について再考する必要性を感じ、社会正義に関するパネルを開催した。実際には、黒人として日本で暮らしていた方や日系アメリカ人のアラムナイをスピーカーとして招き、人権問題について再考した。パネル終了後には、近い境遇の参加者同士が少人数のグループに分かれ、人権や普段は気が付きにくい自分が享受している特権についてディスカッションを行った。

プログラム内容

- 8:00-8:15 アナウンスメント
- 8:15-9:30 パネルディスカッション「2020 年における社会正義
～アメリカにおける人種関連の動きと世界的な影響～」
- 9:30-9:45 休憩
- 9:45-11:00 Living Room Conversation：人種、民族、地位、特権
- 11:00-11:15 休憩
- 11:15-11:45 RT Time
- 11:45-12:00 第 73 回日米学生会議実行委員選挙 説明会
- 12:00-12:15 休憩
- 12:15-13:00 Show and Tell //EC への質問部屋 (任意)

Show and Tell (推測ゲーム)

ブレイクアウトルームに分かれ、代表者は自分にとって大切なアイテムを用意する。他の参加者は「はい/いいえ」で答える最大 20 の質問を通して、そのアイテムが何なのか推測する。最終的に代表者は自分にとって大切なアイテムを発表し、その背後にある物語を共有する。

参加者感想

日米学生会議も早いことに6日目を迎えた。毎日充実した濃い内容で、5時間があったという間に感じられる。オンラインであるが故に生じる弊害を忘れるほどに、議論も白熱し、多くの発見や視点を得られていると日々実感している。

本日は、昨今世界的に広がった Black Lives Matter 運動を導線として、人種差別について、自分自身のアイデンティティや特権、経験を振り返りながら考えた。この議論をするまで、私は日本を homogeneous (同質の、同種の) な国であると表現していた。しかし、アメリカと程度の差はあるとはいえ、日本にも昔からアイヌの人々やブラジル人移民、在日朝鮮人を始め、様々な人種、バックグラウンドを持つ人が住んでいる。特に近年は政府が外国人労働者受け入れの促進を熱心に行なっており、もう日本を homogeneous な国と表せない。多様な人種、文化をお互いに尊重し共存していくことが求められる社会に日本もなったのだと強く感じた。私自身、日本人が大多数を占める環境で育ったこともあり、人種について誰かと真剣に話したり、考えたりするという経験はほとんどなかった。しかし、日本にずっと住んでいて、人種に関して身近でないから知らないといった態度は変えていくべきであると思った。差別の歴史について正しく理解することと人種について考えることが社会全体に広がってほしいと思う。

西田優芽

福岡教育大学、教育学部、初等教育教員養成課程



本日は人種に関する議論をした。その中でとても印象的だったことは、アイデンティティの確立と差別は背中合わせの関係にあると感じたことである。区別をするからこそアイデンティティの確立ができる一方で、区別するからこそ差別が生まれてしまう、そのようなジレンマが存在することに気づくことができた。

ここで、このジレンマの原因は区別であるが、とても扱いに気をつけなければならぬもののように感じる。例えば、厳密には本来人種というものには存在しないと考えているが、その一方で自分は日本人というアイデンティティは確実にあるのだ。実際に、日本人らしさを身につけたいために茶道の稽古もしていた程、私のアイデンティティの1つに日本人というものが存在している。このように、アイデンティティと差別は背中合わせの関係だったのだ。

この区別の使い方を間違えられてしまい、マジョリティーとは異なっていたために、人種差別を経験した人もいた。自分はマジョリティーにいるからこそ、今回人種差別の経験を聞いたことで、差別される気持ちと無意識の区別が人によっては差別と感じることが鮮明になったのである。区別の使い方は諸刃の剣だと肝に銘じておきたい。

矢野隆

大阪大学、工学部、環境・エネルギー工学



【夏会議 Day7】 2020 年 8 月 14 日

選挙と政府に関する議論、LGBTQ+パネル、RT Time、JASC Buddy 交流

開催概要

米大統領選は第 72 回会議が大きく注目していたイベントであった。選挙と
はどの国においても大きな意味をもつが、そのあり方は多様である。そこで、
7 日目の会議では、グループに分かれ、日米の選挙制度を比較し、さらに政府
のあり方の違いを議論することで、民主主義への理解を深めた。民主主義は多
様な自由のあり方を表出させるが、同じく多様性に大きく寄与するものが、
LGBTQ+への理解だ。今回は、日米双方から LGBTQ+の権利拡大に尽力す
るスピーカーをお招きし、LGBTQ+パネルを開催した。パネルには、参加者
もスピーカーとして登壇し、日本ではなじみの薄い概念を実際に体感できる貴
重な機会となった。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-9:15 選挙と政府に関する議論

9:15-9:30 休憩

9:30-11:00 LGBTQ+パネル

11:00-11:15 休憩

11:15-12:00 RT Time

12:00-12:15 休憩

12:15-13:00 オンラインゲームを通じた JASC Buddy 交流

参加者感想

夏会議7日目のディスカッションでは、いくつかのレクチャーを基に政治と性についてみなさんと議論を交わした。新たに学んだことも多く、それぞれが意見を持ち寄り共有できたことは非常に有意義なものであると考える一方で、私は当初トピックの内容にやや戸惑いを感じていた。それはLGBTQや政治性の高い話題について、十分に議論をしたことがない、あるいは一種の忌避感を私が持っていたからだと思う。「もしかしたら自分の言葉で、意図せず他人を傷つけてしまうのではないか」、そのような懸念は、多くの方も感じているところなのかもしれない。

しかしディスカッションを終え、振り返れば、そのような我々の敬遠こそが、問題を先送りにし、更に多くの被害者を生んでしまうのではないかと考えるに至った。「愛の反対は無関心」という言葉にならえば、心ない言葉に対する対応は声をあげ発信することだ。私たちはそのロジックにあまり馴染みがないが、アメリカの学生はその姿勢をよく示していた。国をまたいで行われる、日米学生会議という繋がりに、私は今日また新たな魅力を見出した。

生沼 津嘉
防衛大学校 公共政策学科



「政治と選挙」プログラムにおいては、日米の政治における Similarity と Difference、それぞれの要因、更に今我々が直面している課題について掘り下げた。

Similarity としてまず挙げられたのは、実際の議席獲得を目的としない political performer の数が少なくないことである。米国では緑の党など、日本なら先の都知事選における多数の泡沫候補者らが該当する。またあるアメリカ側参加者から両国に "We are not wearing masks" を唱える政党が存在することを Great Similarity として提示された。

だが根本的には相違点の方が多い。米国では人種や収入、宗教の多様さが Polarization を加速させ続けているが、日本では自民党が常に圧倒的多数派であり続けてきた。ここから見えるのは、日本人の選挙観とは Unacceptable な候補者を順次選択肢から排除して、結果残った Acceptable な候補者を選ぶという Process of Elimination であるということだ。日本の現状を見るにつけ、実を射た指摘ではないか。

政治とはそれ自らが機能するものではなく、citizen たる我々全員の参加を伴う。社会には無関心層や cynicism 混じりの論評も多々存するが、各自の寄与度合いや参加意識がどうであれ、それらは全て必然的に政治への関わりである。

コロナという災厄が世界を平等に覆う今、混乱に乗り曾て退けられた民族主義・排外主義が再びその兆しを見せ始めている。両国の国民に求められるのは、静かな知性と熱い想いは両立しえるものと再認識し、理解できる甘言のみに靡くことを戒め、目前の現実を真摯に見極める姿勢ではないか。難しいことではあるが。

大井 雄磨
慶應義塾大学 法学部 政治学科

【夏会議 Day8】 2020 年 8 月 15 日

被爆者の証言ビデオ視聴、福島パネル②、実行委員選挙スピーチ、黙祷、
広島アクティビティ

開催概要

終戦記念日であるこの日は、日米両国の学生が 75 年前のこの日を思い、黙祷を捧げた。第二次世界大戦終戦から 75 年たった今、被爆者である小倉 桂子様
の証言を聞いた後、平和について日米両学生がそれぞれの思いを共有し合っ
た。その後、東日本大震災復興へ向けての取り組みについてお話を聞いていく
中で、歴史的な出来事を「風化させてはならない」という思いが強まる 1 日と
なった。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-9:45 第二次世界大戦ビデオ：原爆の歴史～被爆者の証言～

9:45-10:00 休憩

10:00-11:00 福島パネル②復興への公的アプローチ

11:00-11:15 休憩

11:15-11:50 実行委員選挙スピーチ

11:50-12:00 終戦記念日の黙祷

12:00-12:15 休憩

12:15-13:00 「日米平和の灯火を」：広島アクティビティ

Endeavors for Peace: Hiroshima Activity

福島パネル②セッション内容

- ・福島県の風評対策の取り組みについて、地元メディアとしてどう受け止めて
いるか。
- ・風評の原因となっているのは、どのようなことか。また、克服するため
には、どのようなメディア発信が行われるべきか。（震災後の流通構造の変化に
ついて／パワフルな画を発信しようとする全国メディア／海外でのイメージの
アップデートが行われない現実）
- ・安全性と魅力を発信するにあたり、それぞれどのようなバランスで発信して
いかなければならないのか。
- ・福島の今後のイメージ戦略はどのように展開していくべきか。

参加者感想

このプログラムは、米国の原爆開発の歴史を学び、広島への被爆者の方の証言を伺った後に、夏会議のテーマ「Endeavors for Peace」に沿ったディスカッションを行う、というものだった。その中で私が特に感じたのは、現在の平和教育の問題点である。

現在の教育は「広島・長崎に原爆が投下された」「8月15日に終戦を迎えた」等々、事実を淡々と学習することに終始している。これは真の平和教育ではないと感じる。冒頭で触れたような内容を学んだうえで「戦争はすべきでない」という当たり前の文章をさらに深掘りし、「なぜ戦争（あるいは原爆投下）を回避できなかったか」「平和を享受し続けるためには何が必要か」という問いに対して考えを深める機会を設ける必要があるだろう。

また後半のディスカッションにおいて、私の班で日米問わず多くのメンバーが口にしてきたのが、被爆者の実際の体験、生の声を聞くことの重要性だった。私は長崎出身のため被爆者の講演を聞く機会は比較的多くあったが、今回再び証言を聞き、改めて、上述の問いについて考える姿勢を忘れずにいようと感じた。

今年の8月は、JASCを通して戦争・原爆について考える機会に富む、終戦75周年の節目にふさわしい8月となった。

太田 智寧

早稲田大学 政治経済学部経済学科



震災から今年で9年目を迎え、福島県内の多くの地域では震災前とほぼ変わらないような生活が営まれており、一見震災の記憶と惨禍は完全に風化され、清算されたかのようにも見受けられる。しかし、福島第一原発周辺の複数の市町村は震災から9年経った現在も避難指示区域に指定され、故郷から離れて生活することを余儀なくされている人々が多くいる。避難指示が解除された地域でも復興の歩みは速くなく、県内の産業が震災によって受けた深刻な影響は未だに大きな爪痕を残している。ご講演の中での、風評被害によって失われた県産品への需要についての議論では、震災の影響は単に消費者が福島県産品を選択しないということに留まらず、震災によって余儀無くされた流通構造の変化や事業・取引先の変更など、根本的な産業構造の動揺という事態を招き、震災によって一度福島から離れた需要を再び取り戻すことが非常に困難になったことに問題の焦点がある、というお話があった。一方で、こうした地域では震災により表面化した社会問題や変化した社会環境を逆手に取ったスタートアップ事業や、スマート農業、新技術の開発など、新たな環境と課題に対応したイノベーションが続々と生まれているというお話もあった。このような歩みをローカルメディアが地元目線で地道に、しかし克明に伝え続けていくことが復興への重要な貢献となる。9年の歩みを過大評価も過小評価もすることなく、ただ真摯に福島を見つめ、今後の課題と希望について考えることが、動ける私たちの責務である。

反後元太
東京大学部教養学部教養学科

【夏会議 Day9】 2020 年 8 月 16 日

RT Time, ソフトパワーレクチャー（日本の美学とそのイメージ、
グローバリゼーションと Cool Japan 政策）

開催概要

シンポジウムへ向けた最後の RT Time となった今日は、どの分科会もシンポジウムへの準備で充実していた。その後、ハードパワーについての議論が主流となる日米学生会議ではあまり取り扱われることのないソフトパワーについてのレクチャーを受けたことで、日本文化やアメリカ文化について誰もが当事者意識を持ちながら白熱した議論を深めることができた。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント

8:15-10:45 シンポジウム前最後の RT Time

10:45-11:00 休憩

11:00-12:00 日本の美学とそのイメージ、グローバリゼーションと Cool JAPAN 政策

12:00-12:15 休憩

12:15-12:35 ディスカッション

12:35-13:00 Soft Power まとめ、ディスカッション内容発表

<ディスカッションクエスチョン>

文化の盗用を抑制する時、私たちはグローバリゼーションを弱めているのか？
ソフトパワーをどのように共有すべきか？



参加者感想

第72回日米学生会議を締めくくる講演・ディスカッションのテーマはソフトパワーであった。幼少期から内容面で慣れ親しんだアニメや漫画、また近年出された映画の作品を、社会への潜在的な影響力を持つ客体として捉えなおす作業は斬新であった。日米の学生間で、「あるものが文化的盗用と捉えられてしまうと、グローバルイゼーションも阻まれてしまうのか。」というトピックで議論をした際には、“cultural appropriation”と“cultural appreciation”の線引きが結局のところ、個人の判断によって変わってしまうという困難さを感じた。同時に、その個人が「文化」を「借りる」ことで何を意図しているのか（例えば、人気を得ようとしている等）、その個人がどのような社会的立場にいるかを基準に考えていくこと（例えば俳優であれば、文化の「借用」による影響力は一般の人間のそれをはるかに上回る）、それらこそがこの線引きを決めるにあたり重要な要素になるのでは、という意見もあった。こうした、「文化的盗用が一体何を指すか」という根源的な問いについて思考を巡らせた今回の議論は、個人的に今年の夏会議の中でも特に印象に残る議論であった。

鈴木悠太

東京大学教養学部文科一類

JASC72nd がスタートして以来、私たちの分科会では週2日の分科会ミーティングを設け、分科会テーマについて理解を深めるために多くのトピックを扱い、議論を重ねてきた。また、夏会議が始まる直前の分科会ミーティングからは、夏会議最後の Symposium において、私たちが話し合ってきたことのまとめとして、何を示すのかという部分を中心に話し合った。

今までの議論と Symposium に向けた議論では決定的に異なることが一つあり、それは Symposium に向けた議論では、発表として示す“答え”を議論の中で決めなければいけないというところであった。何かを答えとして出さなければいけないというところに囚われすぎてしまい、発表として本当にこれで良いのか、違和感を感じる瞬間があった。しかし、一度立ち止まって、お互いの思いや考えを再確認する時間を設けることができた。これは JASC を経験する前ではできなかったことだと思う。議論をすすめる中で結論を出すだけでなく、決定に至る過程も同様に大事であると感じた。本のページをめくるように、全員が同じ考えを共有しそれを積み重ねていくことで、同じ場に立って話していくことができると経験を通して学ぶことができた。

尾崎純矢

九州大学大学院工学府機械工学専攻

【夏会議 Day10】 2020 年 8 月 17 日

シンポジウム、第 73 回日米学生会議に向けた実行委員選挙

開催概要

会議 10 日目には、会議の中間報告としてのシンポジウムが開催された。各分科会はここまでの活動で話し合った内容や得た成果についてプレゼンテーション形式で発表をし、多くのアラムナイや関係者の方にお越しいただいた。日米学生会議史上初のオンラインでのシンポジウム開催となったが、各分科会は事前に録画した動画を組み合わせるなど、創意工夫に富んだ発表を行い、夏会議の成果とした。シンポジウム後には、第 73 回会議の実行委員を決める選挙が行われた。

プログラム内容

8:00-8:05 アナウンスメント

8:05-9:15 シンポジウム (文化とアイデンティティ,健康と社会,ハードパワーと個人)

9:15-9:30 休憩

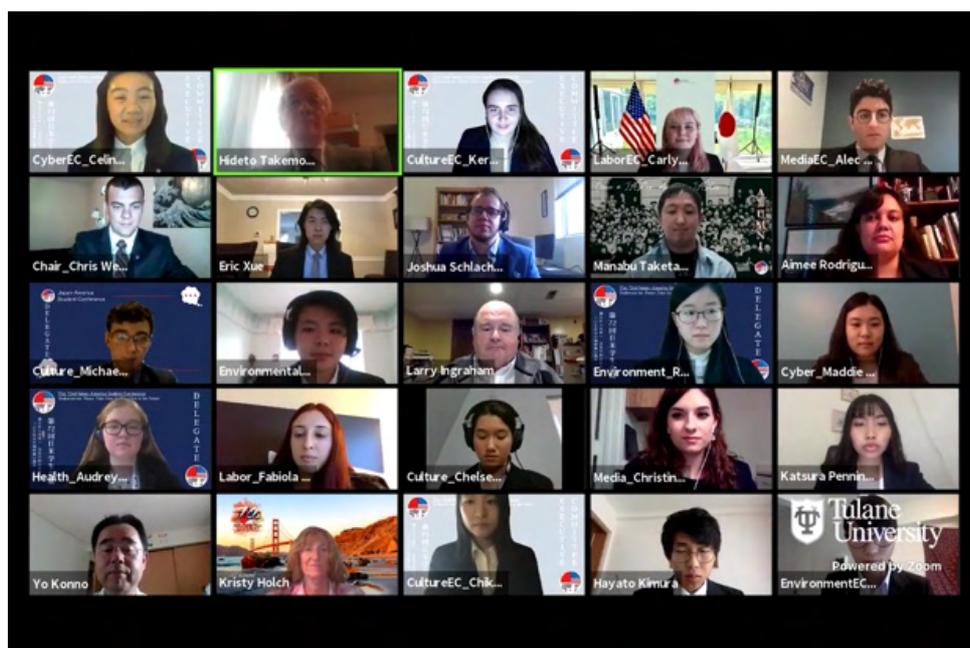
9:30-10:30 シンポジウム(サイバー空間の脅威、メディアと民主主義、)

10:30-10:45 休憩

10:45-11:15 シンポジウム(環境と経済,働き方と社会)

11:15-11:30 休憩

11:30-13:00 第 73 回日米学生会議に向けた実行委員選挙



参加者感想

夏会議 10 日目は、一大イベントであるシンポジウムが開催された。本年度はそれぞれの分科会が予め録画したプレゼンを用意し、Zoom を通じて発表した。さらに、日米学生会議同窓会員向けに、YouTube によるライブ配信も行われた。私が所属するサイバー空間と脅威分科会は、他の 6 つの分科会との共通項とあるべき将来について発表した。

プレゼンテーションの冒頭では、夏会議前に話し合った内容、例えば「サイバー空間」の定義、特定機密保護法の是非、新型コロナウイルス感染症拡大対策におけるプライバシーの権利などについて発表した。また、他の分科会とサイバー分科会の連関、そしてコロナ禍での将来にどのような課題があるかを順に発表した。私は働き方とサイバー空間についてのスライドを担当した。その中では、テレワークによるサイバーセキュリティの重要性や仕事の成果を評価する際の課題について話した。また、ジェンダーとテレワークについて、全てのコミュニケーションがオンラインで記録されることによってセクハラ・パワハラなどのハラスメントが少なくなるのではないかという意見を共有した。分科会ごとに発表内容やアプローチの仕方が異なり、興味深かった。アラムナイの皆様へのフィードバックや質問を今後の議論にも活かしていきたい。

木村理紗子

早稲田大学国際教養学部国際教養学科

夏会議の集大成であるシンポジウムはどの分科会も力を入れており、充実した時間だった。例えば健康分科会はチームメンバーが考える「健康」の定義が議論によってどう変化したかを発表しており、サイバー分科会は他の分科会との合同ディスカッションで学んだことを紹介していた。また私が所属するメディアと民主主義分科会ではメディアに関する社会問題の現状分析や提案を発表した。第 72 回日米学生会議は来年 1 月にもう一度会議が開催されるため、シンポジウムは締め括りではなく中間発表である。シンポジウムで他の分科会の発表を聞いて合同ディスカッションのアイデアが浮かんだ人や、自分の分科会のビデオを制作する過程で冬会議までの課題を見つけることができた人も多だろう。例年であればシンポジウムをもって終わりになってしまうが、私たちにはまだ 5 ヶ月間残されている。その期間の中にはメディアと民主主義分科会でもたびたび話題になった米大統領選挙も含まれている。今後も常にアンテナを張り続け、シンポジウムでの反省や発見を冬会議に活かせるように準備したい。

松村瑞希

国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科

【夏会議 Day11】 2020 年 8 月 18 日

RT テーマ別アクティビティ、JASC Buddy フリータイム、リフレクション、
閉会式

開催概要

シンポジウムを終え、昨日までの緊張感が徐々に達成感へと変わりつつある最終日。この日は、翌年の会議を作り上げる第 73 回日米学生会議実行委員のメンバーと、その他の参加者で異なるスケジュールとなった。分科会テーマ別アクティビティでは健康分科会にちなんだヨガや、文化とアイデンティティ分科会にちなんだ自己分析、働き方と社会分科会にちなんだ人生設計図など議論の枠組みを超えた分科会関連のアクティビティを通し、それぞれで交流を深め合った。そして、最終リフレクションでは画面を拍手のリアクションボタンが埋め尽くし、感涙する参加者も少なくはなかった。

プログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント
8:15-9:15 RT テーマ別アクティビティ
9:15-9:30 休憩
9:30-10:30 JASC Buddy フリータイム
10:30-10:45 休憩
10:45-11:15 JASC Buddy フリータイム
11:15-11:35 ISC、IEC より締め言葉
11:35-12:30 リフレクション
12:30-12:45 休憩
12:45-13:00 閉会式

新実行委員向けのプログラム内容

8:00-8:15 アナウンスメント
8:15-11:00 EC ワークショップ
11:00-11:15 休憩
11:15-11:35 ISC、IEC より締め言葉
11:35-12:30 リフレクション
12:30-12:45 休憩
12:45-13:00 閉会式



参加者感想

夏会議において予定された最後のプログラムが「リフレクション」だった。リフレクションでは皆が夏会議にかけた想いを発露する瞬間に何度も立ち会うことができた。感極まって涙するものばかりで、私もつられて涙腺が熱くなった。次期73期の実行委員となった者たちのほとんどが選ばれた感謝と次期への展望を表明してくれ、その熱い思いを耳にした私は改めて日米学生会議が好きになった。私は72期の日米学生会議を作り上げてくれている実行委員および開催を支えてくれたスポンサーへの感謝と、私自身が日米学生会議に参加できた喜びと、この日米学生会議で出会うことができた参加者皆への感謝を述べた。私はありきたりかもしれない言葉たちに素直な気持ちを乗せたつもりだ。英語も他の日本側参加者ほど上手ではない自覚があるが、それゆえに拙いからこそ誠意をもって伝えようとした。その言葉が他の参加者にどれほど届いたのかは正直なところ分からない。それでも言葉を言い終えたとき、多くの参加者が拍手してくれていたのが目についた。それだけで自分が日米学生会議の参加者であったことを改めて実感し、その場に居られたことに喜びを覚えた。皆と会いたいという思いを強くした。目下の状況では見通しはつかないが、冬に彼らと相まみえることが待ち遠しくてたまらない。

亀井龍
明治大学法学部法律学科

「第72回日米学生会議参加者の夏が終わっていく。」

一人、また一人と日本側、米国側双方の参加者が夏会議での学びや思いを口にする度に感じたことは、まさにこれだった。夏会議で価値観が大きく変わった参加者、悔しい思いをした参加者、笑顔で楽しい思い出を語る参加者、そして、思いのあまり涙を流す参加者。各々が多様な感想を持っていたが、後悔を口にした参加者はいなかった。第72回日米学生会議への熱い思いと感謝の気持ち伝え、段々と全員の心が一つになっていくのを感じ、リフレクションが日米学生会議の醍醐味の一つである理由を実感した。

そして、実行委員、参加者が共に思いを共有し、冬会議ではハワイにて対面で会えることを信じ、夏会議のリフレクションは幕を閉じた。

第72回日米学生会議の夏会議はどれも印象に残るレクチャーやディスカッションばかりであったが、皆で行ったこのリフレクションは、誰もが一生忘れることはないだろう。それほどまでに特別な時間であった。

中澤拓也

岡山大学経済学部経済学科



実行委員総括

選考活動を終え、27名の参加者を迎えた私たちは、オンラインで会議の質を担保させるという、いまだかつてない課題に直面した。私自身、参加者として過ごした3週間の夏会議が契機となり実行委員として活動するに至ったため、なんとしても高密度で充実したプログラムを参加者に提供したいと必死であった。

例年であれば、「この時期くらいにはこれを終わらせておく」といったワークロードのテンプレートがあった実行委員業務だが、本年は4月に全てのプログラムの内容形態を見直さなければならなくなった。「あと4ヶ月しかないのか...」と悲観的になる自分の気持ちを抑え、「私たちは参加者に何を伝えたいのか」というシンプルな問いを反芻し続けた。

そして人々の関心が新型コロナウイルスの一点に集中している時こそ、目を向けなければいけない課題があるのではないかという発想で、福島パネルの企画に至った。新型コロナウイルスは「自分ごと」として全国民が捉えられている一方で、10年前に起こった東日本大震災からの復興は、時を経て「自分ごと」から「他人ごと」として風化している現状に課題を感じたためだ。

幸いなことにご縁をいただき、復興庁や福島県庁、地元メディアの皆様にご協力いただき、本企画を成功させることができた。毎年、日米学生会議では開催地に由来した課題にフォーカスすることが特徴であったが、開催地に縛られないオンライン会議だからこそ取り上げることのできたトピックであったと考えている。

本企画を通じて、このような状況下にもありながらも、学生の活動を応援し、協力してくださる社会人の皆様の存在の大きさを改めて実感した。福島パネル、そして夏会議企画にご協力くださった全ての関係者の皆様に感謝の意を表し、結びとする。

深津佑野
上智大学法学部国際関係法学科

10日間のプログラムを作る為に、私たちはどれほど議論を重ねてきたことだろう。「オンラインで毎日会議を続けるなんて、集中力が持たないのではないか」「目が疲れるし、体力的にもきつくないか」「こんな短時間で参加者同士が『本音の対話』を経験できるのか」ネガティブな発言に心が砕かれそうになりながらも私たちは参加者を想い、必死で可能性を信じ続けた。

昨年、第71回日米学生会議で人生を変える夏を経験した私は、オンラインでどのようにそのクオリティを実現できるのか、「オンラインにはオンラインの良さがあるはずだ」と言い聞かせながらも正直不安で押しつぶされそうだった。分刻みのロジを組んでは中止が繰り返される中で、どうしても何か参加者へ届けたいという気持ち、それだけが私を動かしていた。「キャンセル」という形で中止にすることは簡単だが、参加者の為にも妥協はできない。オンラインでも充実した内容のアクティビティを検索しては、「次のページへ」に期待しながら、画面とにらめっこを続けた。そんな中、参加者の存在がいかに私たちの心の支えとなっていたことか。地球の遠く離れたアメリカにいる実行委員の仲間達も、きっと同じ気持ちだっただろう。何度も挫けそうになりながら、見えない敵と戦ってきた。

私たち夏会議担当は、偶然にも全員が生物学的性の「女性」に該当するということもあり、「共感力」に長けたメンバーが多かった。「その意見いいね！すごく好き」などのリアクションや、一つ一つのタスクに対する「ありがとう」という些細な一言に何度も救われた。また、オンライン開催になったことによる不安やプレッシャーは、自然とオープンに主張でき「悲しいのはみんな同じなんだ」という気持ちが、より一層私を前へと押ししてくれた。

時差による関係でミーティングは毎週日曜日朝8時に始まり、日本にいる実行委員メンバーは眠さを堪えながら話し合いに参加していた。JASCへ恩返しをしたい！と熱く語る自分の元所属分科会コーディネーターに憧れ実行委員選挙に立候補したが、いざとなって引き受けた「責任」の重さが次第にプレッシャーへと変わり、そのプレッシャーは錘のネックレスのように私を苦しめた。自分の無力さに涙を流す日々も続いた。だが、そんな中で画面上にキラキラ光る参加者の笑顔や、辛いことも笑って乗り越えようと強く粘るアメリカ側実行委員、常に自分を支えてくれた日本側実行委員を見ていると私も頑張らずにはいられなかった。夏会議中、画面上にいた全員の気持ちがひとつになったあの瞬間、私は心から日米学生会議の偉大さを思い知った。無力な私を動かしていた原動力は、仲間への感謝の思いだった。夏会議を振り返って、やはり一番伝えたい思いはこんな私を支えてくれて「ありがとう」という一言に尽きるだろう。今後とも実行委員を含めた参加者全員の「次のページ」に期待しながら、感謝の意を表し、結びとしたい。

白石智鏡

立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部

日米学生会議とは、何のために開催されているのだろうか。新型コロナウイルスの出現から日米双方の実行委員ともに何度も考えた。「日米の学生が2週間共同生活を行うこと」をキーとして始まった日米学生会議は、ソーシャルディスタンスの世界でどのような意味を持つのか。日米学生会議は不要不急なのか。第72回日米学生会議の中止によって、生命の危機が生じたり、経済に大きな影響を与えるわけではない。では、なぜ第72回日米学生会議を開催するのか。その答えを参加者そして関係するすべての人に伝えるべきだと思った。

日米学生会議史上はじめてのオンライン会議を開催することとなり、私たちはいかに共同生活をオンラインで再現できるかを考えていた。第71回日米学生会議のスケジュールをそのまま活用し、四六時中ビデオ通話をつなげたり、フリータイムを多く設けるなど、実際の距離をバーチャルで埋めることを目標にしていた。しかし、参加者との交流を続けるなかで、これは大きな間違いであることに気づいた。私たちは、バーチャルで開催されるイベントごとに本当の日米学生会議の経験をさせられなくて申し訳ないと参加者に話していた。しかし、ある参加者に「では、第72回日米学生会議は本物ではないのか」と聞かれた。そこで、第72回日米学生会議は対面で行ってきた今までの会議となにも変わらないことに気づかされた。私たちは会議の形態を従来型に近づけることにばかり注目していて、日米学生会議を通じて参加者に得てほしいことに注目できていなかった。つまり、方法論ばかりにこだわり、目的を見失っていた。そこから、私たちは夏会議のスケジュールおよび内容を再検討した。

私たちは改めて、第72回日米学生会議を通じて参加者に得てほしいことについて議論した。日米学生会議は、日米の学生がともに社会情勢や社会課題について意見交換をし、教科書より深いレベルで相手について理解することである。さらに、学生という立場で草の根レベルの交流を行い、将来の平和への貢献を目指す。結果として、目的の一つである意見交換にはオンラインが対面よりも適していることに気づき、夏会議の主軸は議論になった。コロナ禍の世界をどのように見て、自分たちが担う未来はどうあるべきか、全員が平等な条件で議論を行うことができた。そして、夏会議の各セッションの内容も現代の若者が考えるべきことを意識した。

第72回日米学生会議の実行委員の経験により、私はWith コロナの世界におけるコミュニケーションの最先端を走る経験ができたと思っている。社会情勢に翻弄されることをはじめて経験し、未来を創る人としての責任を感じた。第72回日米学生会議は、コロナ禍だったからこそ他者を理解すること以上に、他者と協力することを教えてくれた。

野澤 玲奈
早稲田大学 文化構想学部 国際日本文化論プログラム

第72回の夏会議の企画・運営は、私にとって一生忘れられない色濃い思い出である。恐らくもう一度同じことが起きても乗り越えられるか分からない、そんな難しい課題が山積していた実に面白い会議であった。

まず、夏会議の実施場所・形態を確定する上で全く情勢が読めなかったことが前代未聞であった。夏会議は、実行委員に就任した瞬間から実行委員16名総出で準備に取り掛かっていたものであり、春には大まかな形が出来上がっていた。サイト選びから、各アクティビティまで、それぞれのサイトコーディネーターが知恵を絞って作り上げたプログラムを、感染症の程度も分からないうちに簡単に諦めることはできなかった。そのため、現地で実行可能な準備を進めつつ、万一のオンライン化に備え、オンラインプログラムを作成するという、荒業の並行作業で、4月を迎えた。

感染状況を踏まえ、オンライン化に勇気をもって振り切った後、実行委員内ではオンラインプログラムの詳細について、かなり大きな意見の違いが見られた。具体的には、夏会議全体の日数から、開催時間、公式プログラム以外の時間のアクティビティの有無など、会議の内容よりもまず、全体概要について白紙から立て直す必要があったことは、今考えてみてもよく乗り切れたと思う。各実行委員・日米の選好の違いなど、多種多様な意見が氾濫し、全員溺死しそうになりながらも、なんとか昼夜を削りプログラムを作り上げた。この経験は、私にとって、各実行委員の日米学生会議の夏会議を成功させたいという熱意と、諦めない底力に衝撃をうける大きな転換点になった。

1人きりで同じ状況に立ち向かっていたとしたら、私は心が折れ、途中で開催を諦めていたと思う。今までの人生で経験したことがない程の暴力的な量と質の課題をなんとか順番に自分たちの考える最善の策で解決していくことができたのは、他の15名の実行委員の力と、既に活動を始めていた72回の参加者の存在、そして、静かにいつも見守ってくれていた国際教育振興会の大人の方々の影響が大きかった。

オンラインでのプログラムが確定するまでが、試練の日々ではあったが、一度作ってしまえば、あとはそれぞれが緊張感と責任をもって自分のパートを運営するだけでよかったため、かなり実行委員も会議本番を楽しむことができた。この報告書では、夏会議の様子がかなり詳細に記載されることと思うが、実際には、それぞれのプログラムの内容よりも、そこに至る過程が、第72回実行委員にとって、簡単に言葉にはできない、かけがえのない宝物であると考えている。

世の中には、結果が出せなければ過程に価値はない、と結果を重視する風潮があるが、学生という、成果物よりも成長を重視してもらおうことのできる温かい環境で、このような会議の企画・運営を伸び伸びとできたことは、何にも代えがたい経験になった。重ねて、夏会議の開催にご助力をいただいた多くの方々に、深く謝辞を表し、夏会議の総括とする。

小溝舞
慶応義塾大学法学部政治学科3年

【24時間 zoom room】
2020年8月8日～8月18日

開催概要

本来であれば24時間寝食を共にする日米学生であるが、オンラインでの開催から、プログラム自体の時間が1日あたり5時間ほどに短縮された。学生間のコミュニケーション不足を補うために、「24時間 zoom room」を夏会議中開催した。両国の学生は、それぞれの深夜や早朝に各自の体力と都合とを鑑み、自由に部屋にいる他の学生と同じ時間を過ごすことが可能になり、学生間の交流が様々な形で行われた。

【ジェンダー勉強会】

2020年8月12日

開催概要

「男女平等」や「性の多様性」が叫ばれて久しい。漠然とした議論の必要性は感じていてもジェンダー論を正しく理解している学生がどれだけいるのだろうか？巷に広がる「ジェンダー論らしきもの」をみてわかった気になっていないだろうか？この勉強会では医学と文学という他に類を見ないほど全く異なった視点からジェンダー論を同時に見つめて見ることで新たな気付きや既存の価値観の破壊を試みた。「性とはなにか？」という根源的な問いから社会におけるジェンダーの捉え方まで幅広く扱い、今一度次世代を担う学生たちと共にジェンダーについて考える機会とした。

プログラム内容

19:00-19:20 医学生講義「性別とは何か？」

19:20-19:40 ジェンダー論を研究中の学生講義「Queer Studies とジェンダー論」

19:40-20:00 医学×文学 登壇者パネルディスカッション

20:00-20:40 グループ・ディスカッション「男性とは？男性らしさとはなにか？」

20:40-21:00 全体共有

参加者感想

医学部の学生とジェンダー研究をしている学生によって、それぞれの専門の視点から「ジェンダー」について学ぶ勉強会が行われた。生物学的性と社会的性、セックスとジェンダー、Queer Studiesなどの概念についてレクチャーの後、二人によるパネルディスカッションが行われた。

「ジェンダー」と聞いて、私の中で連想される言葉は、フェミニズムや女性の権利向上といったものであった。そのためディスカッションで、「男性らしさとは何か」というテーマが与えられたとき、驚いたと同時に考えこんでしまった。自分も無意識に男性に対して、こうあるべきだという押し付けのような価値観を抱いていたことに気がついたからだ。

これは、どの差別においても言えることだが、男女間で違いがあること自体は悪いことではない。しかし、そこに個人が生きづらさを感じたり、自分のアイデンティティが社会の価値観や構造と一致しないことで悩んでしまったりするような社会は、やはり改善されるべきである。ましてや性別を利用して不当な扱いをすることは許されるべきではない。また、自分は性別を理由に嫌な思いをしたことがないと思っけていても、学部選択や職業選択において、無意識に選択肢を狭めていたということもあるだろう。

「男女平等」や「女性の社会進出」といった言葉が存在する限りは、本当の男女平等は実現できていないのかもしれない。「ジェンダー」を意識することなく、自分がどう生きていかを、何にも縛られることなく自由に選択でき、自分の可能性を最大限に生かせる社会が実現できればと思う。そのために私たちにできる身近なことは、他者への想像力を働かせ、そして社会の価値観に苦しめられることなく自分の意思で挑戦し続けることなのかもしれない。

医学と文学という一見全く異なるように見える二つのアプローチだが、結論としてどちらも同じような方向を向いていたのが興味深かった。今回の切り口はジェンダーであったが、そのほかの社会問題やアイデンティティの問題に応用できるものだと感じた。新しい知識と視点を与えてくれた二人に感謝をすると共に、これからも学びを止めず考え続けたいと思った。

濱田 真利奈
慶應義塾大学 法学部 政治学科

実行委員総括

この勉強会と開催することにあたり、私は伝えたいメッセージがあった。本来、実行委員として参加者に何かを直接的伝えることはあまり行われていないが、未来を担う参加者に一度止まって考えてほしかった。私たちのアイデンティティの中には「性別」にまつわる部分があり、自分の人生設計や他者とのかわり方にも大きく影響を与える。ジェンダーやフェミニズムなどの単語は、広まりつつある一方で、関係者と傍観者の見えない境界線ができてしまっている。ジェンダーという言葉を知ると、性差別や性にまつわるアイデンティティに悩む人の話であると考えられることがある。だから、私は参加者に自分のアイデンティティとは何かについて広い視点で考えてほしいと思っていた。そこで、医学を学ぶ参加者と話すなかで、医学における性別の定義とジェンダースタディーズにおける定義は両方不確実であることに気づいた。しかし、人間は不思議と区別することにこだわってしまうという事実を二人で伝えたいと思った。医学と文学、大学では絶対に同じ教室で勉強することがない学生同士がこのようなイベントを開催できたのも日米学生会議という場だったからである。このイベントを開催できたことに本当に感謝する。

野澤 玲奈

早稲田大学 文化構想学部 国際日本文化論プログラム

【Casual Debate～男子校 vs 共学 vs 女子校～】

2020年8月14日

開催概要

「己と社会の価値観に挑め」をテーマとした第72回日米学生会議において、参加者自身が互いの文化を共有する必要性が生じた。上記を成す企画として身近なケースから環境と価値観の関係性を問うことを目的に「共学 VS 男子校 VS 女子校」が日本側参加者の主催により実現した。トピックを絞った企画であったにもかかわらず、議題は日米間の教育の差異や格差についてまで発展し、本音の対話が夜通し繰り広げられた。

ディスカッショントピック

- ・ Homo-society で育まれる文化は排他的か？
- ・ ジェンダーではなく価値観を再生産する場としての男子校、女子校を作ることとは可能か？
- ・ 男子校、女子校は廃止すべきか？

参加者感想

学校機関での文化的な経験や傾向は、意外にも学校を超えて共有されにくい。夏会議期間にジェンダーについて考える機会が多かったこともあり、このトピックについて、参加者同士で本音で話すことに意義があるのではないかと思ひ、このイベントを共同企画・開催した。

まずは互いにステレオタイプや偏見に基づく印象を共有した。興味深いことに、この議論でよく口を開くのは非共学出身者であった。また議論の過程の中で、特に男子校出身者は母校愛が強いのではないかという仮説が浮かび上がった。また、男子校や女子校における「gender」への意識付けについても議論された。一例として歴史上、男性のみが教育特権を持っていた期間が存在したことに起因する、「男性は男性としてパートナーを守れるようにあるべき」という思想があげられる。また、こうした動きへのアンチテーゼとして「女性は女性としてひとりで生きていけるように」教育されていることがわかり、これらはどんなベクトルであれ、gender への意識づけがされていると考えられた。これは Western の別学は社会的地位を表すものであることと構造が類似している。

一方で、共学も平等な教育機会という意味ではジェンダーフリーでありながら、荷物の運搬は男子に任せられるなどジェンダーロールが強まる側面を持っているのではないかという意見もあった。

最終的に、男子校か女子校か共学かということ以外にも、進学校や附属校か、私立か公立か等当然ながら学校の理念と様々な性格が相まって文化も異なっていることに気付くことができた。自由で安全な JASC の場を上手く活用したディスカッションになったと思う。

佐藤 顕子

学習院大学 国際社会科学部 国際社会科学科

実行委員総括

女子校に関するイベントをやりたい。一人の参加者から連絡を受けたことからこのイベントの開催が決定した。従来、日米学生会議は、実行委員によってイベントが開催され、その中で参加者は様々な気づきや学びを得ていく。勉強会やキャンプなど参加者主体で行うイベントもあるが、枠組みは実行委員で用意する形式をとっている。だから、この一人の参加者の連絡は、本当に喜ばしいことだった。日米学生会議ではない、ディベートという形式を使うことで、あえて参加者同士、互いのアイデンティティへ率直な意見を述べた。このような自発的な勉強会もオンラインの会議だったからこそ開催でき、国境以外の異なるアイデンティティの追及に努めることができたと思う。

野澤 玲奈

早稲田大学 文化構想学部 国際日本文化論プログラム

【中国勉強会】

2020年8月16日

有志の参加者により企画・開催された中国勉強会は、2日間にかけて夏会議終了後の夜に行われた。日米関係を見ていく上で欠かせない中国の視点を通して、これまでとは違った新鮮な価値観を学ぶことができ、日米の枠組みを超えた「中国」について発表者も参加者も相互的に学び合える大変意義深い機会となった。

開催テーマ

「中国の対外戦略／台湾・香港・ウイグル」「一带一路」「海洋進出」「アイデンティティから見る台湾の今後」「中国における少子高齢化」

ディスカッショントピック

- ・「中国の夢」は実現可能か
- ・果たして今後の世界において国家人口が減少することは不利なことなのか？
- ・コンパクトシティ構想
- ・逆に労働力の面から見た中国の強みとは？
- ・日本の福祉・保険制度ってこのままでいいのか？

参加者感想

中国にゆかりのある二名の学生が発起人となり、発足したのが中国勉強会である。第2回目となる今回は、中国の人口減少社会と華僑華人のアイデンティティについて学んだ。前半の中国の人口減少社会についての勉強会では、中国の一人っ子政策とその段階的な廃止、そして少子高齢化社会における社会保障制度のあり方について学んだ。第2部では、カリフォルニア、メルボルン、シンガポールに住む華人の皆さんをお招きして、パネルディスカッションを実施した。

第2部のパネルディスカッションでパネルを務めた3名は私の古い友人たちである。そのうちの一人から大変嬉しいフィードバックをいただいた。「質問の投げかけ方、相槌のうち方、どこをとっても、JASCはcompassionate且intelligentな人たちの集まりだと分かる。社会人になった今の自分は、利益ではなく、純粋な好奇心の下に人が集って、心理的安全性が担保されたコミュニティがいかに大切かが分かる。素晴らしいコミュニティだね。」とのことであ

った。短い時間ではあるが、私が感じる JASC の素晴らしさが外部の方にも伝わっていたと分かり、心から嬉しくなった出来事である。

日本とアメリカの学生会議において、なぜ「中国」の勉強会を開催するのかは、企画運営に携わる中で突き当たった疑問である。結論から述べると、日米学生会議でどうしても扱わなくてはならないトピックは本来的には存在しないのではないかと。その一方で、世界の諸問題を日米という線分で切り取った時にのみ抽出される結論があるはずである。とりわけ今日の中国は、日米関係を語る上で無視することができないアクターである。その経済力はもちろん、東シナ海における安全保障、コロナウイルス対応など様々な文脈において、中国は頭をもたげてくる。また、少子高齢化や地域間格差など中国が抱える問題から、日米へのインプリケーションを見出すことも可能ではないだろうか。

飛知和志帆

早稲田大学・政治経済学部・政治学科

実行委員総括

中国という単語を耳にしたときに抱くイメージはなんだろうか、という点にこの勉強会は集約されたと考えている。勉強会ではざっくり言うなれば二回に分けて、いわゆるハードパワー的な観点とソフトパワー的な観点の両観点から再考する機会となったのではないかと。どうも単語だけを聞くと悪いイメージが先行してしまいがちだが、実情はやはり複雑だ。どの国にも政府があって権力を持つ人もいればそこで暮らしている人もいる。そうした観点に気付き、さらなる思索の一助にこの勉強会がなっていることを願う。

武末崇義

東京外国語大学国際社会学部



【米国からの視点～東アジア情勢の展望と沖縄の立場～】

2020年12月18日(金)

開催概要

参加者はここまで、沖縄における基地問題や政治について、主に日本側の観点から論じてきた。沖縄行政責任者や外務省、研究者の方々からお話を伺い、沖縄問題の現状について議論を深めてきたからこそ、米国側の観点からこの問題に従事している方にお話を伺う必要性が生じた。

そこで在沖縄米国領事館 Richard Roberts 広報官にご登壇いただき、米国側の観点、また一個人の観点から、沖縄の実情についてご共有いただいた。

プログラム内容

Time	Content
18:00~18:10	Opening
18:10~18:25	Lecture “U.S. Perspectives - Prospects for the situation in East Asia and Position of Okinawa”
18:25~18:55	Q&A
18:55~19:00	Break
19:00~19:40	Discussion “What are key topic questions to consider in Okinawa that should be examined on the field?”
19:40~19:50	Sharing Discussed Ideas and Thoughts
19:50~20:00	Feedback & Closing

参加者感想

沖縄における在日米軍基地問題は、頻繁に耳にするが故に誰もが何となく理解した気になりがちな問題である。が実際この問題の本質をきちんと語れる人間がどれ程いるだろう。「地元民は反対だから」「国防に必要だから」等の表層的議論に終始していないだろうか。

この問題の本質たる日米両国の大命題は講演内でも示唆された通り「東アジアの安全保障秩序の創生」であり、その安定のために何が必要かをこそ我々は考えねばならぬ筈だ。

それ故この問題は、外交・安全保障的テーマと国内政治的テーマに分けて考える必要があり、日本政府のタスクはその2つにどうブリッジをかけるかに他ならない。即ち、国民にとって必要な選択の実行と痛みを覚える人々への適切な措置の議論は別物で、二者択一や「国益>地方」等の短絡的レッテル貼りとは対極のテーマであることを理解した上で議論を始めない限り、机上の空論以上のものは生まれえないのだ。

沖縄問題は金のみでも基地撤収でも当然解決できない。抜本的解決策が真に存在するかも危うい。だが少なくとも理想論・心情論から脱却しない限り、具体的政策への道筋は決して見えて来ないのだ。

それらを理解したとき、ご講演者リチャード広報官の「君達は基地”問題”を何と訳す？problem かそれとも issue か」という問の重さが、改めて胸中に蘇るだろう。

大井雄磨
慶應義塾大学法学部政治学科

【琉球新報勉強会】 2020年12月19日（土）

開催概要

2020年が日米安全保障条約改定から60年という節目の年であることから、第72回日米学生会議では、事前学習の機会においてうちなーんちゅのアイデンティティ、地政学や県庁からの視点から考える基地問題等「沖縄」に関する様々なトピックを扱ってきた。複合的に沖縄を取り巻く事情を考察するにあたって「メディア」の視点が不足しているという考えから本勉強会の開催に至った。開催の目的は、これまで勉強してきた基地問題について、メディアがどう報道しているのか、本土と沖縄とではどう議論構造が異なるのか、またどうしてそのような違いがあるのかについて考えることであった。沖縄市民と政府とを繋ぎ、世論を作り上げるメディア。冬季沖縄研修では沖縄二大紙の一つ琉球新報への訪問ならびに辺野古の基地建設地を記者の方と共に訪問するプログラムを予定していたため（新型コロナウイルス感染拡大の影響により実施中止）、その活動への準備という意味合いも込められていた。

プログラム内容

- 20:00-20:05 イン트로ダクション
- 20:05-20:45 読売、朝日、琉球新報、沖縄タイムス
4社の「基地問題」に関する記事を読んで
ディスカッション①
- 20:45-21:00 ディスカッション内容共有
- 21:00-21:10 琉球新報に関するビデオ鑑賞
「なぜペンを取るのか～沖縄の新聞記者たち」
- 21:10-21:40 ディスカッション②
- 21:40-22:00 ディスカッション全体共有・締め

ディスカッショントピック

ディスカッション①

- ・各社の「基地問題」の取り上げ方に対するイメージ
- ・記事を読んでみて、最初のイメージと比べてどうだったか
- ・どうして各社の論調が違うのか、それぞれどういう意図があるのか
- ・自分の意見はどの新聞社のスタンスに近いか

ディスカッション②

- ・沖縄の新聞社の報道は偏向だといえるか

- ・日本政府、沖縄県政、沖縄県民、米国政府等それぞれ異なる意見を持つ様々なアクターが存在する。新聞社が各社論調を異にすることは、その分断に加担しているのであろうか、それとも情報提供・弱者の立場を守る等目的を果たし、基地問題議論を前に推し進める役割を果たしているのであろうか
- ・新聞を通じて、基地問題議論はどう作られていくべきか

参加者感想

第72回日米学生会議最後の自主勉強会は沖縄問題とメディアについてであった。

今回の勉強会では、辺野古への米軍基地移設について、4つの新聞社の社説を読み比べ、沖縄の米軍基地問題とメディアのあるべき姿について話し合った。議論はメディアの公平性という点から出発し、後半では情報の受け手に視点をおいたメディアリテラシーの話へと移っていった。議論の中では、二極化しているアメリカのメディアがとりあげられ、「なぜメディアは公平でなければならないのか。公平性は情報の受け手が判断することなのだから、メディアに公平性を求めすぎるべきではないのではないか。」という意見があった。私はこれを聞いてハッとした。現在は情報社会といわれるほど情報にあふれている。そのため、複数のメディアを比較することで公平性は担保されるのだ。だからこその一つのメディアの公平性に固執しすぎる必要もないし、「公平な情報」というパッケージのようなものをメディアに望むことは、もはや読者のエゴといえるかもしれない。もちろん発信者が公平な報道を心がけるに越したことはないと思うが、受け手が得られた情報から物事を多角的に捉える能力も重要であり、公平な情報とはその双方の努力によって成立するものなのだろうと感じた。

内林大志

北海道大学 環境科学院 生物圏科学専攻

実行委員総括

冬季沖縄研修の事前準備として設けていたこの勉強会は、無念にも自身が実行委員として手掛ける最後の行事となったが、無念さを払拭する素晴らしい会が開けたように感じている。会を締めた後、任意で開いたディスカッションセッションは日付を超えて深夜にまで及び、最後まで参加者に報道と沖縄を取り巻く事情の関係性、自身のメディアとの向き合い方について再考する機会を改めて提供できたと感じた。また、ファシリテーターではなく、一議論者としてJASCの議論の醍醐味を今一度味わうことができた喜びに浸ることができた。そもそも何のために筆者は中立な情報を求めようとしているのか、について話した際にはハッとさせられるものが有った。任期を終え、大学を卒業するとしばらくこのような議論環境からは離れることとなるが、何のために取り入れるのかを意識しながら情報と向き合い続けたいと感じる。

激動の一年半、最後まで意欲的に行事に参加してくれた参加者への感謝を込めて結びとしたい。

坂東 茉唯

早稲田大学 政治経済学部 政治学科



【ファイナルフォーラム】

2020年11月14日～2020年11月15日

参加者

日本側：35名（実行委員8名を含む）

米国側：24名（実行委員8名を含む）

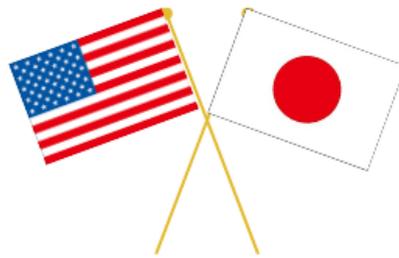
開催地及び

オンライン：Zoom

プログラム内容

1日目		2日目	
8:00-8:30	開会	8:00-8:05	開会
8:30-9:30	「文化とアイデンティティ」『特権の概念とその起源について』	8:05-9:05	「働き方と社会」 『コロナ後の働き方と社会』
9:30-9:40	休憩	9:05-9:15	休憩
9:40-10:40	「メディアと民主主義」 『選挙での一票の重さ ～メディア表象の影響力を検証する～』	9:15-10:15	「現代における健康のあり方」 『徹底討論！～コロナ対策に物申す！～』
10:40-10:50	休憩	10:15-10:30	休憩
10:50-11:50	「サイバー空間と脅威」 『サイバー領域の防衛は民間に頼るべきか』	10:30-11:30	「環境と経済発展」 『プラスチックワールド』
11:50-12:00	休憩	11:30-11:45	休憩
12:00-13:00	「ハードパワーと個人」 『国際政治における人権とは』	11:45-12:30	講演会
		12:30-13:00	閉会

各分科会発表における具体的な内容については第5章「分科会活動報告」中に記載するものとする。



JASC72

第5章

分科会活動報告



分科会活動とは

分科会活動では、日米各4名と実行委員2名が1チームとなり、それぞれの興味に基づくトピックについて議論を深めていく。これは日米学生会議が設立当時から大切にしてきた「本音の対話」を支える活動であり、昼夜を徹した議論が繰り広げられる。分科会の研究テーマにまつわる現場を体感するために、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO 及び研究所などへ訪問研修を実施する。本年は全てオンラインでの訪問となったものの、各参加者が積極的に勉強会やブリーフィングを企画する姿が印象的であった。

参加者の所属する分科会テーマは、開催年の情勢などを鑑みた上で決定される。今年度は以下の7つのテーマに基づき、活動を展開した。

【環境と経済発展】 ～資本主義社会における地球の未来とは～	Environment and Development
【現代における健康の在り方】 ～社会的・身体的豊かさのかたち～	Health and Society
【サイバー空間と脅威】 ～21世紀のテクノロジーとその代償～	Threat and Cyberspace
【働き方と社会】 ～ジェンダーの観点から考える社会～	Labor and Work Culture
【ハードパワーと個人】 ～外交における意思決定と国民～	Hard Power and Individuals
【文化とアイデンティティ】 ～多様化の時代における社会と個人のあり方～	Culture and Identity
【メディアと民主主義】 ～メディア・政治・個人の理想的な関係とは～	Media and Democracy

本章では、各分科会の参加者紹介と共に活動内容報告を行う。

分科会	氏名	大学	学部・専攻	学年
環境	中澤拓也	岡山大学	経済学部経済学科	3
	初雁 藍	トロント大学	建築学部建築学・経済学・統計学専攻	4
	内林 大志	北海道大学	環境科学院	院1
	矢野 隆	大阪大学	工学部環境・エネルギー工学科	2
健康	崎山 遼	大阪大学	経済学部 経済学科	3
	佐藤 顕子	学習院大学	国際社会科学部国際社会科学科	3
	松本 章寛	群馬大学	医学部医学科	4
	濱田 真利奈	慶應義塾大学	法学部政治学科	4
サイバー	伊藤 駿介	明治大学	政治経済学部 政治学科	3
	須藤 直太郎	東海大学	工学部 航空宇宙学科	2
	小菅優介	慶應義塾大学	法学部 政治学科	3
	木村理紗子	早稲田大学	国際教養学部	1
働き方	波田真友子	大阪医科大学	医学部医学科	2
	鈴木悠太	東京大学	教養学部文科一類	2
	西田優芽	福岡教育大学	教育学部 初等教育教員養成課程 英語教育専攻	4
	亀井 龍	明治大学	法学部 法律学科	3
ハードパワー	大井 雄磨	慶應義塾大学	法学部政治学科	2
	榎 唯衣	国際教養大学	国際教養学部国際教養学科	2
	太田 智寧	早稲田大学	政治経済学部 経済学科	2
	尾崎 純矢	九州大学	大学院工学府機械工学専攻	院1
文化	大東千潤	上智大学	国際教養学部国際教養学科	3
	生沼津嘉	防衛大学校	人文社会科学学部 公共政策学部	3
	関理々子	東京大学	前期教養学部	2
メディア	反後 元太	東京大学	教養学部教養学科国際関係論コース	3
	飛知和 志帆	早稲田大学	政治経済学部 政治学科	4
	松村 瑞希	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科 経営学専攻	4
	東 綺伽	東京外国語大学	国際社会科学部 東アジア学科中国語専攻	2

環境と経済発展 分科会

RT コーディネーター：野村紗里（九州大学共創学部）

【分科会概要】

環境と経済発展分科会としての夏本会議の目標は「自分たちの価値観に衝撃を与える」というものであった。これは、第72回日米学生会議のテーマにもある「己の価値観に挑む」ということを意識したものである。第一段階として、自分の「思考の癖」や、知らず知らずのうちに自分の「考えの軸となっている価値観」に気づくこと、第二段階として、議論中の衝突や発見から己の価値観を壊し、さらなる対話を通して最終的には新しい価値観を再構築するという目標である。夏の会議でこの目標を達成するべく、以下の点について各参加者の意見を募った。

- ①現状の議論に対する満足度
- ②議論において改善できること
- ③ディスカッションで期待すること

そして、その結果をもとに目標を達成するための具体的なアクションを考え、実行に移すことができていた。例えば、より深い議論に持ち込むために、相手の意見を掘り下げる質問を積極的にすることや、より個人の価値観に触れることができるように経験と紐付けて意見を言うことなどである。このように、本分科会の参加者がより有意義な議論を行うために、継続的に、向上心を持って分科会活動に臨む姿勢がとても印象的であった。



【参加者紹介】

	<p>名前 中澤 拓也</p> <p>所属 岡山大学経済学部経済学科夜間主コース 3年</p> <p>趣味 食べ歩き、料理、読書</p>
	<p>名前 初雁 藍</p> <p>所属 トロント大学建築学部建築学・経済学・統計学専攻 4年</p> <p>趣味 旅行・テニス・ボードゲーム</p>
	<p>名前 矢野 隆</p> <p>所属 大阪大学 工学部 2年</p> <p>趣味 サイクリングと旅行</p>
	<p>名前 内林 大志</p> <p>所属 北海道大学 環境科学院 1年</p> <p>趣味 剣道</p>

【夏会議前の議論テーマ】

環境（の矛盾）	栄養学と環境問題
電気自動車	宝石鑑定学と環境問題
ペットボトルのリサイクル	心理学と環境問題
紙の電子化	写真と環境問題
食品ロスと飢餓	言語学と環境問題
E-waste	ディスカッション ~環境と経済~
再生可能エネルギー	遺伝子組み換えについて
森林減少	大都市圏外の車の利用について
近代農業	黄色いベスト運動 ~先進国における環境
自由貿易	問題対策~
経済	経済と環境の間にバランスは必要なのか
経済格差	ディベート ~環境と経済~
タバコ産業と経済の矛盾	ドギーバッグの是非
人口問題	炭素税
アートと環境問題	環境を保全するべきか否か
宗教と環境問題	
地理学と環境問題	

【FT レポート】

多くの方々のご協力のおかげで、私たちは多くの社会人からお話を伺うことができた。NPO として活躍された方からは本当に必要な支援とは何か、環境省の方からは環境会議での外交、日本経済新聞社の方からは中東でのエネルギー事情、JICA の方からは教育が作り出す世界などのお話を伺うことができた。

その中で、NPO の方のお話が特に印象的であった。現地の人にまさに必要な支援とは、支援される人々によって変化してしまうことに気づく機会になったからだ。とりわけ私は発展途上国に対する支援とは、発展途上国の農村部に対する支援だと勝手に思い込んでいたが、インナーシティーやプライメイトシティなどの解決のためには、発展途上国の都市部に対する支援なども存在する。そのため、本当に発展途上国に必要な支援とは、支援される側の立場により大きく異なるため、一概に問題が1つとは限らず、先進国と発展途上国の二項対立だけの視点にならないように気をつける必要がある。

このように、社会人の方から直接お話を伺うことで自分たちの知見が広がるとともに議論を深める機会になったと思う。この場を借りて、このような機会を提供して下さった方々に感謝を申し上げたい。

【印象に残った議論】

初雁藍：最も印象に残った議論は、「環境を保全すべきか否か。保全すべきであるならば、そのボーダーラインはどこか。何を保全すべきなのか」であった。個人の価値観が強く反映されるこの議題で、同じ大学生で同じような環境の中で育った私たちの中でも、大きく差があることに気づかされた。「環境保全は人間が存続するためなのか」、や「どこから環境破壊なのか」などの本質的なトピックをとおして、環境問題にアプローチするにあたって再度目的/ゴール設定のすり合わせが必要なのではないかと感じた。

内林大志：環境と経済発展 RT で印象に残った議論は、持続可能な社会の議論の中で出てきた個人の幸福度に関する議論だった。持続可能な社会は、主に環境と経済と社会という三つの側面から考えられることが多いが、それらを満たしていても個人の幸せが満たされていないければ、持続可能な社会ではないし、実現も難しいということに気づかされた。

特に環境問題の解消は、環境保全に取り組むことが絶対的な正解として考えられがちだが、一人一人の合意を得られる解決策を考えられれば、たとえそれが環境保全ではなかったとしても、環境問題に対する1つの答えなのかもしれないと感じた。

中澤拓也：私にとって「環境と経済と人間生活の間での不均衡」についての議論が最も印象的であった。「そもそも不均衡は存在するのか」、「不均衡の原因となるものは何なのか」など、根本的な問いについて議論し、改めて考え直すことは、JASCに参加しなければ経験することが無かったかもしれない。この経験を通して、社会問題を解決する上では「人命を最優先とした上でリスクに重み付けをすること」と「限りなく多くのステークホルダーが利益を享受出来ること」に焦点をおくことの重要性を再認識した。

矢野隆：私にとって印象に残った議論は、ドギーバッグに関するものである。この議論が印象的だった理由として、食べ物が残る理由がわかったからである。もちろん、個人が食べきれずに残り物が生じてしまうこともあるが、多くの食べ残しは食べ残しに対するハードルが低いビュッフェや食べ放題などで生じていたのだ。また、ディベート形式でこの議論を行なったため、ドギーバッグ推進派、反対派に分かれ、ドギーバッグのメリット、デメリットを互いに徹底的に調べることができ、知見がより深まったことも印象に残った。

【JASC シンポジウム発表内容】

最終シンポジウムでは、夏会議のトピックであった「水問題」「環境と経済と人間生活の間での不均衡」「持続可能な社会の定義」の3つについて、どのような議論があったかをまとめ、紹介する形になった。

「水問題」の議論では、主に水質汚染に対象を絞り、原因はどこにあるのか、日米ではそれぞれどのような対策が取られているのかについて、話し合ったことを発表した。

「環境と経済と人間生活の間での不均衡」ではそもそも現在不均衡が生じているのかという議論から始まり、不均衡の原因を解決すべきなのかという問いについて議論した内容を発表した。

「持続可能な社会の定義」についての議論では、持続可能な社会が環境、経済、社会の三つの要因から構成されているということをもとに、まずそれぞれが思う持続可能な社会の定義を共有し、そこから各要因がどのようにあれば持続可能性が成立するのかを考察し、発表した。また個人の幸福度と持続可能な社会についての議論も発表した。

最終シンポジウムの発表は下記の URL から視聴できるので、気になった内容があれば視聴していただくと幸いです。(2:00~)

<https://www.youtube.com/watch?v=W-C3TdtQXX8&list=PL7AFFpygpoIYBV7s31tMvsbITmzYrFwFw&index=4&t=0s>

シンポジウムの発表に当たっては、「どの順番でトピックを話すか」「何を伝えるか」「誰がどのパートを担当するか」など、発表資料作成前から多くの議論が交わされた。また本会議中も環境と経済発展という大きなテーマの中で、全員が参加できるような議論に落とし込むのに苦労した。

発表資料作成においては、パート毎にこれまで積み重ねて来た議論をまとめることの難しさを実感し、四苦八苦しながらも、「これまでの議論を出来る限り余すことなく伝えたい」といった一心で分科会メンバー全体で力を合わせて完成させた。

発表は事前に収録したものを流す形式だったので失敗をすることはなかったが、質疑応答では想定していなかったような質問が投げかけられて惑うこともあり、質疑応答まで含めて準備をしておくべきだったと強く感じた。

上記の通り、苦戦したことや戸惑うことも多々あったが、分科会一丸となって取り組んだシンポジウムは今後の私たちにとって大きな糧となることだろう。

現代における健康のあり方 分科会

RT コーディネーター：小溝舞（慶應義塾大学法学部政治学科）

【分科会概要】

本分科会は現代における「健康」に定義を与えることを目的とするものである。今日一般的である健康概念は統計学と生物学の発展を土台としている。リスクファクターに基づいて健康を考える以前の時代では、人々は「健康」により無頓着であった。

また今日、「健康」自体に優れているものであるといった、価値判断の時点で「善い」とされるイメージも付随している。そのため私たちはしばしばアンチエイジングやジム通いによって自身の「健康」を保持し優越性を顕示する。現代「健康」は普遍的価値へと到達した。

このような時代において「健康」それ自体の定義、正当性について考えることは私たちの内面化された価値観へと挑戦することであり、第72回日米学生会議のテーマ「己の価値観に挑む」そのものである。

私達はまず各個人のもつ「健康」の定義を持ち寄り、戦わせた。それにより価値観の変化が多少発生したが、抜本的な変革はなされなかった。その後、具体的ないくつかのトピックについて話し合い、その度に自身の定義に発生した変化を報告しあった。最終シンポジウムでは各個人が初期の自身の定義とその変遷を報告した。

今回の活動において私達が共通の「健康」を持つことはついぞなかったが、各個人が独自の価値観を持つ以上当然のことであり、それこそが「善い」ことである。



【参加者紹介】

	名前
	崎山遼
	所属
	大阪大学 経済学部 2 学年
	名前
	佐藤颯子
	所属
	学習院大学国際社会学部国際社会科学科 3 年
	名前
	松本章寛
	所属
	群馬大学医学部医学科 4 年
	名前
	濱田真利奈
	所属
	慶應義塾大学法学部政治学科 4 年
	趣味
	写真・グラフィックデザイン・食・探検

【夏会議前の議論テーマ】

健康とはなにか？	組織における健康
健康の構成要素はなにか？	組織外行動
スピリチュアルヘルスとはなにか？	公平感と衡平感
スピリチュアルヘルス/メンタルヘルス	健康と労働
日本とアメリカの医療制度の違い	週休3日制の可否
国民皆保険制度	定年と健康寿命
オバマケア	安楽死
COVID-19と安全保障	死ぬ権利
病院・会社・自衛隊におけるコロナ対応	日本制度・メンタルセラピーのタイプ
感染症発生時の各セクターの役割	

【FT レポート】

防大生との徹底議論

我々の分科会は防大研修中だけでなく、研修以前から以後も「感染症と国家の安全保障各セクターの在り方」をキーワードに繰り返し議論した。防大生、経済学部生、医学生を中心に、自衛隊、民間、病院という3つの異なるセクターにおいての感染症対策、更には日本の安全保障においてそれぞれのセクターがどのように連携できるのかを学生目線から議論した。政府は目先の対策で手一杯になりがちであるが、学生だからこそ時間をかけて根本的に何が問題で何ができるかを議論することができたと思う。

アラムナイの方々とのオンライン FT

JASC のイベントで一緒にさせて頂いたアラムナイの方（金澤つき美様、クリストファー・クーンツ様、谷崎迅様）を通して、「オバマケア・メディケア」を中心にお話頂く FT を実現することが出来た。アメリカに居住していたからこそわかる保険の複雑さが印象的だった。同時にアメリカにおける医療は医者にとっても患者にとってもビジネス色が強いことに日本人参加者として衝撃を受けた。このビジネスライクな医療制度に基づく思わぬオバマケアの弊害や医療の平等性に対する考え方が興味深く、むしろ日本の一律な保険制度が非常にシンプルであり資本主義国家云々の話以前に特異であることを痛感する有意義な機会となった。

【印象に残った議論】

佐藤顕子：感染症発生時の自衛隊の果たす役割を防大生を交えて話した時、序盤では災害派遣の時のように自衛隊が積極的に市民感染を防ぐ手伝いをすべきという流れだったが、終盤では災害派遣時も民間エリアに立ち入れないだけでなく、本来自衛隊は日本の安全保障を通して国民を守るという存在意義を持つために、むしろ最も感染してはいけない＝守られるべき存在なのではないか？という視点に至った。そこから自衛隊のイメージを国民に内包していく為にも、民間が自衛隊に寄り添ったアクションをすべきなのではという意見が出て、とても刺激的だった。

崎山遼：組織における報酬の議論が印象深かった。人は自分の報酬が「公正」か否かを相対的、主観的に判断する。自分の労働投下量に対する報酬量が正当であったとしても、他の人が同等の報酬をそれ未満の労働投下量によって得ていると感じたとき、自身の報酬量を「公正」とは感じない。また報酬として何を重く見るかも個人により異なる。医療界では田舎で労働量が少ない病院ほど高給料であり、自身の医者としての成長をより感じる激務な大規模病院ほど薄給な傾向がある。そして後者はより志望者が多いとの事実がある。それならばモデル化された医者は金銭的報酬よりも自己成長要素などの効用係数が大きい。このような議論を経て、効用において金銭報酬量以外を捨象する従来のモデルに多くの改善点が存在することが再確認できた。

濱田真利奈：最も印象に残ったのは、健康が様々な要素が合わさって成り立つように、医師も様々な専門医がチームとなって患者にアプローチするということだ。考えてみれば当たり前のことだが、病気の患者を手術すればたちまち健康になると言えばそうではない。その後のケアやリハビリも含めて良好な健康状態を作っていく必要がある。確かに私が入院していた時にも、担当医だけでなく他の分野の医師も一丸となってサポートして下さった記憶がある。このように、私たちが自分自身の健康を改善していくときにも、原因を一つだと断定するのではなく、包括的に見つめることが重要なのではないか。

松本章寛：私が一番印象に残った議論は日米の健康保険制度についての議論である。私はこの分科会では保険制度は当然議論になるのだろうと思っていたし、実際トピックになった。私が驚いたのは議論が終わった後である。アメリカ側のメンバーが「際どい話をしてちょっとヒヤヒヤした。」と言ったのである。その人曰く、アメリカで健康保険の話をするということは、その人の生活レベル等をもろに反映するため「タブー」に近いのだそうだ。私は考えにも及ばなかったが、健康保険に関して議論できこと自体が「本音の対話」を目指す日米学生会議ならではだったと気づかされた。

【JASC シンポジウム発表内容】

自分たちの分科会は JASC シンポジウムにおいて、分科会の各メンバーがそれぞれ自らの「健康の定義」について持論を展開し、本会議の議論によってどのようにそれが変化したかを発表するスタイルをとった。以下ではシンポジウムで発表した各メンバーの健康の定義について記す。

松本はもともと「身体的、精神的、社会的、スピリチュアル」の要素が4本柱としてある家のようなもので健康は表されると考えていた。この喩えは1本でも崩れたならば家は倒壊しすべての柱が崩れてしまうように、すべての要素はそれぞれ依存しあっていること。またそれぞれに優劣は無いことを表している。本会議を通じて自分の健康の定義が大きく変わることはなかったが、スピリチュアルヘルスの内容は変化した。もともとは「人生の目的や生きる意味」であると考えていたが、宗教では「正しい行い」を規定しており正しい行いを守れることもスピリチュアルヘルスの1つであると考えが変わり上記に加えて「生きていても良いんだと思える許しの気持ち」も含まれるようになるようになった。

佐藤はこの分科会で自身が健康に対して独特な考え方をしていることに気が付けた。自我の芽生えによって social health に包含されていた spiritual health が、対峙しかねない factors となって、mental health を通して physical health に影響を及ぼすのではないかという考えが浮かび上がってきたのである。精神的健康下でやりがいを持って多少無理をしても身体的健康を害さないこと・給与の問題等(social health)から、「週休三日制導入」によって生産性が上昇する研究は出ているものの、必ずしも健康にはプラスに働くとは限らないのではという意見に至った。

崎山の初期の健康の定義は「信念の強度」のみを最重視しており、肉体的、精神的な健康にはほとんど注意を払わないものであった。議論のなかで「信念」が spiritual health に属するものであると気づき、また自身の定義があまりにも理想的であったと考えた。そこで自身の定義を修正した。最終シンポジウムにおいては、「信念の強度」である spiritual health に加え、身体的健康 physical health と精神的健康 mental health を導入し、後者二つを前者の下位存在としつつも相互影響を認め、後者が不安定になれば前者にも影響を及ぼす可能性があるとした。

濱田は、健康の4つの要素にはいくらかのヒエラルキーがあると考え、身体的健康が最も人間にとって重要であると考え。最低限の身体的健康を維持することは、社会的健康や精神的健康を良い状態に保つには不可欠であると思うからだ。一方で精神的健康は、人間の「幸福」に最も影響を及ぼす要因だと考える。第4の健康の要素と言われる”Spiritual Health”については、議論を得て新たな視点を得られた。Spiritual Healthは人生のコンパスのような物で、信念や信じる強さとも言えるだろう。当初、Spiritual Healthは万人に必要なだとは考えていなかったが、人生において選択肢を迫られた時にどの道を取るべきか示し、自信と豊かさを与えてくれる重要な健康の要素であると考えようになった。

サイバー空間と脅威 分科会

RT コーディネーター：深津佑野 (上智大学 法学部 国際関係法学科)

【分科会概要】

現代社会において、サイバーテクノロジーは私たちの生活を飛躍的に発展させてきた。コロナ禍の社会生活を通じてテクノロジーの利便性が再認識されているが、同時にリモートワークに伴うサイバー攻撃の増加や感染者の追跡問題など、新たな課題も生じている。

サイバー空間の重要性は、アメリカで「第5の戦場」と定義づけられていること、日本で重要課題の一つとしてサイバー防衛人材の育成、国際連携の強化、官民連携体制の構築等が推し進められていることから認識できる。

これまでサイバー空間について「安全保障」、「プライバシーと人権」の2つの側面に着目し議論を進めてきた。サイバーの安全保障の実情を掘り下げることに苦心しつつ、倫理・政策とのバランスを鑑みたサイバーテクノロジーの活用について意見交換をした。その中でテクノロジーに対し常に人間が目的を持ち、優位にいななければならないことを認識した。当分科会では今後も官・民・個人がそれぞれどのようにサイバーテクノロジーと向き合っていくべきか、そして様々な分野にサイバーテクノロジーをどのように活かしていくべきか、デジタル庁が生まれてまもない今、議論を進めていく。



【参加者紹介】

	<p>名前 伊藤駿介</p> <p>所属 明治大学 政治経済学部 3年</p> <p>趣味 模擬国連</p>
	<p>名前 須藤直太郎</p> <p>所属 東海大学 工学部航空宇宙学科 2年</p> <p>趣味 ピアノ、絵を描くこと、映画鑑賞、読書</p>
	<p>名前 小菅優介</p> <p>所属 慶應義塾大学法学部政治学科 3年</p> <p>趣味 動画編集・筋トレ・ラップ以外の音楽</p>
	<p>名前 木村理紗子</p> <p>所属 早稲田大学 国際教養学部 1年</p> <p>趣味 映画鑑賞、乗馬、料理</p>

【夏会議前の議論テーマ】

日米同盟のメリット
日米安保がなかった場合日本の安全保障は成立し得るのか
中国から見た日米同盟
日米のサイバー協力について
日本の安全保障環境について
SNS は人々を繋げるためのツールであるか？孤立化を招くのか？
ネット上での誹謗中傷
SNS と意見や価値観の形成について
これまで発生したサイバー攻撃について
Wannacry 事件
Facebook ユーザー個人情報漏洩事件
Equifax 情報漏洩事件
特定秘密保護法の是非
国民の知る権利と国家秘密
知る権利は民主主義の基本
日本弁護士連合会からみた特定機密保護法
プログラミング教育の義務化の是非
国家のセキュリティを守る人材の育成
プログラミング教育導入に伴い、学校は職業訓練の場となってしまう？
コロナ対策におけるプライバシーの権利
公共の福祉や公衆衛生の確保と個人のプライバシー

「自粛警察」の危険性
感染者情報 公開のメリット・デメリット
各国の新型コロナウイルス接触確認アプリのシステムの違いについて
AI の規制はすべきか
既存の規制について
AI は人間の職業を奪うのか
国ごとに異なる AI 開発の規制
日本のサイバーセキュリティのあるべき姿
サイバー空間におけるこれからの日米安保
サイバー戦における個人情報の利用
防衛大学校でのサイバーセキュリティ教育
タブレットとネット環境へのアクセスを国民全員にまたは学生限定で配布すべきか
オンライン授業の環境整備における日本と他国の比較
タブレットとネット環境へのアクセス付与は経済的な実現できるのか
青少年とサイバー空間
ネットいじめ
ゲーム依存症
課金ゲーム
家庭におけるネット上でのプライバシー
有害サイトから青少年を守るためには

【FT レポート】

国際大学グローバルコミュニケーションセンター客員研究員、政府最高情報責任者補佐官の楠正憲様をお招きして、日本のサイバーセキュリティの現状についてのお話を伺った。実際に日本企業へのサイバー攻撃の対応に当たられてきた方のお話であるだけに、参加者はサイバー攻撃の不気味さとそれに対する防御が極めて困難であることを改めて実感させられた。また、サイバーセキュリティは防御技術の整備・向上によってのみ達成されるものではなく、国民性や政治家の意識、人材教育など、様々な面を考慮に入れなければ達成されないというご指摘をいただいた。何とも途方もないスケールのお話であって、我々学生がこの問題を議論することの困難さを痛感したが、それでもサイバーセキュリティに関する知識・意識は向上させ続けなければならないだろう。

楠様のお話を経て、日米学生会議においても技術面にとどまらない包括的な議論を行うことを誓った所存である。

【印象に残った議論】

木村理紗子：最も印象的な議論はコロナの接触確認アプリとプライバシーについての議論だ。コロナ対策のために個人情報の活用をすべきか否かで分かれてディベートをした。中でも、公衆衛生や公共の福祉のために無条件で個人情報を提供すべきとする賛成派に対して、反対派が感染者を犯罪者扱いするかなのような情報提供はいかがなものか、と主張し、意見が衝突したことがとても印象的であった。一度ネット上に公開された情報は完全には消えない。感染対策を講じる上で、いかにして個々人の協力を仰ぎ、協力者に不利益が生じないようにするかが争点になった。

伊藤駿介：最も印象に残った議論はAIの開発を規制すべきか、というものだ。「AIは人間の仕事を奪う」や「シンギュラリティは近い」と言った一種センセーショナルな言説が世間で流布される中、日米学生会議でこの議論を行う意義は大きいと感じる。結局のところ、AIはどこまで行っても技術の1つでしかなく、原子力技術のように使用する人間の手によっていかなる結果も生み出しうる、というのが個人的な意見ではあるが、ともかく、国連における自立型致死兵器システムの規制を巡る議論などを参照して、有意義な議論が行われた。

小菅優介：最も印象に残った議論はプログラミング教育の義務化の是非である。日本は世界に比べてもセキュリティ人材が不足しており、サイバーの分野においては先進国の中でも大きく遅れをとっている。2020年から小学校でプログラミングが必修化されるが、これは実際にコーディングなどをさせるわけではない。そこで、実際にプログラミングをさせると仮定した議論をした。プログラミングを学ぶ前に国算理社などの一般教養を学ぶべきという意見に対し、それらを学ぶためにプログラミングの思考法が役立つなど、異なる様々な視点から議論ができた。

須藤直太郎：政府は国民全員のインターネットへのアクセスを保証すべきか、という日米合同で行った討論が印象的だった。教育、就労機会の確保、娯楽、政府から国民への発信や情報収集、そして自己表現の場としてインターネットはもはや生活インフラとして欠かせないものとなっている。しかし、高価で壊れやすく、日々刷新されるデバイスの配布コストは莫大だ。学術目的で生まれ、自由に発展してきたネットであるが、政府の介入を促進すべきか否か、日米の国民性や教育現場、地理的特性の違いなども鑑み、英語で激しい討論が繰り広げられた。

【JASC シンポジウム発表内容まとめ】

シンポジウムでは、各分科会と ICT との関わり、そしてそれぞれの課題をまとめた。

当初、私たちはサイバー空間における脅威とは企業や政府に対するサイバー攻撃や AI シンギュラリティなど、私たちの生活から距離のあるものと認識していた。しかし、コロナ禍に ICT の果たした役割やプライバシーの問題、リモートワークが普及し AI が台頭してくる中での次世代の教育や労働のあり方、SNS のようなサイバー空間を用いた新たな人間関係の形等、議論を進めていくうちにサイバー空間の利用とそこに潜む脅威は私たち自身がステークホルダーとなる身近な問題であると認識を改めさせられた。

特に今年においてはコロナ禍における大学教育や JASC の変化、そして BLM 運動の広がり等を通して、我々は情報通信技術のもつ力を肌で感じる機会が多々あった。第 72 回の分科会に選ばれた現代社会を代表する主要なトピック、それぞれに対して ICT の果たす役割は増しており、同時に様々な問題が顕在化してきている。そうした議論の成果を各分科会との共通項としてまとめ、発表した。質問受け付け用の QR コードを生成したり、人工音声による読み上げを取り入れたりとサイバー分科会ならではの創意工夫と遊び心も取り入れつつ、発表を作り上げた。

ICT の技術革新の速度は目覚ましく、いまや重要な社会インフラとして各分野に深く関わり、その発展に貢献している。一方で、これらの技術はこれだけ生活に身近な存在になりながら、その技術に倫理感や法整備が追いつかず、半ばブラックボックス化してしまっている現状もある。健康・医療、安全保障、環境問題、メディア、労働、そしてサイバー空間におけるアイデンティティ、と発表に含めたその全ての例をここで紹介することは出来ないが、各分野の議論を通して見えてきた共通項は、ICT はあくまでも道具であり、的確に使いこなすには実現したい目標を明確化する必要がある、ということだ。

ICT の発展により、良くも悪くも我々の生活様式や価値観はかつてない速度で大きく変化している。この技術は私たちの生活を豊かにする計り知れない力を秘めているが、技術が先走り、目的を見失うようなことがあってはならない。どれだけ進化しても、技術はやはり"道具"に過ぎないのであるから。技術の発展の先にどのような社会があるのか、そして、どのような社会を目指し技術を作っていくべきなのか。ICT が身近になった今、これは今や専門家だけでなく、人間のための社会、という原点に立ち返り市民一人一人が考えるべき問いなのではないだろうか。

働き方と社会 分科会

RT コーディネーター：武末 崇義 （東京外国語大学国際社会学部）

【分科会概要】

この分科会では、本会議前の事前活動や本会議での議論のなかで、ジェンダーという概念が現代社会の労働とその価値観の形成にどう影響を与えるかに焦点をあてて議論をした。ジェンダーという言葉を知ると活発な活動家のことが印象に残り、ジェンダーという概念そのものが見えてこないことがある。しかし、ジェンダーは現代でもあらゆる場面や状況で我々とかかわっており、社会的な文脈で発現したり、大衆文化と密接に結びついたりする。この分科会ではこうした、社会との関わり合いに特に目をむけて議論を行うことを目標としてきた。また日本における働き方の現状に焦点をあてた議論を行ったり、本会議でのアメリカ側参加者とのディスカッションを通して、日米両国でのジェンダーの概念に対する考え方の相違や、その文化的な背景について議論したりした。さらにジェンダーの概念を取り巻く社会状況や、従来の性別の枠組みにとらわれない人々の現状についても議論を行い、より本質的にジェンダーを捉えることを試みてきた。



【参加者紹介】

	名前
	波田真友子
	所属
	大阪医科大学医学部医学科 2 回生
	趣味
料理、カメラ、旅行、ラジオを聴くこと！	
	名前
	鈴木悠太
	所属
	東京大学教養学部文科一類 2 年
	趣味
水泳、カラオケ、海外ドラマ、読書	
	名前
	亀井龍
	所属
	明治大学法学部法律学科 3 年
	趣味
物語創作、日英関係研究、テニス	
	名前
	西田優芽
	所属
	福岡教育大学初等教育教員養成課程 4 年
	趣味
世界の絶景写真集や動画をみて、自分が行く想像をすること。	

【夏会議前の議論テーマ】

社会的な性別による働き方の違いと、その文化的背景	育児休暇制度とは
部活・書籍等から考える社会的性別の在り方	エンターテインメント界におけるジェンダー観
学生等の職業への志向から考える日本における労働への意識	メディアを通して伝わるジェンダー規範について
社会で働く意義とは	生物学的な「性別」と社会的な「性別」について
配偶者控除について	そもそも「性別」とはなんであるか
その社会的意義と日本社会における「家族」の在り方	男性学の観点から考える「男性差別」とは
コロナ禍における在宅勤務の争点	日本の働き方を再考する
家庭と労働の在り方とそこから見える「非正規雇用」の在り方について	他国との比較を通して

【印象に残った議論】

波田真友子：4月から始まって約5ヶ月の間に、私たちはジェンダーという視点を通して社会構造、働く制度について様々な議論をしてきたが、社会の情勢も相まってか、私はそれらどの議題を取っても、平等とは何なのか、差別と区別の違いとは何なのか、について毎回考えさせられた。この視点を持って毎日の日々を過ごしていると、社会がどう変わらなければいけないのか、ということが少しくリアになってきたような実感がある。これから冬会議までもこの視点を忘れず、また新たな視点も得られるように物事の本質を見つめていきたいと思う。

鈴木悠太：私は、育休取得制度を切り口とした議論がもっとも印象的だった。本会議前の議論では、北欧と日本とを比較すると、国家の歴史的な発展の仕方からして労働における男女平等が先天的に達成されていたかの影響が大きいこと、また医療現場など緊急性の高い職業については個別に考える必要があることを認識した。本会議中は、当事者の視点に立つと、日本人の私たちは企業側に制度の変革を求める傾向が強かったが、アメリカ側からは不満があるのならば転職すればよいのでは、という指摘をされた。小さいことかもしれないが、こうした選択肢が身近なものとして感じられるか否かも、両国の労働文化を色濃く反映しているかもしれないと感じさせられた瞬間であった。

亀井龍：印象に残った議論はいくつもあるが、一つ上げるならば、中高生における部活動の内容に対する印象のステレオタイプ化について検討した議論だ。加入時点で男女別の人数制限がなくとも、男子ばかり、もしくは女子ばかりの部活動が存在し、それが多くの学校で共通しているのではないか、意図せずとも「男子は／女子は、～な部活に入るべき」といった観念が社会に存在するのではないかという議論だ。私見では、その観念は確かに存在し、それは社会的な要因で後天的に形成されているに違いないと思う。一方で、十分な議論を尽くせていないが、その観念が存在することが「悪」か否か、また「悪」であるにしろそうでないにしろ、何故そう考えるのか、更にはどのように捉えるべきなのかについても検討を深め、日本人の社会を捉える方法に対する理解を深めたい。

西田優芽：夏会議での分科会活動では、コロナによる社会変化を起点に働き方についてジェンダー、人種といった観点から考えを深めた。全体での時間の中でも分科会に通ずるトピックが多々あり、思考の範囲がさらに広がっていく感覚を味わった。日米の違いや問題点がよりクローズアップされ、法制度の再考、保育所の増設、大衆の男女平等に対する考え方、ジェンダー・人種に関わらず平等な教育と雇用機会、新たな労働環境への順応など挙げていけばきりがないほど多くの事象に絡み合い、多面的・多角的な視点で考え、進めていくことが社会の変革には大切だと強く感じた。

【JASC シンポジウム発表内容まとめ】

シンポジウムでは各デリの興味分野に基づき、特にコロナのパンデミックに焦点をあてたプレゼンテーションを行った。以下、デリによる報告である。

波田真友子：私はパンデミックによってもたらされたメンタルヘルスの問題について、主に仕事という側面から考えた。社会が暗黙の内に放っておいた社会構造の歪みは今回のパンデミックで大きく露呈し、それらが女性に重くのしかかっているという現実のデータに私は目を覆いたくなくなった。まだまだパンデミックは続いている今、社会の何が根本的に障害となっているのか、また私たちが社会のために何が出来るのかについてじっくり考えていきたい。

西田優芽：私は、日米の育児休暇を担当した。日本は男女合わせて、最大1年2ヶ月もの期間、手当を受けることのできる制度が整っているが、男性の育児休暇の取得があまりにも少ない。また、一見女性の取得率も多く見えるが、非正規雇用であれば対象外になるケースも多く、実際は非正規・正規間で格差が大きい。一方アメリカは、国として保障する育児制度が存在せず、保障期間

や内容は会社に依存している。そのため、非正規やパート・アルバイトといった形態で働く人の中には、出産直後に生活するために働かざるをえない実態も多く存在するという。出産、育児は女性がするものではなく、男性はもちろん社会全体でサポートする仕組みを作ることは極めて大切だと実感した。

鈴木悠太：私は、シンポジウムの導入部に当たる、コロナ禍以前から存在する日米両国の労働文化の違いについて担当した。個人主義・集団主義、実力主義・年功序列、職住分離・職住近接など、想像がつく両国の違い以外で際立っていたのは、ここ数年世界的に普及が見られる「ギグ・ワーク」への寛容性の違いであった。「ギグ・ワーク」は労働者と受注者が組織を媒介せず、ネット上等で直接やり取りすることを通じて互いの需要を満たすシステムであるが、このシステムが日本に普及していない現状は、専門性が会得しにくい企業風土や、相対的に手厚い日本企業の厚生福祉などの背景を浮かび上がらせた。こうした新制度導入への対応の違いは両国の労働文化の違いを反映すると思うので、今後も注視したい。

亀井龍：新型コロナウイルス感染症の拡大によって所謂「リモート・ワーク」が日本でも大きく話題になった。私の担当したパートでは、「リモート・ワーク」の現状の検討の前提となる新型コロナウイルス感染症が拡大する以前の日本と米国の「リモート・ワーク」の普及状況や普及政策について紹介・分析・報告を行った。「リモート・ワーク」という取組みの導入の流れ自体は新型コロナウイルス感染症の拡大以前から日米に存在していたことや、米国では主にクリエイティブな発想の創出が求められるチーム制の部署を中心に「リモート・ワーク」が減少された事例もあったことを報告した。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大という「外的要素」によって改めて「リモート・ワーク」が注目された。今後、人々にどのような影響が表れるのか、またその結果としてどのような社会の性質が誕生するのか、もしくはこれまでと代わり映えのしない社会があることになるのかに注意を払いながら生活していきたい。

ハードパワーと個人 分科会

RT コーディネーター：野澤玲奈（早稲田大学 文化構想学部 国際日本文化論
プログラム）

【分科会概要】

歴史を鑑みるときに、ハードパワーと国家の発展は密接な関係にある。伝統的に各国は自国のハードパワーを駆使し、お互いの関係を築いてきた。グローバル化が進展し個人レベルでの国際交流も活発に行われている現代では、国家のハードパワーのあり方が問われている。そこで、本分科会では、国際社会において国家のハードパワーが果たす役割について考える一方で、私たち個人とハードパワーとの関係についても議論する。

議論をしていく上でハードパワーとは、安全保障や経済に関する国力と定義し、外交や国内の安全において欠かせないものであり、強制力を伴うものであると定義した。また、ハードパワーと個人の関係を考えるにあたって、その両者のみでは議論が収まらないことを痛感してきた。実際に各国はハードパワーのみならず、ソフトパワーやスマートパワー、サイバーセキュリティなど多面的に影響を及ぼし合っている。したがって、ハードパワーの枠にとらわれず、多くのテーマに関わっていることを十分に考慮した上で議論を行い、現代、そして未来におけるハードパワーと個人の関係性について理解することを目標とした。



【参加者紹介】

	名前
	尾崎純矢
	所属
	九州大学大学院工学府 機械工学専攻 修士課程1年
	趣味
旅行、映画鑑賞、読書	
	名前
	榎唯衣
	所属
	国際教養大学 国際教養学部2年
	趣味
観劇、ジョギング、料理、読書、映画鑑賞、旅行、土いじり、山菜採り	
	名前
	大井雄磨
	所属
	慶應義塾大学法学部政治学科2年
	趣味
旅行、スキー、映画、音楽鑑賞 (Rock, Pop, Electronic)、食べ歩き、写真	
	名前
	太田智寧
	所属
	早稲田大学 政治経済学部経済学科2年
	趣味
ピアノ、スポーツ観戦（特にプロ野球の福岡ソフトバンクホークス）	

【夏会議前の議論テーマ】

アメリカは世界警察としての役割を担い続けるべきか
様々な面から見た憲法9条（日米、官民、経済）
コロナ禍におけるハードパワー（民主主義&権威主義）
東アジアにおけるアメリカの政治的存在と役割
日本における Womenomics とその影響（男女格差、男女の役割など）
日米にとっての在日米軍基地と日米関係
BLM からみる構造的差別の現状と要因
人道的介入に軍事力は用いるべきなのか？それとも国際協調で対処すべきなのか？

【FT レポート】

<外務省 FT>

外務省で日米外交に直接携わられており、JASCのアラムナイでもある川口耕一朗様と、沖縄の米軍基地問題について議論する機会をいただいた。

私たちが学生ならではの視点でまとめた、この問題の解決に向けたビジョンを最初に提示したうえで、川口様とのディスカッションに移行した。その中の川口様のお話から、川口様が実務にあたって賛否双方の主張に耳を傾け、粘り強く考え抜く姿勢を大切にされていることが伺え、このような姿勢こそが、ハードパワーを操る人・組織・政府に最も求められるものだと感じた。さらに、私たちのような第三者がこのような社会問題について考える際にも、自らが考えついた解決策により負の影響を被る「個人」という視点を忘れずに意識する必要があると再認識した。

また、この問題に関する国民の不信感の原因は、メディアの米軍に関する報道内容の偏りや、政府が意思決定の過程を十分に伝えきれていない点にあるのではないかと感じた。より公平な報道、そして政府の真摯な説明姿勢が今後の課題なのだろうと思った。

本 FT は、米国や沖縄との交渉においてハードパワー行使の一翼を担われている方の考えをお聞きする貴重な経験となった。川口様、そして FT の運営に協力してくださった、外務省・JASC アラムナイの松村謙太郎様に心から感謝したい。

【印象に残った議論】

尾崎純矢：私はシンポジウム発表に向けて準備を進める段階での議論が印象に残っている。私たちは発表の中で米軍基地を取り扱ったが、日米が持つ認識の違いを実感した。私はアメリカ側もこのテーマに関して、当然関心があるだろうと思っていたが、実際は日本側ほどの関心は持っていないことが分かった。その違いを当初は理解できておらず、認識の差を生んでいた。このことから、自分が当然そうであると思い込むことが大きな誤解を招くことを痛感し、思っている以上に言葉にして伝えることが誤解のないコミュニケーションにおいて重要と実感した。

榎唯衣：印象に残ったのは、BLMについて話し合ったことである。最近のアメリカでの射殺事件で大きく話題が持ち上がり、アメリカ側と議論を重ねている上で避けては通れない話題ではあったが、一方でそれは今までタブー化されていた人種差別問題について真っ向から話し合う機会ともなった。BLMについて、まずは人種差別をなくす世の中にしていく必要があることを強く意識することができたと同時に、日本人の中にも無意識に起きている国内の人種差別を知りうる機会ともなった。またこの問題で世界を揺るがしたアメリカの存在感を再確認し、それに至った過去の歴史についても振り返ることができ、一つの話題や問題において深掘りして様々なテーマについて話し合う機会となった。

大井雄磨：印象深かった議論は多々あるが、特に外務省 FT でアラムナイお二方を交え沖縄基地問題を掲げた回を鮮明に思い出す。まず"沖縄は要衝ゆえ仕方ない、我慢して"との固定観念に陥ることは危険である。守るべきは 1.3 億日本国民全ての平穏な日々であり、安全保障問題の難しさは日頃その分野に興味なく考える機会もない人々に、いかに関心を持って貫うかに尽きるからだ。国内的には国家運営の仕組から社会情勢まで必要な説明を重ねてより深い理解を促しつつ、国際的には複雑なパワーバランス下で一翼の責任を果たすことが当然求められる。外交を学ぶ僕らは、拙くとも学び考え続け知見と交流を深めること。それが基本責任であり、遠い道程の第一歩と信じる。

太田智寧：一番印象に残っているのは、沖縄などの米軍基地問題についての議論である。ハードパワーを操作する人や組織は、自らにとって不都合な意見も丁寧に聞いたうえで、様々な人の立場で考える必要があるということ、日本側での議論や外務省 FT を通して強く実感させられた。一方、この議題について米国側と合同で話し合った際は、英語の参考資料の不足などの影響もあり、日米の間で関心度に差があった。さらに、私たちがこの差を認識するのが少し遅れたことでシンポジウムの準備が一時滞り、この議論では意思疎通の難しさも身にしみて感じた。

【シンポジウム発表内容理由】

ハードパワーと個人分科会のシンポジウム発表テーマとして、日本における米軍基地問題を選定した。さらに、この基地問題についてハードパワーを構成すると定義した、経済、政治、歴史、文化のそれぞれの観点からまとめ、日本における米軍基地問題がどのように世間で捉えられているのかを考えた。アメリカ側はそれについて深く考えてきたことがなかったという各メンバーの意見から、シンポジウム発表を機に日本に今ある基地問題を知ることから始め、それがどのような問題を抱えていて、どのようにアメリカ側から影響を与えているのか、さらには日本に限らないアジア圏の他の国にもある基地についてまとめた。このテーマを選定した理由として、私たちが外務省の方に講談をしていただいたこと、さらにはそれがアメリカと日本の両国において関係することであったため、シンポジウム発表を通して今までの議論を振り返る機会となったからである。

【JASC シンポジウム発表内容】



本パートでは、ハードパワーの政治的側面を中国の海洋進出を軸に日米安全保障の観点から分析した。日本を地政学的に見れば中国の海洋進出への対抗策と米国プレゼンスの重要性は一目瞭然だが、それを国民個々人の理解に繋げる難しさ有り。内外両方向に要努力だ。

Traditional Aspect

Impacts of Base Placement

- From Macro Perspective
 - Japan's economy has recovered.
 - Economic benefits of bases (Ex. Special procurement in the Korean War)
- From Micro Perspective
 - Individuals are at risk of base problems
 - Problems (noise, pollution, accidents, etc.)

Conclusion

- Economic benefits of the bases
- Individuals benefit, but they are also negatively affected

日本は在日米軍基地による特需により経済が大きく回復した。個人はその恩恵を享受した反面、基地周辺では騒音や汚染など、いわゆる基地公害により多くの方々が被害を受け、今もなお被害を受け続けている。



カネの力という、ハードパワーの経済的側面から米軍基地問題をみると、日本政府から沖縄県への財政移転が関連しているようだ。沖縄での基地反対運動が強まるにつれ、予算の用途における沖縄県の裁量が減っている。

文化的側面における米軍基地の影響はあまり考慮に入れることができない一方で、ここではあえてその側面に触れることで必ずしもネガティブに捉えがちな基地問題の肯定的影響力を知ることができ、その一つとしての地域間文化交流は、日本人とアメリカ人が国際交流を実現していることを象徴していた。

JASC Hard Power

* Required

Are you an Amedele or Japadele? *

American Delegate

Japanese Delegate

How much do you know about the controversy of American bases in Japan? *

1 2 3 4 5

Not at all Very much

Rank the top three countries that you believe are most influential in international relations: *

	United States	Saudia Arabia	China	Russia	Japan	South Korea
1	<input type="checkbox"/>					
2	<input type="checkbox"/>					
3	<input type="checkbox"/>					

How much do you know about US-China trade wars? *

1 2 3 4 5

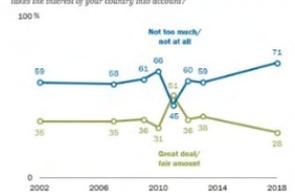
Not at all Very much

American Unilateralism

- US vs Japanese coverage of American bases in Japan
- Lack of American interest in international affairs
- International understanding of American unilateralism

Japanese not convinced U.S. considers their interests

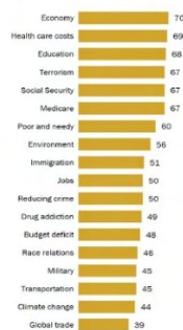
In making international policy decisions, to what extent do you think the U.S. takes the interest of your country into account?



Source: Spring 2018 Global Attitudes Survey Q39
PEW RESEARCH CENTER

Public's policy priorities for 2019

% who say ____ should be a top priority for Trump and Congress this year



Source: Survey of 11 U.S. adults conducted Jan. 9-14, 2019
PEW RESEARCH CENTER

当初は沖縄基地問題のプレゼン予定だったが、英語資料の圧倒的不足から困難とのアメデリ側指摘で軌道修正、日米其々の方向で進め結果をぶつけることとした。まず本会議中に全デリ対象、在日米軍基地や米中貿易戦争について知識チェックと国際社会に於る世界国力評価アンケートを行った。

結果アメデリ側は米中貿易摩擦へ関心が高く、国際社会に於る日本は米中露に比しかなり低評価と判明、日本側認識は米目線と違う希望的観測に近いと再確認された。そこから米国の Unilateralism(単独行動主義)の実情と'00年以降の大統領や政策に対する日本側の信用度・好感度の劇的な変遷を明快に分析解説した。

余談だが、足元の国家プレゼンスを上げないと基地や9条問題は国際的議論の俎上にも上がらない現実には自覚すべきだろう。

文化とアイデンティティ 分科会

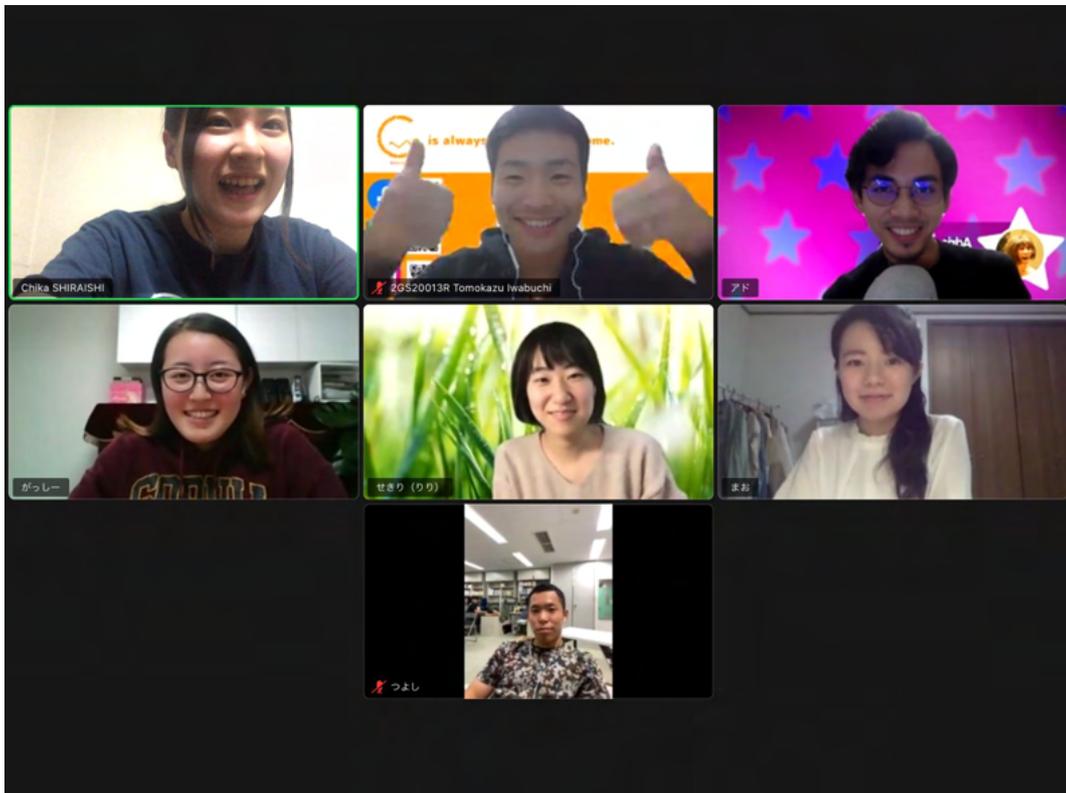
RT コーディネーター：白石智鏡

(立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部開発学専攻)

【分科会概要】

国際交流において意識せざるを得ないものの一つに、文化の違いがある。しかし、文化とは何か、文化とその文化圏に暮らしている私たちがどのように影響しあっているのかを説明するのは容易ではない。昨今の世界情勢で（少なくともこれまでは）主流となってきた「グローバルゼーション」という現象においても、国境を跨いだ人やものの交流が活発になることは自然な流れのものと考えられており、説明が難しい。

本分科会では、トピックを「アイデンティティ形成」に絞り、一般に文化の差といわれるものがどのような社会問題に影響を与えているかを議論・分析することにした。「文化とアイデンティティ」というテーマの性質上、同じトピックでも、各個人がこれまでの経験や環境によって解釈が大きく変わってくるため、参加メンバーによっては議論の結論が全く異なるであろう。今回のメンバーは米国側にも日本にルーツのある参加者が多く、日本、米国と分けて考えるのではなく、複合的な観点からテーマについて議論することができた。



【参加者紹介】

	名前
	生沼津嘉
	所属
	防衛大学校 公共政策学科 3 学年
	名前
	大東千潤
	所属
	上智大学国際教養学部国際教養学科 3 年
	名前
	関理々子
	所属
	東京大学教養学部文科三類 2 年
	趣味
	読書、ダンス、映画鑑賞、睡眠、料理

【夏会議前の議論テーマ】

女性と軍隊

言語はどのようにアイデンティティを形成するか

アメリカ人/日本人とは何を意味するか

アイデンティティと特権

アイデンティティ政治

太平洋戦争前後の日本人アイデンティティの変化

言語がアイデンティティに与える影響について

特権ってどういう概念？

【FT レポート】

私たちの分科会が扱うトピックは非常に抽象的でありながら、個々人に自身の経験やそこから形成された価値観の共有を要する。他の分科会と比較すると、議論は非常に慎重を期すものであった。今でこそ住んでいる国や地域で文化の相違があるという認識はある種当たり前とされているが、文化の違いやアイデンティティの喪失によって数多くの争いや差別が生まれてきたことは事実である。それらについて FT 等を通して自ら知識をつけ、考えを共有し合うことこそ、文化とアイデンティティ分科会の醍醐味であったと考える。

FT では、アイデンティティ形成の権威である上智大学の出口教授に、「特権」についてお話を伺った。その後参加者のお母様からご経験に基づいた文化の違い、特権についてのお話を聞くこともできた。

【印象に残った議論】

関理々子：これからの日米関係を考えるにあたり、これまでの両国の関わりの歴史を振り返ってどのような事実を重視するかにおいて、教育というものの果たす役割の大きさを知った瞬間がある。たとえば、GHQ（連合軍総司令部）については、日本で教育を受けていれば原爆投下からの敗戦という流れで必ず教科書に載っているといても良いほどだが、なんとアメリカでは、日本について原爆以上の特筆すべき歴史的記述はないらしい。戦後日本に対するアメリカの影響についての根本的認識の違いは、これからも埋められるよう努力していかなければならないと感じた。

大東千潤：初めてのパネルディスカッションでBLM運動などについて全参加者の前で議論することができた。その時に日本の中での人種差別について議論する機会があった。海外では人種に関しての議論やデモは多いが、日本の中ではあまりふれられない内容についてアメリカ側の参加者と話すのは新鮮だった。アメリカ側の意見の中に、日本人は外国の方を肌の色によって差別するのではなく、「外国の方」と一括りにしているとあった。日本国内でもグローバル化が進んでいる現代では「一括り」にしてしまう考え方を変えていかなければならないと感じた。

生沼津嘉：日米関係の根幹をなす安全保障分野における議題において、私には防衛省・自衛隊としての施策や方針を防大生という立場から求められることが多かった。その際、私のような1人の学生が、たいそうなことを述べてよいものだろうかという不安を周囲の者にこぼしたことがある。するとある者がこう言った。「ある程度の概要は調べれば分かるし、専門的な知識は有識者から得られる。だから形式張ったものでなくあなた個人の見解がききたい」と。私はその時ふと我にかえった。私は私なのだ。国という大きな重荷を背負わなくていい。息を抜いて解放されるべきなのだ。それを機に私の取り組み様には変化が見られたと思う。その背中には暗くて憂鬱な重責はなく、胸には誇りと確かなプライドが掲げられた。

【JASC シンポジウム発表内容まとめ】

文化とアイデンティティ分科会では、日米の生活における社会的特権と自衛隊・軍隊での社会的特権のあり方について発表した。

まず、特権とは1.全員にあるわけではない特殊な権利 2.個人が生まれつきもっているもので努力によって得られるものではない 3. その権利に値する人とそれ以外の人に分けられる 4. 特権を持っている人はその事実気づいていない、の4要素で構成されていると考察した。この特権による差をなくすためには、個人が自分の”与えられた”特権を意識すること、特権を持っていない人が存在することを知ること、他人の文化的な背景を理解することが重要である。しかし、特権とは他人と自分を比べた時に初めて意識するものであり、個々人が認識している状態を作り上げることは容易ではない。

「日本の中の特権」に着目すると、言語がもっとも顕著である。日本語を母国語とする人は日本語以外の外国語を話すことができることが特権である。しかし、日本語が母国語ではない人々にとっては、日本語を話すことができることが最大の特権となる。このように、状況によって特権と認識されるものが変わるため、何が特権であるのか特定するのは難しい。

「米国の中の特権」に着目すると、人種がもっとも顕著である。白人と黒人とでは、肌の色の違いによって教育、仕事、収入、医療制度など様々なところで不平等が生じている。ただ、人種によって差別化された法令は近年少なくなってきた。

「日本の自衛隊と米国の軍の中での社会的特権」にも着目した。

日本の自衛隊の中では女性が社会的特権を持っていないことが多い。具体的には、女性自衛官の昇進への障壁、職種の制限、偏見等に言及があった。米国の軍内でも女性へのセクハラ問題、女性の意思の不在、女性差別などの問題が挙げられた。

また第72回日米学生会議の参加者にアンケートをとったところ、全員が「一番特権であると感じているのは裕福さと教育レベルである」という結果が出た。日本側・アメリカ側で比べると、日本側では教育レベル、その国の母国語を話すこと、裕福さが挙げられたのに対し、米国側では裕福さ、人種、教育レベルが挙げられた。

アンケートやFTを通して、特権の考え方は環境に大いに左右されるものであり、一概に定義することは難しいことを認識した。

メディアと民主主義 分科会

RT コーディネーター：坂東 茉唯（早稲田大学政治経済学部政治学科）

【分科会概要】

本分科会は、メディアと個人との相互作用の関係に着目し作られた分科会である。個人はメディアによる情報提供を意思決定の材料にすると同時に、メディアの発信情報・報道姿勢を傾向づけてきた。近年、媒体の多様化・ビッグデータの登場により、その関係性は多角化している。メディアは特定の個人に向けた情報発信という手立てを、個人は主体的に情報発信し、時には社会運動を巻き起こすほどの強い影響力を手に入れた。主観的な解釈の介在した玉石混濁の情報がメディア空間において氾濫する中、個人は情報にどう向き合い、吟味し、自分を正しい判断に導くか。ニューメディアに対して個人ができることはあるのか。組織的なルール作りが必要なのか。メディアはどのように伝える事実を選定すべきか。夏会議ではこれらを考慮に入れつつ、6人それぞれが興味のあるトピックを持ち寄り、議論した。オンラインで時差等の制約がある中、特に議論のフェーズを意識して進めることに注力した。本会議では互いの意見を尊重しながらも、「規範的に考えてみよう」、「どのような結論に落とし込めるか考えよう」という声かけが見られ、議論の質も意識しながら切磋琢磨する姿が印象的であった。シンポジウムでは個人のメディアとの向き合い方について提言を試みた。詳しくは下記の詳細を参考にされたい。



【参加者紹介】

	<p>名前 松村瑞希</p> <p>所属 国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 4年</p> <p>趣味 旅行、ゴルフ、山登り、洋裁、編み物、刺繍</p>
	<p>名前 反後元太</p> <p>所属 東京大学 教養学部 3年</p> <p>趣味 音楽鑑賞、映画鑑賞、ピアノ、漫才、コントを観ること、</p>
	<p>名前 東綺伽</p> <p>所属 東京外国語大学国際社会学部中国語専攻 2年</p> <p>趣味 音楽を聴く、海外旅行</p>
	<p>名前 飛知和志帆</p> <p>所属 早稲田大学政治経済学部 4年</p> <p>趣味 クラシックバレエ、書道、エクササイズ、長風呂</p>

【夏会議前の議論テーマ】

コロナ禍でのメディア報道	トランプ政権下でのアメリカメディア
危機状況下でのメディアによるコミュニケーション	日本の立法・行政・司法・選挙における問題点
コロナ禍でのブルーインパルス飛行の是非	各国のメディアを比較
報道が戦争遂行に与える影響	日米でのメディアの役割を比較
実名報道と匿名報道	各国の戦争報道比較
国家権力とメディア	建国・独立記念日の報道の仕方を比較 (中国、韓国、北朝鮮、米国、日本)
権力監視におけるメディアの役割	他分科会との合同ミーティング
日本のメディア規制について	メディアによる環境問題の取り上げ方
メディアを使ったプロパガンダ	権威主義と民主主義
政治・メディア・市民の適切な関係	サイバー攻撃について
アメリカ大統領選挙	日本人のアイデンティティクライシスとメディア
2020年アメリカ大統領選挙の結果予想	
2016年アメリカ大統領選挙におけるロシアの影響	

【FT レポート】

本分科会が主催した勉強会では、第17回日米学生会議参加者で元NHK副会長の今井義典様をお迎えし、現代社会におけるメディアの役割とその歴史的変化について議論を行った。今井様からは「権力とメディア」「公平原則」をキーワードにご講演頂き、公共放送のみならず日本のメディア、ジャーナリズム全般について歴史的背景から丁寧にご教授いただいた。質疑応答の際には日本における政治構造とメディアの相互影響、ジャーナリストの中立性と公平性はどのような意味を持つのか、等の質問があり、講義での学びをさらに深めることができた。戦後GHQの占領下で公共放送に関するシステムが構築されたという、日本の持つ特殊な歴史的背景を理解して初めて、現代の日本社会が抱える政府とメディアの関係、報道の公平性の担保における障害を理解できる。国境なき記者団によるレポートで提示された日本の放送自由度ランキング62位という数字を日本人としていかに見るか。このようなマクロな問いに対しても、本勉強会は日本のマスメディアという切り口から日本社会を具に紐解き、その文脈を理解する方向から答えに近づくという思考に触れる機会を学生に与えてくれた。

【印象に残った議論】

松村瑞希：メディアを広義に捉えて各国の教科書を比較した議論が印象に残っている。アメリカと日本の歴史教育では第2次世界大戦や原爆投下がどのように教えられているか比較をした。また議論の中では日中韓を中心とするアジアでの歴史教育の違いや、国の垣根を超えた合同編集の教科書についても触れた。各国で重要視される出来事や解釈が異なるため、中立な視点からの歴史教育とは何かを考えさせられた。現在はメディアの発達により、インターネット等を通して他国の歴史教育を容易に調べることができる。多様な視点から歴史を学ぶ重要性を改めて感じた。

反後元太：2020年が終戦75周年という節目の年であるということに鑑みて行った、第二次世界大戦での敗戦を含む日本人のアイデンティティークライシスの歴史的過程とメディアの関係についての議論が最も印象に残っている。19世紀から20世紀にかけての明治維新から対外進出の過程の影響や、台湾人、中国人、沖縄人等のいわゆる「周辺部」の人々の自己認識など多岐にわたって議論を展開した。他の例との比較検討を通して「日本人」概念の形成過程を追体験すると共に、改めて分野・時代横断的な学際的視点の重要性を再認識するに至った。

東綺加：防衛大学校生と交わしたシビリアンコントロールについての議論が印象に残っている。日本では、第二次世界大戦時の軍部の印象が強く残っているため、私はこれまで、政府やメディアがシビリアンコントロールの役割を担うことが重要だと考えていた。しかし議論で取り扱った本「シビリアンの戦争」では、イラク戦争開始の背景に政府やメディアの過剰な介入や扇動があったことが述べられていた。これについて議論を重ねるうちに、シビリアンコントロールが本当に正しいのか再考する必要があると感じた。また私達自身も、今後戦争や紛争について考える際、戦争を扇動しているアクターを決めつけるのではなく、立場の異なる様々なアクターが関わり意思決定がされていることを心に留め、理解に努める必要があると感じた。

飛知和志帆：各国の建国記念日当日に発行された新聞記事の比較が印象的であった。メディアRTメンバーがそれぞれ米国、韓国、北朝鮮、中華人民共和国の新聞記事を購読・発表した上で、比較を行った。まず特筆すべきは言論の自由の有無による報じられ方の違いである。米・韓の場合、「節目の日に、現在の政治及び政策を再検討し、必要とあらば適切に批判する」というスタンスをとっていた。それに対して北・中の誌面は、国の政治、歴史、文化を祝福・称賛する言葉で飾られた。また、これは私自身の仮説に過ぎないが、建国記念日そのものの意味合いが国の歴史によりかなり異なるのではないだろうか。韓

国にとっての独立記念日は植民地支配からの開放、中国の場合は敵対勢力の駆逐とイデオロギーの統一、北朝鮮は元政治体制の確立、米国は韓国と同じく植民地支配からの脱却を意味するが、当時の米国の領土は東海岸の一部の州に限られるため、国をあげての祝福といった祭事的な意味合いが強いと感じる。

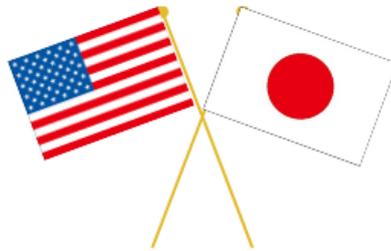
【JASC シンポジウム発表内容】

シンポジウムではメディアが個人に与える影響について発表をした。現在ソーシャルメディアが情報インフラの1つとなっており、生活に不可欠な存在になっている。また情報を瞬時に世界中に広め、アラブの春やBLM運動でも大きな役目を果たした。しかしソーシャルメディアの法規制は十分とは言えず、言論の自由やフェイクニュースなどの問題を解決できていない。また利用者のメディアリテラシー教育も十分ではない。

私たちは初めにメディアは潜在的な社会の分裂を促進しているかもしれないと考えた。今年は大統領選挙もあることから、政治的関心が高くソーシャルメディア上には様々な書き込みが見られる。数十年前までは一般人が大衆に向けて発言する機会はほとんどなかったが、現在は手元のスマートフォンを使えば誰でも簡単に意見を発信できる。そのような状況下で、今年起きたBLM運動を例に、私たちが行うべき対策を考えた。1つ目はハッシュタグに説明を付け加えることだ。BLM運動では#BlackLivesMatterというハッシュタグが利用されていた。しかしハッシュタグのみが広まり、問題の重要性が浸透しなければ意味がない。2つ目にソーシャルメディアを通して物理的なサポート体制を整えることだ。ソーシャルメディア上でのみ共感を示すのではなく募金や請願書など実際の行動に結びつけることが必要だ。

このような変化をもたらすことで、今後ソーシャルメディアの手軽さを活かして社会問題に関心を持つ人をより増やすことができるだろう。

情報社会と呼ばれる現代、ソーシャルメディアの利用者である私たちにとって、意識的に複数のメディアから情報収集することは極めて重要である。私たちは気づかぬうちに自身の志向性に沿った情報を選択する傾向がある。マスメディア、ソーシャルメディアにはそれぞれの長所・短所がある。インターネットやテレビ、新聞等、複数の媒体から包括的に情報を得ることはメディアと健全な関係を築くための第一歩になるであろう。



JASC72

第6章

岐阜応援プロジェクト



第 71 回日米学生会議 岐阜応援プロジェクト ～令和 2 年 7 月豪雨災害の被災者支援～

【概要】

令和 2 年 6 月末～7 月中旬にかけて、西日本は集中豪雨の被害を受け、第 71 回会議開催地の 1 つである岐阜県でも土砂災害や浸水など、甚大な被害が出ました。

第 71 回会議では、会議参加者 65 名が令和 1 年 8 月 13 日～8 月 17 日に岐阜県に滞在し、岐阜の伝統文化や観光について学びを深めるなど、岐阜県の皆様には多大なるご支援とご協力を賜りました。

その御恩に少しでも報いるため、第 71 回日米学生会議実行委員会は豪雨災害により被害を受けた被災地を支援する「岐阜応援プロジェクト」を立ち上げました。そして、義援金を会議関係者有志で募りました。

日米学生会議は、日本とアメリカの各地で多くの方々に支えて頂きながら存続しています。今後の団体の発展のためにも、各地域との協力・連携は欠かせません。ご縁の一つひとつに心から感謝するとともに、より強い繋がりを築いていけるよう、活動して参ります。

最後に、この度の豪雨災害で被災された方々の 1 日も早い生活再建を心よりお祈り申し上げます。

(第 71 回日米学生会議実行委員会 岐阜サイト担当 村上真優)

詳細

- 募金期間：令和 2 年 8 月 17 日～9 月 4 日
- 支援者数：24 人
- 寄付金額：142,660 円
- 寄付先：令和 2 年 7 月岐阜県豪雨災害に係る義援金
- 贈呈式日程：令和 2 年 10 月 6 日

支援者名簿

第 71 回日米学生会議 有志			
第 71 回会議 実行委員長	タクール小迫 亜満	参加者 (第 72 回会議 実行委員)	白石 智鏡
第 71 回会議 副実行委員長	南 秀弥	参加者 (第 72 回会議 実行委員)	武末 崇義
第 71 回会議 実行委員	アドリアン ウィルダンディヤワン	参加者 (第 72 回会議 実行委員)	深津 佑野
第 71 回会議 実行委員	村上 真優	参加者	若井 香穂
参加者 (第 72 回会議 実行委員長)	木村 勇人	参加者	岩田 純奈
参加者 (第 72 回会議 副実行委員長)	小溝 舞	参加者	大澤 麻凜
参加者 (第 72 回会議 実行委員)	坂東 菜唯	参加者	本田 智巳
参加者 (第 72 回会議 実行委員)	野澤 玲奈	参加者	植村 凧沙
参加者 (第 72 回会議 実行委員)	野村 紗里	参加者	井上 大誠
日米学生会議 関係者			
日米学生会議同窓会 顧問	山田 勝	一般財団法人国際教育振興会 代表理事	金野 洋
日米学生会議同窓会 幹事長	富川 秀二	一般財団法人国際教育振興会 前代表理事・理事	伊部 正信
日米学生会議同窓会 常任幹事	細野 恭平	一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議 事務局	伊部 亜理子

県に7月豪雨 義援金14万円

日米学生会議有志

7月豪雨災害の被災地を支援しようと、昨年8月に県内で開かれた第71回日米学生会議の関係者有志が、義援金14万2660円を県に寄せた。代表の村上真優さん(21)＝国際基督教大4年＝と木村勇人さん(21)＝慶応大3年＝が6日、東京都千代田区の県東京事務所へ届けた。

第71回会議（国際教育振興会主催）には日米の大学生65人が参加し、白川郷合掌造り集落や長良川鵜飼を

見学したほか、岐阜大や岐阜高校の若者たちと交流した。実行委員を務めた村上さんは、ニュースで岐阜県



野原茂基所長(左)に目録を手渡した代表の村上真優さん(中央)ら＝東京都千代田区、県東京事務所

の被災を知り「お世話になった思い出の地域。どうかして力になりたい」と義援金を贈ることを決意。8、9月に第71回会議の日本側の参加者や関係者に寄付を呼び掛けた。

県東京事務所で行われた贈呈式で、村上さんは「被災者の一日も早い生活再建を心から祈っている」と述べ、野原茂基所長に目録を手渡した。野原所長は「被災した市町村を通じて被災者に届けたい」と応じ、感謝状を贈った。

(井上吉博)

第二の故郷 岐阜に恩返し 日米学生会議参加者、県に豪雨義援金



岐阜市などで昨年開催された日米学生会議の参加者が六日、七月の豪雨被害に対する義援金十四万二千六百六十円を県に贈った。東京都千代田区の県東京事務所を訪れた大学四年生の村上真由さん（二〇）さいたま市は「岐阜県は思い出

の詰まっている第二の故郷。お世話になった恩返しをしたい」と話した。同会議は、両国の大学生が社会問題を議論し、相互理解を深める催し。昨年は県内や東京などで開催された。県内では六十五人が八月十三―十七日に岐阜市と

白川村を訪問し、岐阜大や岐阜高校など地元の学生らと交流した。会議の実行委員を務めた村上さんが、参加者にメールなどで呼び掛けたところ、約二十人から義援金が寄せられた。

村上さんと、今年の実行委員長を務める大学三年生の木村勇人さん（二〇）横浜市から記録を受け取った野原茂基所長は「被災市町村を通じて生活再建に役立たい」と伝え、感謝状を贈った。（長竹祐子）

野原所長から義援金の感謝状を受け取った村上さん（中）と木村さん（右）＝東京都千代田区の県東京事務所

【感謝状】





第7章

実行委員あとながき



「日米学生会議とは、結局何なのか。」

86年もの間、様々な参加者や実行委員、また多くの支援者をはじめとする、この学生会議に関わってきた全ての人が考えた問いだ。

2020年8月23日、第71回日米学生会議の終了とともに第72回日米学生会議実行委員会が発足した。参加者として半年間関わり、その後実行委員長として会議に関わった。

問いへの答えはまだ出ていない。

日米学生会議は私にとって、高校生から憧れていた議論の場であった。選考を通り、日米両国72名の仲間と国境や違いを越えて対話し、生涯の関係性を構築できる夢のような空間だと認識していた。私の認識は半分正しく、半分間違っていた。

第一に、日米学生会議は夢のような空間では毛頭ない。

また、憧れの対象であった際にその憧れに値する会議である保証はない。

日米両国の学生と議論をする中で、自分自身の弱さに向き合い、見えていないことに気づく空間である。議論をする中で見えてくるそうした自身の姿は決して心地よいものばかりではない。その弱みと対峙して、どう乗り越えるかを考えることが求められる。

学生会議の一員としてはもちろんのことだが、この点は実行委員をやることで、実行委員長をやることでなおのこと感じたものであった。

実行委員長として私はとてもではないが「良いリーダー」には成り得なかった。

他の実行委員に迷惑をかけ、自身の未熟さから様々なトラブルも起こした。

自分自身のこうした未熟さに気づき、進化できたという面では、私にとってこれらの失敗は大いにプラスになった1年間であった。しかしながら、そんなことは他のメンバーからしてみれば知ったことではない。コロナ禍にて会議の要項を変更することになり、焦りのあまり物事の決定を急ぎ、判断ミスをし、計画性のない準備をし、と16ヶ月間における失敗の数は上げると枚挙に遑がない。こうした面に向き合わなければならない会議であった。

しかしながら、こうして自分と向き合う中でも、一生涯の仲間と違いを超えて対話のできた空間であることは事実だ。

自身の不甲斐なさが露呈した瞬間瞬間を「自身の成長機会になった」という言葉に甘えて正当化するようでは世も末だ。しかしながらこうした自分の一面も受け入れ、会議を作ることができたのも、日米学生会議を支えてくださっている方々、アラムナイの皆さま、日米両国の参加者、そして共に企画した仲間の助けがあったからである。この場を借りて深く御礼を申し上げさせていただきます。誠にありがとうございました。

これからは1アラムナイとして、皆々様とともに今後の会議の発展に寄与する一人として、共にこの学生会議から生まれる日米両国、ひいては世界の未来を共に考えていきたい。

慶應義塾大学 法学部政治学科3年
木村勇人

第71回会議の終盤、私が実行委員に立候補することを決意したのは、東京で開催されたファイナルフォーラムがきっかけであった。それまでは、実行委員は楽しそうではあるものの、業務も膨大で自分にできるか自信もなく、また、貴重な大学生の1年を費やすべきか迷っていた。しかし、ファイナルフォーラムで自分の分科会の発表が終わった時、初めて会議が終わる実感が強く自分の中に湧きあがり、もう少し日米学生会議に関わりたいと思うようになった。

第72回の実行委員は皆熱い想いを抱え、本会議に向け準備を始めたが、その後1年以上に亘る実行委員生活は一筋縄ではいかなかった。2020年2月までは、前年の例を参考に、必要な準備を72回流に変更し、準備を進めていた。しかし、ちょうど一次試験の合格者を決める段階で、新型コロナウイルスの存在がニュースで報道されるようになった。この当時、実行委員も事態がすぐに収束する派と長引く派とに二分されていたが、ひとまず安全策を取り、オンラインでの選考を実施した。

その後も、先の読めない状況が続き、プログラムはオフライン・オンラインの両方を用意することを続けていた。結局プログラムは全面的にオンラインでの開催という結果にはなったが、このような未曾有の事態を実行委員としての視点を持ちながら過ごしたことは多くの学びを私にもたらした。

そのうちの1つが柔軟性の重要さである。日米あわせて16名もの実行委員がいる大所帯では、そもそも意思を全会一致で決めることは難しい。それだけでなく、コロナ禍においては、状況が二転三転し、一度作り上げたプログラムが根本から変更を迫られることも度々起こった。他の実行委員の意見を深く理解し、自分の意見に固執するのではなく、客観的に会議全体の益となるような決断を下すことは、非常に重要であると理解しつつも、実行するのは非常に難しかった。まだまだ、修行中の身ではあるが、かつてない逆境を実行委員が1人も欠けることなく乗り切った経験は、今後の私の大きな糧となることを確信している。

また、もう一つ、実行委員として会議に携わる中で多く触れることになったのが、人の優しさであった。日々刻々と状況が変化し、対面で会うことのできないストレスフルな状況の中で、相手を思いやる気持ちは、何よりも重要である。特に、オンラインでの活動が増えれば増えるほどお互いの仕事や想いは見えづらくなり、そのことに気が付いた実行委員は途中から以前にもましてお互いを気遣う言葉を掛け合うようになった。人の優しさを感じたのは実行委員間だけではない。日米学生会議の実施において、アラムナイや外部の方々から大きな支援をいただくことは、毎度のことではあるが、何より状況が不安定であった今回に関しては、実行委員も手探りの状態の中で、絶大な支援をいただいた。実行委員が不慣れで不便をおかけしているにもかかわらず笑顔で優しく見守ってくださり、多くの方が沢山のアドバイスを下さった。他にも、不安定な状況ながら、参加者の学生は文句ひとつ言わず、会議を全力で楽しもうと創意工夫を自発的に行ってくれるなど、会議の成功は数えきれない人々の優しさの下に成立したのだと思う。

最後に、「人の縁」について記したい。私が日米学生会議の実行委員を担当し、最も大きな影響を受けたことは、間違いなく様々な方々のご縁だと思う。実行委員は言わずもがな、アラムナイの方々、参加者の学生、外部の方々、過去1年で自分でも信じられないほど豊かで多様な関係性を築かせていただいた。実行委員の業務を担当させていただいていなければ絶対に出会わなかった方々と会議後も密に交流していることは、この一年間がこれから将来に及ぼす影響の大きさを暗示しているのかもしれない。少なくとも私にとって実行委員の経験は人生に無くてはならないものであり、また、今後一生忘れることのない、非常に色濃い経験となった。このような経験をさせて下さった皆様に改めて感謝を述べ、また、日米学生会議の今後の一層の繁栄を願って、私の後書きとする。

慶應義塾大学 法学部政治学科3年
小溝舞

この報告書を...読み返し...てつい「あれ、電波悪いな。聞こえますか？」こんな日常的な通信不良ストレスも、いつしか「おかえり！宇宙から帰ってきたね」という冗談で笑い合えるようになっていた。僭越ながらもこの場をお借りしてそんな2020年という激動の1年にZOOM（コロナ禍で主流となったビデオ通話アプリ）して、振り返っていききたい。

控えめに言って、かなり辛い一年だった。だが、私たちがこの報告書を読み返している頃には「2020年か、そんな年もあったな～」と笑い合っていることだろう。一人一人にとって「自分の価値観が変わる」年となった2020年。未曾有のパンデミックに東京オリンピックの延期、“Black Lives Matter”など、私たちは、将来自分の子供が歴史の教科書を通して知るであろうこの時代の当事者となった。想定外の緊急事態宣言、苦勞して練り上げた企画がまさに出来上がった時、その全てが振り出しに戻った。0から企画の作り直し、進んでは白紙に戻るすごろくゲームのような日々を私達は繰り返した。思い通りにならない現実に、感情を抑えきれず涙することも、ぶつかり合うこともあった。最終的に参加者の安全性を最優先した上で現地でのプログラム開催を断念するという苦渋の決断をした。

そこで、85年間の歴史と共にあり続けた日米学生会議にとって初の挑戦であり、不易流行な打開策となったオンラインの本会議開催。第72回会議の開催にあたり、事務局の皆様をはじめ、アラムナイの皆様、登壇者の方々、実行委員のメンバーや会議参加者、また度重なる変更を受け入れてくださった保護者の皆様なくして、史上初のオンライン会議を成功裏に導くことはできなかった。

自肅要請期間中に東京へ行けないもどかしさは「今自分がいる九州の強みを生かして何かできることを探そう！」という思考へと切り替わった。すぐに行動を起こそうと、在福岡アメリカ領事館との勉強会をオンラインで主催した。セッション後にLINEのグループチャットで「企画ありがとう」が画面いっぱいに流れてきた時、リフレクション（内省タイム）の後画面がリアクションボタン（拍手）で埋まった時、画面上で笑顔と涙が「感染」した時、遠くにいるJASCerの温もりを肌を感じられたような気がした。キャンパスへの立ち入りが制限されまだ友達と語り合えたことのない大学1年生に、「就活氷河期」での将来に不安を募らせる就活生に、全ての参加者にとってのサードプレイスにJASCはなった。そこに「ソーシャルディスタンス」や「三密」という言葉はない。大切な仲間と織りなす「35密」の空間が2020年地球上に存在していたのだ。

学生の学生による学生の為の会議——。それはまだ社会を知らない未熟の学生が、自分の価値観や主観をぶつけられる最高の場所。「コロナと共存」を唱える者と「不要不急」を主張する者、青いロバと赤い象、価値観が二極化した2020年において、日米学生会議では両者の「正義」が否定されることはなかった。自分の発言をミュートにする必要はない。本会議を終える頃には参加者全員がマスクを外し、自分の本音をぶつけた。今までの当たり前とこれからのニューノーマル、2020年オリンピックの聖火は灯されなかったが、日米両国の灯火は消えることはないだろう。

立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部 2年
白石智鏡

日米学生会議のメンバーとして過ごした月日はいったいどれほどだったのだろうか、と終わって考えてみたとき、それはとても一瞬だったように感じる。けれども実感としてはやはり長かった。実に2年半近く日米学生会議の一員として活動していたのだから。稚拙な表現ではあるけれども、その2年半という歳月はそれは内容の濃い年月だった。実は私はこういう場ではあまり振り返りはしたくない性ではあるが、それでも結びのあとがきとして何を書くか、ということを考えて振り返りかえざるを得ない。

参加者としての初めの1年の感想は純粋に楽しい！ということだけであった。同じように国際政治という分野に興味がある学生！がいて、議論を白熱させられる場が地球上に存在したのかという驚きは今でも忘れられない。結局振り返ってみればその楽しさをもう1年感じていたい、と思ったことが実行委員として72回の会議にも関わる決意を後押ししたように感じる。

しかしながら正直なところこの期待を2年目、実行委員として運営するなかできたかと言われればまだわからない。予想だにしていなかった事態が次々起こり、手探りのまま進み続けていたからだ。文字通り試行錯誤の日々であり大変だと感じたこともあった。では楽しくなかったのかといわれるとそういうわけでもない。けれども純粋に楽しかったですか、ときかれるとどうも今現在の私にはそれがわからないのである。ただ、でも議論の場をまた提供することができた、という点においてはある程度の楽しさを再現未来のある地点で振り返った時、「日米学生会議」が自分によって楽しいと感じられるものであればよいと今は思っている。

さて、それでも充足感をもって実行委員としての1年半を走りきることができたのは結局仲間に恵まれたからかもしれない。個人の感想ではあるけれども、それぞれの性格や特徴が上手に調和されていたからこそ、紆余曲折あってもなお1年半実行委員として完走することができたように感じる。だからこそ、人との出会いを大切にしていきたいと強く思うことができた。みなそれぞれに固有の人生を歩んでいてそれぞれに意見があったり、同じ意見にたどり着いていてもそれぞれのベースとなる経験が異なっていたりする。そういう面白さに気付くことができた2年半だったのではないだろうか。

改めて、関わってくれたすべての方々に感謝の気持ちを伝えたい。

東京外国語大学国際社会学部 3年
武末崇義

第71回日米学生会議が終わった時、私は「まだ、みんなといたい!」という軽い気持ちで実行委員に立候補した。第71回日米学生会議は、私にとって今までになかった経験で、ただただ楽しくてたまらないものだった。

実行委員になると、楽しいだけではないことに気づいた。参加者としてさまざまなことを経験して過ごすだけでなく、責任が伴うことを実感した。応募者を集められなかったら、ご支援いただいている皆様にご迷惑をおかけしたらと、不安でいっぱいだった。だから、どんな仕事も全力でやらなければいけない。大変なのはみんな同じ。実行委員のみんなに迷惑をかけてはいけない。そう思いながら、就職活動、卒業論文の執筆、資格試験勉強と日米学生会議の活動で毎日徹夜していた。

ボロボロになって、他のみんなが手を差し伸べてくれた時に、やっと一人ではないことに気づいた。一人で1しかできないことも16人いればその何倍ものことができる。友達でもなく、家族でもなく、仲間だと言える人が16人もできたことは私の財産である。はじめて、全力で喧嘩して、自分の嫌いな部分を振りまいて、でも素直になれなくて。いままで逃げてきた、かっこ悪すぎて、人間らしすぎる自分を痛感した。学生として、最後に全力で日米学生会議にぶつかることができ本当に幸せだと思う。

日本全国を飛びまわって集めた参加者と夢にまで見た渡米が叶わず、客観的に見ると、残念な1年に見えてしまうかもしれない。しかし、私は渡米以上の経験をオンラインでさせてもらったと思う。バーチャル空間のなかでのコミュニケーションの取り方やイベント実行のノウハウだけでなく、前代未聞の状況に学生のチームとして立ち向かうことができたのは本当に貴重な経験だった。また、たくさんのアラムナイの皆様をサポートを受けながら、歴史あるホームページのリニューアルを担当し、Websiteの作成などについても学ぶことができた。

私は、この2年間、未熟な学生にはもったいないほどの素敵な経験を日米学生会議にさせてもらったと思う。それも、大きい愛で日米学生会議を見守ってくださるアラムナイおよび関係者の皆様のおかげである。日米学生会議は、私に本当にたくさんの出会いを提供し、社会人としての一歩も教えてくれた。私もいつかアラムナイの皆様のように学生の希望になる大人になりたい。最後に、2年間を通じてご支援いただいた皆様、そして仲間である実行委員に心より感謝申し上げたい。

早稲田大学 文化構想学部 4年
野澤玲奈

一人暮らしをしている私にとって、自粛期間中にホームシックにならずにいられたのは、JASCのおかげであったと断言できる。振り返れば、友達にも会えず、帰省することも出来ない中、日々のミーティングでの会話、夜な夜な語り合う時間、一人暮らしの私を心配して連絡をくれたJASCの仲間の優しさが、その時自分で自覚していた以上に、支えになってくれていたと感じる。毎日のようにJASCの誰かと話していた日々が今でも時々懐かしく、恋しく思える。

対面、オンラインに関わらず参加者のモチベーションは、会議の成功を左右する大きな鍵だ。しかし、最終的に全面オンライン開催となった第72回会議では、参加者のモチベーションがより一層重要な鍵を握っていたと考える。モチベーションを削ぐ理由はたくさんあった。他の参加者と会えない。渡米のキャンセル。対面で開催予定だった事前研修の全てがオンライン開催に変更。バーチャル空間に作られた「日米学生会議」という環境からワンクリックで退出することもできれば、ワンクリックでディスカッションの輪から外れることもできる。第72回会議は、そういう意味では過去最高に脆弱な会議だったのかもしれない。だからこそ、最後まで第72回日米学生会議実行委員会についてきてくれた参加者には、感謝してもしきれない。会議の枠組みを作ったのは、実行委員かもしれない。しかし、会議を完成させたのは紛れもなく参加者一人一人である。この場をお借りして改めて感謝申し上げたい。ありがとう。

そして、実行委員としての16ヶ月、487日、楽しいことばかりではなかった。忙しい中人一倍タスクをこなしている仲間がいる中で、自分の効率の悪さや、キャパシティの限界に情けなさや無力さを感じた。意見の対立やすれ違いもたくさんあった。だが、JASCに参加していなかったら、普段の大学生活で何回こんな悔しさ、もどかしさ、ぶつかり合いやすれ違いの経験ができただろう。対立より我慢や逃避を選ぶことで、薄っぺらな平和を求めていた私に意思を持つこと、それをしっかり相手に向き合って伝えることの大切さを教えてくれた。また、もう一つの大きな学びは、「自分の当たり前≠相手の当たり前」ということだ。「人それぞれ考え方が違うのだから、そんなことはわかりきったことだ」というツッコミが聞こえてきそう。しかし、私はJASCを通してそれを一般論として頭の中で理解するだけでなく、目の前にいる“その”人の考えに好奇心を持ち、貪欲に相手の考えに触れることで、自分とは全く異なるスコープや“当たり前”の感覚を持った人との出会いを楽しみたいと思うようになった。それは、やはりJASCの中でそんな出会いを経験することが出来たからだ。

最後にはなりますが、未熟な私たち実行委員を温かく見守り、お力添えいただいた国際教育振興会の皆様、International Student Conferences, Inc.の皆様、賛助会の皆様、アラムナイの皆様、そして第72回日米学生会議のプログラムに様々な形で関わってくださった全ての皆様に深く御礼申し上げます。

九州大学 共創学部 3年
野村紗里

日米学生会議での二年間が私の大学生活にこれ以上ない彩りを与えてくれたのは間違いない。が同時に、特に後半一年間は常時 悩みの種でもあった。

参加者として議論の楽しさを満喫した 71 回。特にファイナルフォーラムで学生パネリストを務め、この夏に得たものを伝えようと力を振り絞ったことが私をひとつ成長させてくれた。長年の歴史を引き継ぎ、未来の参加者にバトンを渡そうと意気込んで実行委員に手を挙げた選択には何の後悔もないが、今考えるとその頃の私の覚悟は甚だ脆いものだった。

二年目の JASC 生活が幕を開けると途端に、実行委員として運営の難しさに直面しただけでなく、新型コロナウイルス感染拡大の影響で思うように事が運ばず、葛藤や衝突は数知れず。それでも新しい様式を模索して会議の実施へ突き進んだ。会議の理想像を考える過程で、8 人ないしは 16 人の足並みが揃わないこともあった。思い返せば反省も多いが、衝突を通して自身を見つめ直すきっかけを与えてくれた実行委員のメンバーには感謝している。とにかく一年間、一つ山を超えるとまた別の山、という事態が任期終了まで続くことになった。

実行委員同士も対面で会うことが難しい状況下、コミュニケーションの希薄さが、常に不安をもたらしていたように思う。行事ごとに開催意義、開催形態を話し合うことはもちろん、参加者に何が提供できるのか、ベストを尽くしているか、独りよがりになっていないか不安と自問に明け暮れた。

その不安を打ち砕いてくれたのは、72 回の参加者たちであった。史上初のオンライン夏会議の最終日、リフレクション(会議全体の振り返り)の場で、対面は叶わなかった 59 名が同じ画面上で互いの言葉に耳を傾け、涙する時間を共有できた瞬間、実行委員宛に限らず互いへの感謝の言葉で溢れる空間に触れた瞬間、なんとも言えない喜びがこみ上げ、涙が止まらなかった。対面ではなくとも開催できてよかったのだと、心の底から感じる事ができた。

主担当の冬季会議では、開催可否の検討のため夏会議以降も継続して状況観察し、話し合う必要があった。毎週のように現実と突き合わせたスケジュールの考案と修正、そしてシビアな決断を迫られ、精神的にきつくなかったといえれば嘘になる。同じくらい辛いはずなのに場を和ませようと計らってくれた地球の反対側の同志には頭が上がらない。ハワイ渡航中止と冬季沖縄研修開催中止の決断の際には、参加者の安全確保と参加者への提供価値・JASC の開催意義について何度も何度も話し合った。最後まで実施に向け模索したが、断念することになり、参加者への中止決定通知を一字一句、身を削る思いで書いた記憶がある。その後、参加者から返信、ねぎらいの言葉が届き、ひとつひとつが心にしみた。

日米学生会議で毎年のように議題に上がる「(それぞれの時代に)日米学生会議をやる意義とは」ということについて、私は以前、アラムナイの方から「その国に一人気に掛ける人が増えるだけでその国の見方が変わるものだよ。」という言葉を受けたことがある。結局参加者が対面する機会は作れなかったが、オンライン会議でここまでの繋がりを生み出したことはまさにその見方を変えるきっかけ、ひいては日米関係という大きな歯車の一助となる可能性を秘めているのではないかと考える。第 72 回が「どこにも行けなかった回」ではなく、「どこにも行かずとも『繋がる』ことに成功した歴史的な回」として記憶されることを願って、そして支えてくださったすべての人への感謝を込めて、結びとしたい。

“There are infinite numbers between 0 and 1. There's .1 and .12 and .112 and an infinite collection of others. Of course, there is a bigger infinite set of numbers between 0 and 2, or between 0 and a million. Some infinities are bigger than other infinities. There were days, many of them, when I resented the size of the unbounded set 2020 gave us. Now that I look back on the days of summer conference, I cannot tell you, JASC families, how thankful I am for our little infinity. I wouldn't trade it for the world. You gave me a forever within the numbered days, and I'm grateful. Thank you JASC 72nd!!”

-Quotes arranged from “The Faults in Our Stars by John Green”

早稲田大学政治経済学部 政治学科 4 年
坂東 茉唯

2020年という激動の一年に、総勢59名の学生と第72回日米学生会議を作り上げることができたことは、私にとりかけがえのない宝物となった。そして同時に、実行委員として活動した期間は、人間として大いに成長することができた16ヶ月であった。

「参加者に伝えたい・体験して欲しい価値って何だろう」

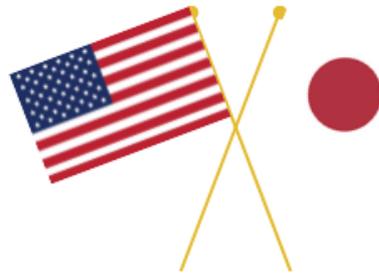
緊急事態宣言が発令され、ゼロから再スタートを切らなければいけなくなった4月から自問自答の日々が始まった。それは同時に、86年という歴史の重み、それを途絶えさせてはならぬという責任感と重圧と戦う日々の始まりであった。長年積み重ねてきた日米学生会議の活動に賛同し、集ってくれた参加者は、期待通りのそして満足のいく経験を体得してもらえるのだろうか。毎日の如く激論を重ね決定した会議テーマや、夜寝る間を惜しんで熟考したプログラム全てをゼロから考え直しながら、無我夢中で会議企画に打ち込んだ。「できるだけ対面で話し合う」ことを重視していた実行委員会のコミュニケーション方法も再構築しなければならず、毎日がトライアンドエラーの繰り返しで、正直とても苦しかった。

しかし、全ての活動が終了した今だからこそ胸を張って言えることがある。それは、16名の実行委員とともに2019年8月から2020年12月という、かけがえのない16ヶ月を走り抜けることができ、本当に本当によかったということだ。日本側の実行委員でコミュニケーションがうまく取れなくなった時、手を差し伸べてくれたのはアメリカ側の実行委員だった。「大丈夫？私から話してみようか？」と1万キロの距離を超えて、熱心に相談に乗ってくれた。夏会議を企画していた際には、「日本語で理解できない部分は多いかもしれないけど、日本側パネリストとのミーティングに参加してもいい？一人より二人の方が心強いでしょう。」と14時間の時差を超えてサポートをしてくれた回数は数えきれない。

「他者とともに働く」ということは、共に学ぶことであり、共に成長することである。また同時に共に悩み、喜びを分かち合うことだ。2020年は社会のあらゆる活動がオンラインに移行され、対面での活動に懐古的な意見が蔓延した。「オンラインだからコミュニケーションをとるのは難しい」と、否定的な意見には枕詞のようにオンラインの五文字がついて周った。しかし、第72回日米学生会議が歩んできた道筋を辿れば、そのようなことは決してないと思う。オンラインで繋がれる今だからこそ、かけられる言葉やできる配慮があり、成し遂げられることがあると思う。そんなことを教えてくれた15名のかけがえのない仲間がこの場を借りて感謝を伝えたい。

かけがえのない16ヶ月を共に歩んでくれて、本当にありがとう！

上智大学法学部国際関係法学科3年
深津佑野



JASC72

第8章

後援・協賛・贊助・協力



第8章 後援・協賛・賛助・協力

ご協力、ご賛助いただいた企業、団体様

(順不同、敬称略)

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

代表理事 金野 洋

事務局 伊部 亜理子

後藤 明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高門宮妃久子殿下

会長 橋本 徹

事務局長 伊部 亜理子

International Student Conferences, Inc.

理事長 Kristy Holch

事務局長 Linda Butcher

【後援】

外務省

国際文化交流審議官 志野 光子

大臣官房人物交流室

室長 内田 立国

課長補佐 村樫 真奈美

留学広報専門員 篠崎 美鶴

文部科学省

大臣官房

国際統括官 田口 康

在日米国大使館

駐日米国臨時代理大使

Joseph M. Young

広報文化交流部・教育人物交流室

教育・人物交流担当官 Grace Choi

教育・人物交流室 三橋乃佑里

井上よう子

一般社団法人日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 岡本 和夫

【71 報告会 72 説明会】

明治大学長 土屋恵一郎

日米学生会議同窓会顧問 青柳 勝栄

日米学生会議同窓会常任理事 細野 恭平

【サイト活動】

アリゾナサイト

The University of Arizona, Assistant

Professor Nathaniel Smith

ロサンゼルスサイト

公益財団法人 米日カウンシル—ジャパン

TOMODACHI スタッフ 宇多田 カオル

裏千家淡交会ロサンゼルス協会

会長 ロバート 掘

インディアナサイト

Ingraham & Associates, Inc.

Larry Ingraham

【広報活動】

関西関連

京都市長 門川 大作

京都市役所

総合企画局国際課推進室

室長 山口 ひかり

橋本 浩之

中野 純二

公益財団法人稲盛財団
 理事 事務局長 姫田和仁
 京都日米協会 事務局長 飯田 健
 茶道裏千家今日庵 大宗匠 千 玄室
 御家元 千 宗室
 一般社団法人茶道裏千家淡交会総本部
 国際部長 弘田佳代子
 課長 湊 雅巳
 鈴木 和佳

日米学生会議同窓会
 副会長 竹本 秀人

島本 晴一郎
 河崎 涼太
 金澤 つき美

【大学説明会関連】

名古屋市立大学 糸教授
 安藤飛悠吾
 木下 朋

東京大学 教授 矢口 祐人
 新郷 雅大
 松井 謙太
 戸嶋 寛太

東海大学 学長 山田 清志
 副学長 吉川 直人
 グローバル推進本部長 中村 晃司
 国際教育センター事務室 梅澤 智光

法政大学
 山崎 綾香
 南 秀 弥

立命館大学
 国際部副部長衣笠国際教育センター長
 磯崎 貴道
 BKC 国際教育センタ国際部 BKC 国際部

BKC 国際課課長補佐 白崎 雄也
 日米学生会議同窓会顧問 今井 義典

鈴木 健司

東京理科大学 八木澤 龍大
 日米学生会議同窓会常任幹事
 教授 武田 興欣

北海道大学 新渡戸カレッジ
 豊福 明日香

国際基督教大学
 准教授 松田 浩道
 村上 真優

京都大学
 教育推進・学生支援部国際教育交流課
 海外留学係専門職員 上木 正博
 雨宮 愛

京都外国語大学
 学長 松田 武
 総合企画室室長 下松谷 勤

同志社大学
 国際課 中嶋 政仁

明治大学
 中野教務事務室 深味 岳人
 教授 山脇啓造
 並木 祐太
 大澤 麻璃
 押切 彩

国際教養大学
 タクール小迫亜満

早稲田大学
 本田 智巳
 白石 拓也

慶應義塾大学
 細田 佳絵

学習院大学

長谷川 信寿

市川 比呂也

森本 大

岐阜大学

グローバル推進機構

国際総務室国際総務係 幸脇 裕輔

小窪 拓司

選考ヘルパー

アドリアン・ウィルダンディヤワン

李 呂威

松田 実

群馬大学

国際センター

越智 貴子

手代木 秀太

若井 香穂

吉岡 楓

九州大学

岩本 華苗

佐々木 彩乃

国際部留学課国際学生交流係 村上晶彦

福岡教育大学

教授 Todd Jay Leonard

岩淵 丈和

福岡女子大学

太田 聡

立命館アジア太平洋大学

教授 五十峰 聖

スチューデントオフィス 乾 さや子

【春合宿】

開会式

一般財団法人国際教育振興会

代表理事 金 野 洋

前代表理事・理事 伊部 正信

オンラインようこそ先輩

岡本実

竹本秀人

秋間修

和田昭穂

岸田守

金野洋

富川秀二

武田興欣

仲尾聡

平竹雅人

守屋彰人

大和亜基

吉野次郎

森田修弘

河崎涼太

竹内智洋

塩崎諒平

新郷雅大

佐々木彩乃

【ホームページ制作活動】

株式会社かるてぼすと 取締役 木下 茂雄

日米学生会議同窓会

常任幹事 乗竹 亮治

齋藤 和平

【事前研修・勉強会】

デロイト勉強会

大沼 雄貴

加藤 優一

【選考活動】

選考・面接委員

日米学生会議同窓会

副会長

竹本 秀人

副会長

秋間 修

副会長

和田 昭穂

事前研修

外務省

北米局日米地位協定室課長補佐

川口 耕一郎

外務省

参与

又吉 進

沖縄県東京事務所

島本晴一郎

田辺 和子

MICE リゾート班副参事 山田 みさよ
熊本学園大学 向井 洋子
成蹊大学 西山 隆成
朝日新聞社 牧野 愛博

安藤 飛悠吾

「米国大統領選と日米関係」勉強会
公益財団法人中曽根平和研究所

理事長 藤崎 一郎

九州勉強会

在福岡アメリカ領事館

首席領事 John C. Taylor

在福岡アメリカ領事館

広報担当領事 Yuki Kondo-Shah

在福岡アメリカ領事館

政治経済担当領事 Daniel Rakove

在福岡アメリカ領事館

広報担当官 宮石 建治

在福岡アメリカ領事館

首席領事秘書 平山 里彩

沖縄勉強会

U.S. Consulate General, Naha
Public Affairs Officer Richard Roberts

【その他活動】

Kaho Maeda

Shunji Fueki

Makiko Miyazaki

植村 凧沙

【防衛大学校研修】

防衛大学校

学校長 國分 良成

特別講義

人文社会科学群国際関係学科

教授 武田 康裕

担当学生 小俣 裕紀

若手懇親会

松居 純平 矢島 ショーン

岡野 慧 島村 明子

印藤 篤臣 須賀川 朋美

塩崎 哲也 井上 雅章

金澤 つき美 山田 裕一

藤島 悠貴

森田 修弘 大谷 慧

松田 浩道 古座 匠

谷崎 迅 竹内 智洋

栗原隆太郎 中澤 耕己

塩崎諒平 木村 優吾

小松崎 遥平 下吹越 愛莉

井上 裕太 大和 亜基

李 呂威 長谷川 信寿

鈴木 悠司 松本 秀也

田中 豪 松尾 恵輔

横田 真彩 田中 裕将

アドリアン・ウィルダンディヤワン

【フィールドトリップ(FT)活動】

文化 FT

上智大学 教授 出口 真紀子

大東 久美

環境 FT

環境省 清家 裕

JICA 中国 岩谷 允六有

岡山大学 青尾 謙

日本経済新聞社 花房 良祐

環境インタビュー

環境省 安陪 達哉

環境省 井関 勇一郎

北海道大学 仲岡 雅裕

北海道大学 長谷川 貴
Earth Company 高橋 祐樹
メディア FT

今井 義典

【本会議】

米平和研究所 Paul Kyumin Lee

福島民報社 鈴木 仁

福島民友社 桑田 広久

福島県企画調整部復興総合計画課

佐藤 安彦

菅野 望

青山学院大学 教授 武田 興欣

スミス大学 Dr. Shizuka Hsieh

合同会社 HAKO

Mr. Stéphane E. Fouché

The Community Foundation

Jamie Miura

おかえりコミュニティー

Justin Kawaguchi

Human Rights Watch 左元

広島市立大学 Professor Robert Jacobs

小倉 桂子

早稲田大学 Professor Roland Kelts

【オンラインファイナルフォーラム】

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃久子殿下

日米学生会議同窓会会長 岡本 実

A former U.S. Secretary of Transportation

Norman Mineta

【オンライン報告会】

小布施町役場総務課長 大宮 透

【その他】

日米学生会議同窓会

会長

岡本 実

副会長

竹本 秀人

秋間 修

和田 昭穂

竹内 幸美

岸田 守

幹事長

冨川 秀二

常任幹事

井伊 雅子

木ノ上高章

福谷 尚久

武田 興欣

大塚 雄三

平竹 雅人

細野 恭平

大和 亜基

乗竹 亮治

加藤 道子

竹内 友里

監事

仲尾 聡

飯田 智紀

顧問

小林 規威

降旗 健人

天野 順一

辻 喜久子

橋本 徹

今井 義典

青柳 勝栄

山田 勝

グレン・S・フクシマ

橘・フクシマ・咲江

【賛助・協賛】

【日米学生会議賛助団体】

一般社団法人 尚友倶楽部
公益財団法人平和中島財団
The Miner Foundation
一般社団法人 霞会館
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人三菱 UFJ 国際財団
一般社団法人日米協会

【日米学生会議賛助企業】

住友商事株式会社

【国際教育振興会賛助会】

国際教育振興会賛助会法人会員

株式会社アルコパートナーズ
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
キッコーマン株式会社
サントリーホールディングス株式会社
株式会社 CEAFOM
日本製鉄株式会社
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禅林寺
ダウ・ケミカル日本株式会社
タカラベルモント株式会社
デルタ航空会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
一般財団法人凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
株式会社ニコン
日本空港ビルデング株式会社
株式会社日本政策投資銀行

日本生命保険相互会社
日本テレビ放送網株式会社
日本電信電話株式会社
ネスレ日本株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
びあ株式会社
富士急行株式会社
富士ゼロックス株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ
株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社
三菱 UFJ リース株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱 UFJ 銀行
森ビル株式会社
ユナイテッド・マネジャーズ・ジャパン

国際教育振興会賛助会個人会員

今井 義典
岡本 実
北城 格太郎
木村 浩一郎
竹本 秀人
橘・フクシマ・咲江
富川 秀二
橋本 徹
アーネスト・エム・比嘉
平竹 雅人
藤崎 一郎
山田 勝
茂木 健一郎
和田 昭穂

第 72 回日米学生会議 日本側報告書

発行月	2021 年 5 月
編集者	白石智鏡 深津佑野 小溝舞 野村紗里 木村勇人 野澤玲奈
編集委員	内林大志 太田智寧 中澤拓也 亀井龍 大東千潤 須藤直太郎
表紙	白石智鏡
発行	日米学生会議 報告書編集委員会 〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-6-2 コモレ四谷グローバルスクエア 3 階 一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議事務局

Japan-America Student Conference
Since 1934

主 催：一般財団法人 国際教育振興会
企画・運営：第 72 回日米学生会議 実行委員会